

# 一貫西遺跡

—津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告 3 —

1990. 3

津山市土地開発公社  
津山市教育委員会

# 一貫西遺跡

—津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告 3 —

1990. 3

津山市土地開発公社  
津山市教育委員会

題字：永礼速造津山市長

## 序

一貫西遺跡は津山中核工業団地造成に伴ない発掘調査された遺跡であります。当初、本遺跡は周知の遺跡の扱いがなされていませんでした。すなわち、遺跡分布地図では空白地域だったのです。そこで、具体的に開発計画が決定した際、再度分布調査を実施しました。やはり遺物を採集することはできませんでした。しかし、南面するゆるやかな丘陵であり、遺跡の存在は容易に推測することができました。そこで原作者である津山市土地開発公社と協議した結果、とりあえず確認調査を実施することで合意しました。果して、遺跡は丘陵のほぼ全域に広がることを確認されました。その後、保存の協議も重ねましたが、遺跡を保存すると造成ができないという結論に達し、記録保存を余儀なくされたのであります。54haという広大な団地内にはこのように記録保存措置を講じた遺跡が10ヶ所あります。本書はその第3集にあたる報告書であります。

本遺跡は弥生時代から古墳時代、奈良時代、中世へと続く複合遺跡であります。中でも奈良時代の製鉄関連の遺構群は注目すべきものがあると思います。製鉄炉こそ後世の畑地造成により遺存していませんでしたが、炉壁・鉄滓の捨て場、建物址群が一体のものとして把握されたことは大変貴重な資料を提供してくれたものと確信いたしております。

ここに、ささやかではございますが情報をいち早く公表したいとの立場から、報告書を刊行することにいたしました。各位の御活用をお願いします。

末筆ではございますが、発掘調査から報告書作成にいたるまで多大の御協力をいただいた津山市土地開発公社、並びに関係者各位に対し厚く御礼申し上げる次第であります。

平成2年3月31日

津山市教育委員会

教育長 萩原 賢二

## 例　　言

1. 本書は津山中核工業団地造成に伴う一貫西遺跡の発掘調査報告書である。
1. 津山中核工業団地内には10ヶ所の遺跡がある。本書はその第3集にあたるものである。
1. 発掘調査経費はすべて、原因者である津山市土地開発公社の負担によるものである。
1. 発掘調査及び報告書の作成は津山市教育委員会文化課主事行田裕美が担当した。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また、方位は磁北である。
1. 本書には挿図等に遺構の略称を用いた。略称名は次のとおりである。  
S H：住居址、S B：建物址、S T：段状遺構、S G：土壙墓、S K：土壙、S D：溝  
S X：製鉄遺構
1. 本書第8図に使用した「津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1（津山市東部）を複製したものである。
1. 遺物整理、報告書作成にあたっては杉山紀子、飯田和江、野上恭子、木村祐子、内田まち子、木元英子、岩本えり子の協力を得た。
1. 本報告は紙数の関係で、多くをふれることができなかった。津山中核工業団地内の発掘調査のまとめとして最後に予定されている報告書で補足したい。

## 本文目次

I	津山中核工業団地造成と発掘調査に至る経過	1
1	津山中核工業団地造成に至る経過	1
2	発掘調査に至る経過	2
II	津山中核工業団地内の遺跡と周辺の遺跡	4
1	津山中核工業団地内の遺跡	4
2	周辺の遺跡	7
III	-貫西遺跡	9
1	位置と立地	9
2	調査の経過	9
(1)	調査に至る経過	9
(2)	調査経過	9
(3)	調査体制	9
3	調査の記録	10
(1)	弥生時代	10
(2)	古墳時代	45
(3)	奈良時代	55
(4)	平安末～鎌倉時代	77
(5)	近世	81
(6)	その他の	82
4	まとめ	84
(1)	弥生時代の集落と時期について	84
(2)	古墳の築造時期について	88
(3)	製鉄関連遺構について	89

## 挿 図 目 次

第1図	津山市位置図	1
第2図	津山中核工業団地位置図	2
第3図	第I・II期工事区分図	3
第4図	周知の遺跡分布図	4
第5図	調査前航空写真（北から）	3
第6図	トレーンチ設定状況航空写真（南から）	3
第7図	津山中核工業団地内遺跡分布図（S = 1 : 10,000）	4
第8図	津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図（S = 1 : 25,000）	7
第9図	一貫西道路遺構全体図（S = 1 : 800）	11
第10図	住居址1 平面・断面図（S = 1 : 80）	12
第11図	住居址1 出土遺物	13
第12図	住居址2 平面・断面図（S = 1 : 80）	14
第13図	住居址2 出土遺物	15
第14図	住居址3 平面・断面図（S = 1 : 80）	16
第15図	住居址3 出土遺物(1)	17
第16図	住居址3 出土遺物(2)	18
第17図	住居址4 平面・断面図（S = 1 : 80）	19
第18図	住居址4 出土遺物	20
第19図	住居址5 平面・断面図（S = 1 : 80）	21
第20図	住居址5 出土遺物(1)	22
第21図	住居址5 出土遺物(2)	23
第22図	建物址1 平面・断面図（S = 1 : 80）	24
第23図	建物址2 平面・断面図（S = 1 : 80）	25
第24図	段状遺構1～5 平面・断面図（S = 1 : 160）	26
第25図	段状遺構2 出土遺物	27
第26図	段状遺構3 出土遺物	28
第27図	段状遺構4 出土遺物	28
第28図	段状遺構5 出土遺物	29
第29図	段状遺構6～9、13、14 平面・断面図（S = 1 : 160）	30
第30図	段状遺構6 出土遺物	31

第31図	段状遺構 9 出土遺物(1).....	32
第32図	段状遺構 9 出土遺物(2).....	33
第33図	段状遺構14出土遺物.....	34
第34図	段状遺構10平面・断面図 (S = 1 : 80) .....	34
第35図	段状遺構15平面・断面図 (S = 1 : 80) .....	34
第36図	段状遺構15出土遺物.....	34
第37図	溝平面位置図 (S = 1 : 200).....	35
第38図	溝遺物出土状況 (S = 1 : 20) .....	36
第39図	溝出土遺物(1).....	37
第40図	溝出土遺物(2).....	38
第41図	溝出土遺物(3).....	39
第42図	石 器(1).....	41
第43図	石 器(2).....	42
第44図	遺構に伴わない遺物(1).....	43
第45図	遺構に伴わない遺物(2).....	44
第46図	1号墳平面・断面図 (S = 1 : 80) .....	45
第47図	1号墳石室平面・断面図 (S = 1 : 60) .....	46
第48図	1号墳出土遺物(1).....	47
第49図	1号墳出土遺物(2).....	47
第50図	2号墳・段状遺構11平面・断面図 (S = 1 : 80) .....	48
第51図	2号墳出土遺物.....	48
第52図	3号墳平面・断面図 (S = 1 : 80) .....	49
第53図	3号墳主体部平面・断面図 (S = 1 : 30) .....	50
第54図	3号墳出土遺物.....	51
第55図	土塙墓 2 平面・断面図 (S = 1 : 20) .....	52
第56図	土塙墓 2 出土遺物.....	52
第57図	段状遺構17平面・断面図・ (S = 1 : 100) .....	53
第58図	段状遺構18平面・断面図 (S = 1 : 100) .....	53
第59図	段状遺構17出土遺物.....	54
第60図	段状遺構18出土遺物.....	54
第61図	段状遺構32平面・断面図 (S = 1 : 80) .....	55
第62図	製鉄関連遺構平面図 (S = 1 : 400) .....	56
第63図	住居址 6 平面・断面図 (S = 1 : 80) .....	57

第64図	住居址 6 出土遺物	57
第65図	建物址 3、段状遺構22平面・断面図 (S = 80)	58
第66図	建物址 3 出土遺物	58
第67図	建物址 4 平面・断面図 (S = 1 : 80)	59
第68図	建物址 5、段状遺構23平面・断面図 (S = 1 : 80)	60
第69図	建物址 6、段状遺構20・21平面・断面図 (S = 1 : 80)	60
第70図	建物址 7・8 平面・断面図 (S = 1 : 80)	61
第71図	建物址 7 出土遺物	62
第72図	建物址 8 出土遺物	62
第73図	段状遺構19平面・断面図 (S = 1 : 80)	62
第74図	段状遺構19出土遺物	63
第75図	段状遺構25平面・断面図 (S = 1 : 100)	64
第76図	段状遺構26平面・断面図 (S = 1 : 100)	64
第77図	段状遺構25出土遺物	65
第78図	段状遺構26出土遺物	66
第79図	段状遺構27平面・断面図 (S = 1 : 80)	66
第80図	段状遺構27出土遺物	67
第81図	段状遺構28・29平面・断面図 (S = 1 : 80)	67
第82図	段状遺構28出土遺物	68
第83図	段状遺構29出土遺物(1)	68
第84図	段状遺構29出土遺物(2)	69
第85図	段状遺構29出土遺物(3)	70
第86図	段状遺構34平面・断面図 (S = 1 : 80)	71
第87図	段状遺構34出土遺物	72
第88図	製鉄遺構平面・断面図 (S = 1 : 80)	72
第89図	瓦	73
第90図	鐵滓・炉壁捨て場断面図 (S = 1 : 80)	74
第91図	鐵滓・炉壁包含層出土遺物	75
第92図	遺構に伴わない遺物(1)	76
第93図	遺構に伴わない遺物(2)	77
第94図	建物址 9 ~ 12、上塙40平面・断面図 (S = 1 : 80)	78
第95図	建物址11出土遺物	78
第96図	段状遺構16平面・断面図 (S = 1 : 80)	79

第97図 段状遺構16出土遺物(1).....	79
第98図 段状遺構16出土遺物(2).....	79
第99図 段状遺構24平面・断面図 (S = 1 : 80) .....	79
第100図 段状遺構24出土遺物.....	80
第101図 土壙墓1平面・断面図 (S = 1 : 20) .....	80
第102図 土壙墓1出土遺物.....	81
第103図 土壙40平面・断面図 (S = 1 : 20) .....	81
第104図 土壙40出土遺物.....	82
第105図 石列遺構平面図 (S = 1 : 80) .....	83
第106図 石列遺構出土遺物.....	84
第107図 土壙1~12平面・断面図 (S = 1 : 80) .....	85
第108図 土壙13・15・17~26平面・断面図 (S = 1 : 80) .....	86
第109図 土壙27~38平面・断面図 (S = 1 : 80) .....	87
第110図 土壙39・41~48平面・断面図 (S = 1 : 80) .....	88

## 図 版 目 次

図版1-1 遠路遠景(北から)	図版9-2 土壙墓2
2 トレンチ設定期間(東から)	図版10-1 段状遺構17
図版2-1 住居址1	2 段状遺構18
2 住居址2	図版11-1 建物址3~8
図版3-1 住居跡3	2 住居址6
2 住居址4	図版12-1 段状遺構25~30
図版4-1 住居址5	2 段状遺構29
2 建物址1	図版13-1 段状遺構29出土状態
図版5-1 建物址2	2 製鉄遺構、段状遺構34、炉壁・鉄
2 段状遺構15	洋捨て場
図版6-1 濃遺物出土状態	図版14-1 段状遺構34
2 1号墳	2 製鉄遺構
図版7-1 1号墳周溝遺物出土状態	図版15-1 炉壁・鉄滓出土状態
2 1号墳周溝陶器出土状態	2 炉壁・鉄滓堆積状態
図版8-1 2号墳、段状遺構11	図版16-1 建物址9~12
2 3号墳	2 土壙40
図版9-1 3号墳上部	図版17-1 土壙墓1

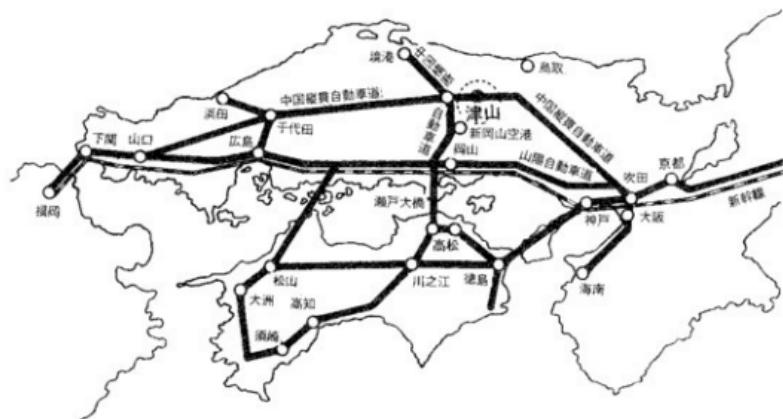
図版17-2	土壌墓1遺物出土状態	図版23	出土遺物(3)
図版18-1	石列遺構全景(東から)	図版24	出土遺物(4)
2	石列遺構全景(南から)	図版25	出土遺物(5)
図版19-1	石列遺構	図版26	出土遺物(6)
2	石列遺構石臼出土状態	図版27	出土遺物(7)
図版20	土壤	図版28	出土遺物(8)
図版21	出土遺物(1)	図版29	出土遺物(9)
図版22	出土遺物(2)		

## I 津山中核工業団地造成と発掘調査に至る経過

### 1 津山中核工業団地造成に至る経過

昭和50年に開通した中国縦貫自動車道は津山市の産業・教育・文化・レクリエーション等あらゆる面に大きな影響を与えた。市内の東に津山インター、西には院庄インターが設置され、それに接続する幹線道路網を主軸として、山陰と山陽、阪神圏と西日本の結接点として位置的な重要性が高まっている。さらに将来中国横断自動車道、瀬戸大橋及び新岡山空港の建設と相まって、中国地方内陸部における交通の要衝となるものと予想され、津山市は内陸部最大の都市として今後ますます発展が期待されている。

現在、津山市には院庄工業団地、綾部工業団地、草加部工業団地、国分寺工業団地、高野工業団地の5つの工業団地があるが、いずれも企業誘致が完了しており、今後さらに企業の進出が予想されている。そこで津山市は地域経済の活性化と雇用の拡大をはかり若者が定住できる地域社会をめざして、本格的な工業団地である津山中核工業団地の建設を決定したのである。この計画は昭和50年に計画されたもので、中国縦貫自動車道の開通により社会的諸条件が好転する背景の中で、津山圏域の定住圈計画でもある津山新都市整備圏計画の中に計画された東部に勝央中核工業団地(100ha)、中央に津山工場公園(154ha)、西部に久米工場公園(170ha)と通産省の工業再配置政策の本旨にかなった内陸工業の開発拠点として、地域振興整備公団の事業採択を要請してきた。しかし、昭和50年3月、最終的に津山市独自で対応することを決定し、



第1図 津山市位置図

従来津山工場公園と呼称していたものを現在の津山中核工業団地の名称に変更した。その後、工業適地指定をし、農業振興地域を解除して都市計画の用途指定をするなどの推進を図り、昭和57年から地権者交渉を開始し、協力を得られなかつた地域を除き最終的に54.1haに規模を縮小し工事を発注する運びとなった。

## 2 発掘調査に至る経過

昭和59年5月10日付津土開公第4号で文化財保護法第57条の3にもとづき、津山市土地開発公社理事長永礼達造から「埋蔵文化財に関する協議について（通知）」が提出された。これは、事業予定地の工区を当初第Ⅰ期工事、第Ⅱ期工事の2工区に分けていた段階（第3図）の第Ⅰ期工事部分約123,000m<sup>2</sup>に相当するものである。これを受けて津山市教育委員会では地形的みて、周知の遺跡（第4図）以外にも容易に遺跡の立地が予測されたので立木伐採後改めて分布調査を実施することにした。立木伐採後の分布調査ではかなりの範囲にわたって遺跡の立地が予測されたので確認調査を実施することにした。確認調査はバックホーを借上げ、幅2mのトレーナーを等高線走向に直行するように5m間隔で設定した。その後、発掘作業員による精査を行った。期間は6月27日～7月5日までを費やした。この結果、遺跡は丘陵のほぼ全域に拡がることが確認され、一貫西遺跡と命名した。東接する一貫東遺跡は前方後円墳1、円墳1、方墳1の周知の遺跡に加え、弥生土器の散布も認められたので全面発掘調査の実施は避けられなかった。

第Ⅱ期工事分については、昭和60年11月27日付



第2図 津山中核工業団地位置図



第3図 第Ⅰ・Ⅱ期工事区分図



第4図 周知の遺跡分布図

津土開公第17号で協議がなされた。面積は約462,000m<sup>2</sup>である。この地域についても山林原野であり、前回と同様の扱いをすることとなった。すなわち、立木伐採後再度協議をするという



第5図 調査前航空写真（北から）



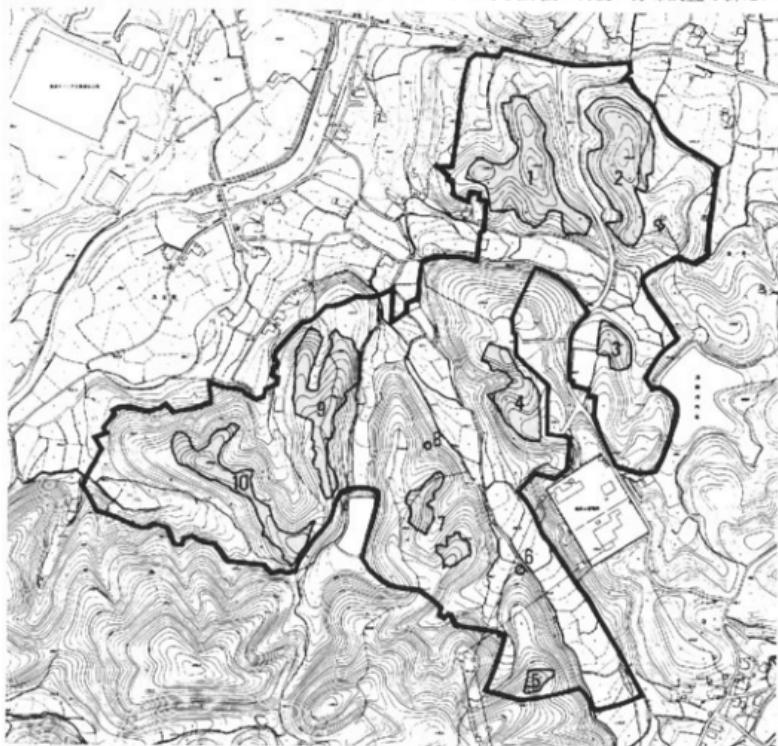
第6図 トレンチ設定状況航空写真（南から）

ことである。立木伐採後新たに発見した埋蔵文化財は円墳4基であった。しかし、一貫西遺跡の場合と同様、地形的に遺跡の立地が予測される地点については確認調査を実施することで合意した。この結果、周知の遺跡も含めて深田河内遺跡、別所谷遺跡、崩レ塚古墳群、クズレ塚古墳、崩レ塚遺跡、柳谷古墳、大畠遺跡、小原遺跡が調査対象となったのである。

## II 津山中核工業団地内の遺跡と周辺の遺跡

### 1 津山中核工業団地内の遺跡

事業計画予定地内の周知の遺跡は昭和51年の分布調査時では前方後円墳1（一貫東1号墳）円墳1（一貫東2号墳）、方墳1（一貫東3号墳）、弥生土器・須恵器の散布地2ヶ所（崩レ塚遺跡、大畠遺跡）が認められるにすぎなかった。しかし、立木伐採後の再度の分布調査で新たに



第7図 津山中核工業団地内遺跡分布図 (S = 1 : 10,000)

円墳4基（クズレ塚古墳、大畠1・2号墳、小原1号墳）を発見した。しかし、その後のトレントによる確認調査で周知の遺跡も含め、最終的に10遺跡を数えるにいたった。以下、遺跡ごとに概要を記すことにする。

### 1 一貫西遺跡

弥生時代中期の集落、古墳3基、奈良時代と考えられる製鉄関連遺構群よりなる。弥生時代中期後半の集落は住居址4軒、建物址2棟、段状造構等により構成される。古墳の内訳は5世紀末頃と考えられる方墳2基と6世紀末頃と考えられる円墳1基である。製鉄関連遺構としたものには住居址1軒、建物址6棟、段状遺構、廐津捨て場等がある。製鉄炉は後世の畠地造成のため遺存していなかった。

### 2 一貫東遺跡

弥生時代後期の集落、貯蔵穴群、土塹墓群、古墳8基、中世の建物址等よりなる。弥生時代後期の集落は住居址10軒、建物址4棟、段状造構等により構成される。貯蔵穴は47基、土塹墓は49基を数える。古墳の内訳は前方後円墳1基、円墳3基、方墳4基である。時期はいずれも5世紀代と考えられる。尚、前方後円墳は緑地公園に取り入れ現状保存措置を講じた。中世に属するものには建物址2棟、段状造構等がある。

### 3 深田河内遺跡

弥生時代中期の集落、古墳時代の段状造構、中世の建物址等よりなる。弥生時代中期の集落は住居址2軒、建物址1棟より構成される。古墳時代の段状造構には鍛冶炉も含まれる。中世の建物址は2軒を数える。

行田裕美・保田義治・木村祐子『深田河内遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第26集 1988年

### 4 別所谷遺跡

弥生時代中期の集落、奈良時代の段状造構よりなる。弥生時代中期の集落は住居址8軒、長方形竪穴住居状造構1軒、建物址9棟、段状造構等により構成される。奈良時代の段状造構からは鉄鋤が出土している。

### 5 崩れ塚古墳群

方墳3基、円墳1基より構成される古墳群である。方墳3基はいずれも箱式石棺を主体部にもち、円墳は石蓋土壙墓である。いずれの古墳からも出土遺物はなく、時期は断定できない。

### 6 クズレ塚古墳

昭和27年、一部調査された古墳である（註1）。横穴式石室を主体部を持つ円墳である。横穴式石室現存長約9mを測り、津山市内では最大級のものである。石室の奥壁側には陶棺1体が納められていた。時期は6世紀後半～7世紀初頭頃と考えられる。古墳の下層から焼けた礫群と共に縄文土器23点が出土した。

### 7 崩れ塚遺跡

弥生時代中期の集落、炭窯と考えられている窓状造構3基よりなる。弥生時代中期の集落は住居址3軒、長方形住居状造構1軒、段状造構等より構成される。

保田義治・行田裕美『崩レ塚遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集 1989年

#### 8 柳谷古墳

横穴式石室を主体部にもつ小円墳である。銀象嵌頭椎大刀把頭、鞘尾金具が出土した。時期は6世紀末~7世紀初頭と考えられる。

保田義治・行田裕美『柳谷古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集 1988年

#### 9 大畑遺跡

弥生時代後期の集落、古墳2基、製鉄関連遺構等よりなる。弥生時代後期の集落は住居址、建物址、段状造構等により構成される。他に土壙墓も検出されている。古墳はどちらも木棺直葬墳であり、時期は6世紀前半頃と考えられる。製鉄に関連する遺構には住居址、建物址、鉄滓集中地点等がある。時期は7世紀前半頃と考えられる。他に炭窯と考えられている窓状造構1基がある。

#### 10 小原遺跡

弥生時代後期の集落、古墳4基、炭窯と考えられている窓状造構3基よりなる。弥生時代後期の集落は住居址16軒、建物址4棟、貯蔵穴12基、段状造構等により構成される。古墳はいずれも円墳である。1号墳は箱式石棺、2号墳は土壙、3号墳は石蓋土壙を主体部にもつ。4号墳は周溝が検出されただけで、内部主体は不明である。1号墳と2号墳には製塙土器が伴出している。時期は5世紀末~6世紀初頭頃と考えられる。

第1表 津山中核工業団地内遺跡調査一覧表

番号	遺跡名	調査面積	調査期間	調査担当者	報告書刊行予定年度
1	一貫西遺跡	22,000m <sup>2</sup>	S59 S61 11/26~5/26	行田 裕美	平成元年度 津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告3
2	一貫東遺跡	20,000m <sup>2</sup>	S60 S61 3/7~12/2	濱 哲夫	平成3年度 津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告9
3	深田河内遺跡	3,300m <sup>2</sup>	S61 %~%, %~%	行田 裕美	昭和63年度(既刊) 津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告2
4	別所谷遺跡	9,400m <sup>2</sup>	S61 7/26~10/23	行田 裕美	平成2年度 6
5	崩レ塚古墳群	1,400m <sup>2</sup>	S62 8/28~10/19	小郷 利幸	平成元年度(既刊)
6	クズレ塚古墳	200m <sup>2</sup>	S62 8/4~11/6	小郷 利幸	6
7	崩レ塚遺跡	5,100m <sup>2</sup>	S62 S63 10/7~1/30	保田 義治	平成元年度(既刊) 5
8	柳谷古墳	100m <sup>2</sup>	S62 10/9~11/12	保田 義治	昭和62年度(既刊) 1
9	大畑遺跡	18,000m <sup>2</sup>	S61%~%, S62%~% S62%~%, S63%~%	行田 裕美 小郷 利幸 保田 義治	平成2年度 7
10	小原遺跡	12,000m <sup>2</sup>	S61%~S62%~S62%~% S62%~S63%	行田 裕美 小郷 利幸 木村 栄子	平成2年度 8

## 2 周辺の遺跡

津山中核工業団地は吉井川の支流広戸川の東岸下流域の津山市瓜生原・金井地区に位置する。この一帯は標高130~150mの丘陵と比高差30~50mの平野部が樹枝状に入りこんだ複雑な地形を呈している。この一帯から広戸川と同じく吉井川の支流である加茂川流域にかけての地域は非常に遺跡の密な部分である。



第8図 津山中核工業団地内遺跡（トーン部分）と周辺主要遺跡分布図（S = 1 : 25,000）

1 津山中核工業団地造成地内遺跡	2 野介代遺跡	3 押入西遺跡
4 押入飯綱神社古墳群	5 獅塚遺跡	6 能満寺古墳群
7 六ツ塚古墳群	8 玉洲大塚古墳	9 眼山遺跡
10 三毛ヶ池古墳群	11 車塚古墳群	12 天神原遺跡
13 欽山古墳群	14 天王山古墳	15 和田古墳
16 新塚古墳	17 美作国分尼寺跡	18 美作国分寺跡
19 長欽山古墳群	20 隠里古墳群	21 西吉田遺跡
22 金井別所遺跡	23 梶原遺跡	24 岡田遺跡

津山市内の集落遺跡の開始は弥生時代前期にまでさかのぼるが、これは現在の津山市街地、宮川下流域に限定されており普遍的なものではない。これが各地域に広く認められるようになるのは弥生時代中期以降である。この時期から順を追って津山中核工業団地周辺の遺跡を概観してみたい。まず弥生時代中期に属する遺跡として、押入西遺跡、西古田遺跡、金井別所遺跡等があげられる。これらの遺跡はいずれも住居址数軒から構成されるもので、集落研究、土器の編年研究の上で貴重な資料を提供するものである。後期の遺跡としては環濠集落で著名な天神原遺跡があげられる。古墳時代になるとこの地域は津山市内において最も重要な地域となる。すなわち、津山市内最古と考えられている前方後円墳日上天王山古墳、現存約60基の円墳より構成される古式の群集墳日上歓山古墳群が同一丘陵上に立地することである。これは瀬戸内海から吉井川を北上した際、津山盆地の玄関口、加茂川との合流点にあたるという地理的条件に恵まれたことに起因するものであろう。さらに奈良時代には美作国分寺、同國分尼寺もこの地域に建立されたように古代においては大変重要な役割を担った地域であったのである。

(註1) 渡辺健治「津山市横木クズレ塚陶棺古墳」『古代古墳』第7集 1971年

第2表 津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図対照表

1. 津山中核工業団地内遺跡	
2. 野介代遺跡	河本 清・橋本惣司・柳瀬昭彦「野介代遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3」1973年
3. 押入西遺跡	河本 清・橋本惣司・下沢公明・井上 弘・柳瀬昭彦「押入西遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3」1973年
4. 押入坂廻神社古墳群	河本 清・橋本惣司・柳瀬昭彦「押入坂廻神社古墳群」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4」1973年
5. 狐塚遺跡	河本 清「狐塚遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2集1974年
6. 能満寺古墳群	今井 勿「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史』第1巻原始・古代1972年
7. 六ツ塚古墳群	今井 勿「六ツ塚古墳群調査略報」津山市文化財調査略報3 1962年・「六ツ塚古墳群」津山市文化財調査略報No.4 今井 勿「六ツ塚1号墳調査略報」津山市文化財調査略報7 1966年・近藤義郎「岡山県津山市六ツ塚古墳群」『日本考古学年報15』1967年
8. 玉琳大塚古墳	今井 勿「津山市川崎玉琳大塚調査報告」津山市文化財調査略報第1集1960年
9. 鶴山遺跡	渡 哲夫「八出雲山鶴山遺跡発掘調査報告」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第3集1977年
10. 三毛ヶ池古墳群	
11. 車塚古墳群	「井口車塚古墳」「津山の文化財」1983年
12. 天神原遺跡	河本 清・橋本惣司・下沢公明・柳瀬昭彦「天神原遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7」1975年
13. 歓山古墳群	「日上歓山古墳群」「津山市埋蔵文化財調査略報No.4 今井 勿・近藤義郎「群集墳の盛行」「古代の日本4」中国・四國1970年」「日上天王山古墳と歓山古墳群」「津山の文化財」1983年
14. 天王山古墳	「日上天王山古墳と歓山古墳群」「津山の文化財」1983年
15. 和田古墳	行田裕美「日上と和田古墳」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第6集1981年
16. 鶴塚古墳	「國分寺鶴塚古墳」「津山の文化財」1983年
17. 美作国分尼寺跡	渡 哲夫「美作国分尼寺跡発掘調査報告」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集1983年
18. 美作国分寺跡	渡 哲夫・安川豊史・行田裕美「美作国分寺跡発掘調査報告」1980年
19. 長歓山古墳群	河本 清「美作考古学の現状と課題」「古代内備」第2集1971年 今井 勿「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史』第1巻原始・古代1972年
20. 隠里古墳群	渡辺健治「美作隱里式石棺調査報告」「古代古墳」第2集1971年
21. 西古田遺跡	行田裕美「西古田遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集1985年
22. 金井別所遺跡	行田裕美・保田義治・小郷利章「金井別所遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集1988年
23. 猪塚遺跡	田中 滉・井上 弘「猪塚遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3」1971年
24. 岡田遺跡	1971年に津山市教育委員会が発掘調査を実施 報告書未刊

### III 一貫西遺跡

#### 1 位置と立地

一貫西遺跡は津山市金井屯第501番地他に所在する。樅原町との行政区画を分かつ和気山から北に樹枝状に派生した尾根は北に近づくにつれ、より複雑な様相を呈している。すなわち尾根単位にさらに小支谷が乱方向に入り込み、独立丘陵状を呈するのが点在している。一貫西遺跡はこれらの中の最も北に位置する丘陵のほぼ全域に相当する。平野部との比高差は約20~30mを測る。

#### 2 調査の経過

##### (1) 調査に至る経過

前述のとおり、本遺跡は周知の遺跡ではなかった。しかし、地形的にみて容易に遺跡の存在が想定されたので、原因者である津山市土地開発公社と協議し、第Ⅰ期工事分の「埋蔵文化財に関する協議について(通知)」を提出していただくよう依頼した。昭和59年5月10日付津土開公第4号で提出されたのを受け確認調査を実施した。確認調査の結果、遺跡はほぼ全域に広がることが判明し、本調査を実施するはこびとなった。

##### (2) 調査経過

確認調査はバックホーを借上げ、幅2mのトレンチを約5m間隔で設定した。その後、発掘作業員による精査を行った。期間は昭和59年6月27日~7月5日までを費した。

本調査は昭和59年11月26日~昭和60年5月26日まで実施した。表土剥ぎは事前に済ませておいた。調査は南側の製鉄関連の遺構群から着手し、漸次北へ進むという工程をとり、最後に谷部の鉄滓包含層の除去とその下層の弥生時代中期の溝の調査をした。

この間、津山市野介アタイ遺跡の緊急発掘調査が入り、6月6日~7月27日まで併行して調査を実施した。

##### (3) 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

津山市教育委員会	教育長	福島祐一(～H1.6.30)
"	教育次長	萩原賢二(H1.7.1～)
	文化課長	内田康雄(～S63.3.31)
"		須江尚志(S63.4.1～)

文化係長 糸山三千穂

主 事 行田裕美（調査担当）

整 理 員 飯田和江、杉山紀子、野上恭子

発掘作業員 芦田寛之 植垣光男 小原孝一 金崎 正 小林 信 龍門安三 安藤敏子  
植垣幹子 神崎きみ江 衣笠宇多江 片山久子 下山麗子 小林篤子 下山  
章子 龍門和子 藤嶋雪子 丸尾重徳 山本博文 山本由美子 平尾昌忠  
馬場由次 岡本京子 中矢 立 安藤泰子 今石和美

なお、発掘調査から報告書作成にいたるまで、下記の方々の指導、助言、協力を得た。記して厚く御礼申し上げる次第である。

小谷善守 関 清 中山俊紀 安川豊史 渡辺健治 渡 哲大 河本 清 光永真一 鎌木  
義昌 水内昌康 田中清美 新納 泉 白石 純 切友明子 池上 博 大沢正己 近藤義  
郎 平井泰男 平井 勝

### 3 調査の記録

一貫西遺跡は発掘調査面積約22,000m<sup>2</sup>にも及ぶ大規模なものである。時期的には弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代～中世にかけての4時期に大別できる。各時期の遺構の占地は非常に顕著に分かれており、時期別の遺跡の占地状況を把握する上で有益な資料を提供するものと評える。

以下、各時期ごとに概略を述べることとする。

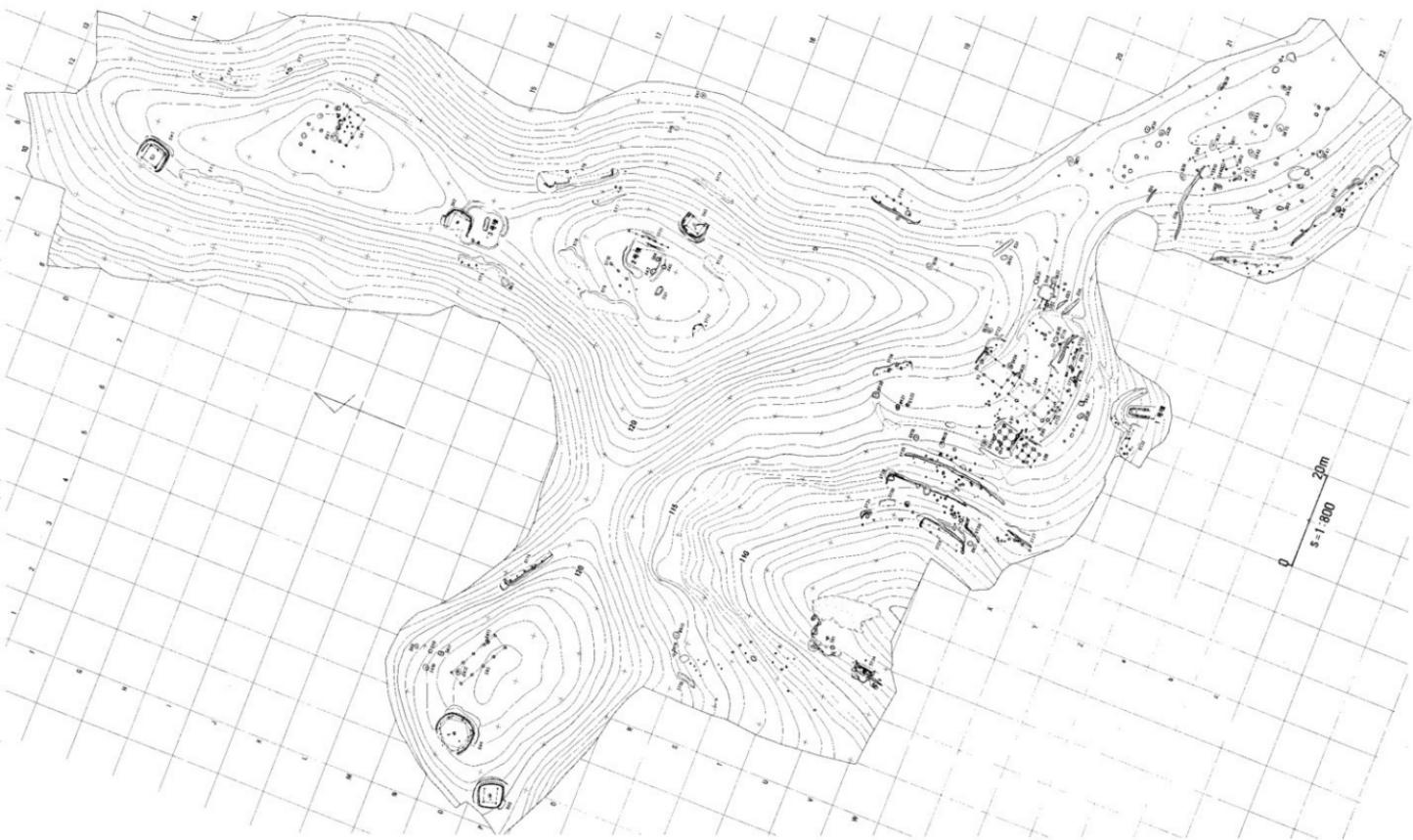
#### (1) 弥生時代

弥生時代の遺構は調査区中央の頂部から北へ派生した尾根及び西へ派生した丘陵の頂部にだけ立地する。これより南には全く遺構は存在せず、一線を画したかのようである。住居址、建物址、段状遺構の位置関係についてみると、頂部の平坦面に建物址が位置し、頂部から斜面へ移行するあたりに住居址と段状遺構が配置されている。住居址は丘陵斜面に位置するため、山側は床面の平坦面を確保する必要から、当然深く掘り込まれ、谷側は床面のプランを保障するだけの掘り込みとなっている。段状遺構は長軸を等高線走向に平行して位置する。

以下、各遺構について概観してみよう。

#### 住居址1（第10・11図）

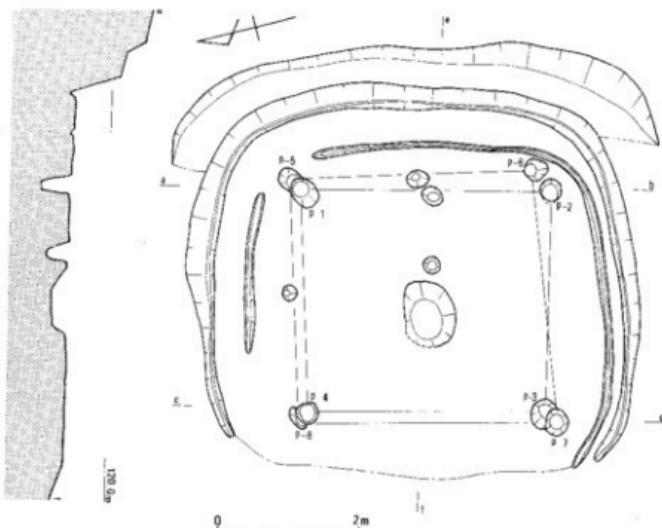
調査区の北側、丘陵西斜面に位置する。一度拡張が行われており、2時期が認められる。最初の住居は残存する壁体溝から復元して床面の1辺が約5mを測る隅丸方形プランを呈すものと考えられる。主柱穴は4本でP-1～P-4がそれに相当する。拡張時のものは床面の1辺が約6mを測る隅丸方形プランの住居である。主柱穴は4本でP-5～P-8が相当する。中央穴は共有する。東側の山側には幅約40cmのテラスが付設される。このことから拡張時の住居



第9図 一貫西道跡遺構全体図 ( $S = 1 : 800$ )

り方の深さ  
は約60cmを  
測ることが  
確認される。  
主柱穴の深  
さは50~70  
cmを測り、  
かなりしつ  
かりしてい  
る。

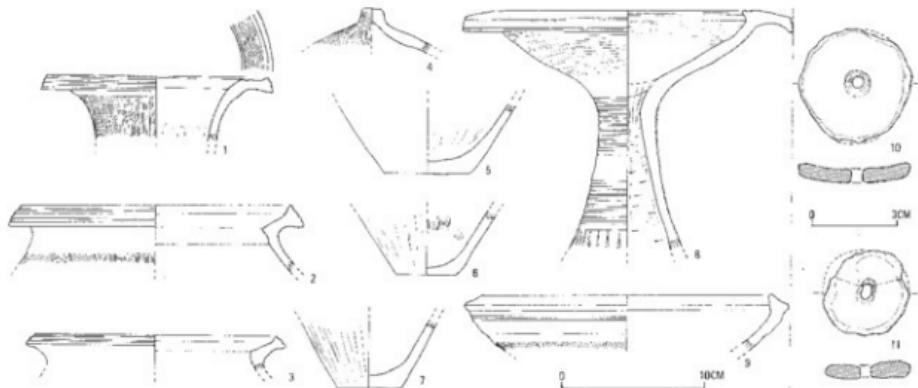
遺物とし  
ては弥生土  
器と石器が  
出土してい  
る。いずれ  
も床面より  
やや浮いた  
埋土中の出  
土である。  
1は壺形土  
器である。  
頸部から水  
平に外方へ  
開いた口縁  
部をもつ。



第10図 住居址1平面・断面図 (S = 1 : 80)

水平面には櫛描波状文をめぐらせ、端部には3条の凹線文を施している。2・3は斐形土器で  
ある。2は端部が肥厚するのに対し、3はあまり肥厚しない。4は蓋形土器である。8・9は  
高杯形土器である。脚端部が遺存しないが、他は完形である。8は口縁部が水平方向に大きく  
張り出すのが特徴である。杯部は内外面とも横方向のヘラミガキ仕上げである。脚部は上位と  
下位に凹線文帯を施し、中位には無文帯を形成している。下位の凹線文帯に接して三角形の透  
し孔を穿つが、貫通はしていない。杯部と脚部は円盤充填により接合している。10・11は土製  
紡錘車である。土器片を転用したもので、両者とも外面から内面にかけて穿孔している。

石器は砥石、石庵丁等があるが、記述は後にまわして一括して取り扱うこととする。



第11図 住居址1出土遺物

#### 住居址2（第12・13図）

調査区中央の頂部から北にやや下った丘陵の鞍部に3号墳と重複して位置する。住居址1同様一度拡張が行われており、2時期が認められる。最初の住居は床面の1辺が約5mを測る隅丸方形プランの住居に復元される。主柱穴は木の根の攪乱により1ヶ所不明であるが、P-1～P-3が相当する。拡張時のものは床面の1辺が5.3mを測る隅丸方形プランを呈する。主柱穴はやや変則的ではあるが、5本でP-4～P-8が相当する。中央穴は共有する。中央穴と南側壁体溝との間に焼土面が2ヶ所検出されたが、いずれの時期に所属するのかは不明である。拡張時の住居の北側に幅約70cmの張り出し部が付設するが、機能は明らかではない。中央穴の深さは約25cm、主柱穴の深さは40～55cmをそれぞれ測る。

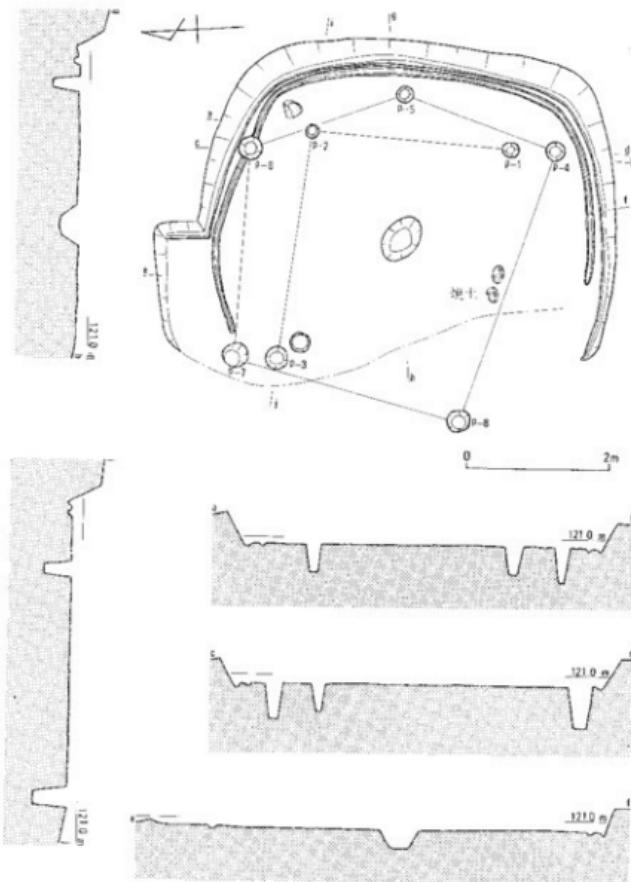
遺物はいずれも埋土中からの出土である。12～14は夔形土器である。12は11縁部端面に2条、13・14は3条の凹線文をもつ。13・14の端部が上下に拡張するのに対し、12は上方のみに拡張する。15の夔形土器内面にはスヌの付着が顕著に観察される。17は高杯形土器脚部、18は杯部口縁部である。

#### 住居址3（第14～16図）

調査区中央頂部の東斜面に位置する。2度拡張が行われており、計3時期が認められる。いずれの時期も基本的に主柱穴、中央穴は共有している。ただ、P-3だけが2時期認められるが、いつの時期に該当するのかは不明である。最初の住居の床面は1辺が約4mの隅丸方形プランの住居に復元される。2時期目は外方に約20cm、3時期目はさらに外方に約20cm拡げた位置に壁体溝を設定することにより住居を構築している。床面には焼土面が2ヶ所、中央穴に取り付く床溝が1本検出されたが、いつの時期に所属するのかは不明である。西側の山側には幅約40cmを測るテラスが付設する。この面から床面までの深さは約60cmを測る。中央穴の深さは

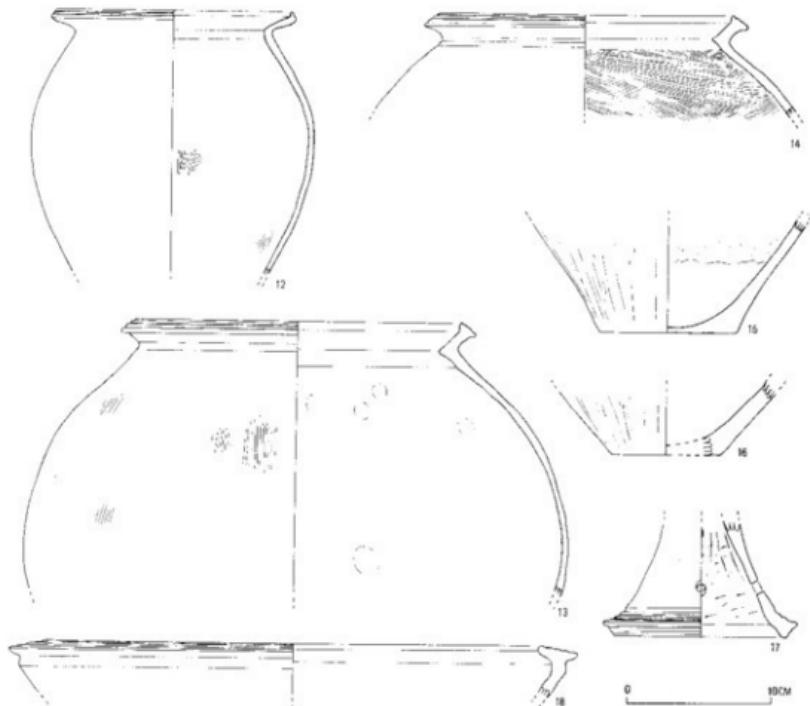
約30cm、主柱穴の深さは30~40cmを測る。

遺物は住居址床面からかなりまとまって出土した。19・20は壺形土器である。19は筒状の頭部から外方に開く口縁部をもつ。端部は上下に拡張し、やや内傾する。端面には3条の凹線文をめぐらせた後、斜方向の連続刻目文を施している。頭部の凹線文帯の下位は撚描波状文、直線文、波状文という文様構成となる。地文は縱方向のハケ目である。



第12図 住居址 2平面・断面図 (S = 1 : 80)

る。20の胴上部は遺存状態が極めて悪く、調整等識別しにくいが、基本的に19と同様になるものと考えられる。21~29は壺形土器である。大きさはバラエティーに富む。24を除きやや内傾する口縁端面に2~3条の凹線文をもつ。いずれも頭部から観角に外反し、肥厚する口縁部をもつ。30は非常に大型の壺形土器である。やや内傾した端面には3条の凹線文をめぐる。端部は肥厚し、上下にやや拡張する。外面は上半が縱方向のハケ目を施した後、横方向の荒いハケ目をさらに用いている。下半は縱方向のヘラミガキ仕上げである。内面はハケ目仕上げである。31~34は壺形土器あるいは壺形土器であるが、識別は難しい。30の壺形土器もそうであるが、34のように非常に細身の土器があることが指摘される。35~37は高杯形土器である。37は楕円



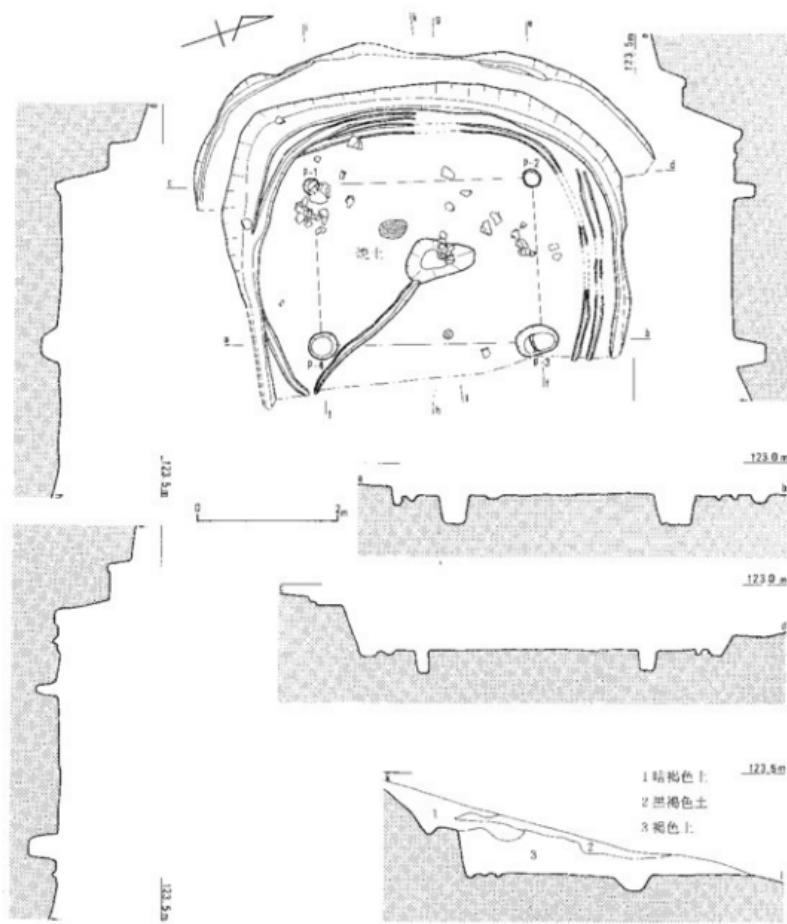
第13図 住居址2出土遺物

の杯部に端部があまり開かない脚部が付く。杯部口縁部外面には2条の凹線文がめぐる。杯部は内外面ともハケ目、脚部外面は縱方向のヘラミガキ仕上げである。脚端上位には円形の透し孔が穿たれている。石器は石斧等3点出土した。

#### 住居址4（第17・18図）

調査区西側丘陵の西斜面に位置する。一度拡張が行われており、2時期が認められる。最初の住居は床面径7.7mの円形プランに復元される。主柱穴は6本でP-1～P-6がそれに相当する。いずれの柱穴も壁体溝に近い位置に配されている。拡張時のものは南側壁を10～20cm拡げることにより構築されている。他の部分の壁体溝は最初の時期のものを共有している。主柱穴は12本でP-7～P-18がこれに相当する。各柱穴間の距離はまちまちであるが、P-9～P-10間、P-15～P-16間で折り返すと左右対称形になる。中央穴は2時期を共有している。床面に焼土面が2ヶ所検出されたが、いずれの時期に所属するのかは不明である。中央穴の深さは15cm、柱穴の深さは30～70cmを測る。

遺物は埋土中から土器片が若干量出土しただけである。38は壺形土器口縁部である。やや内

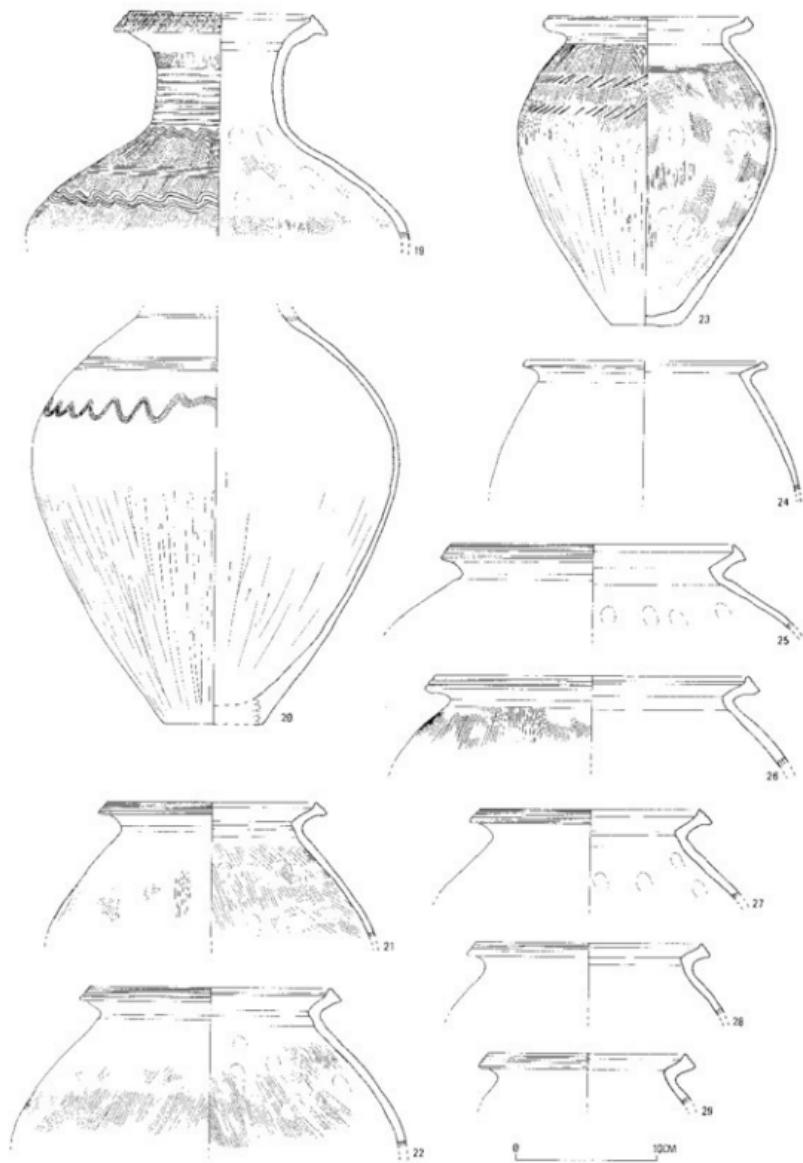


第14図 住居址3平面・断面図 (S - I : 80)

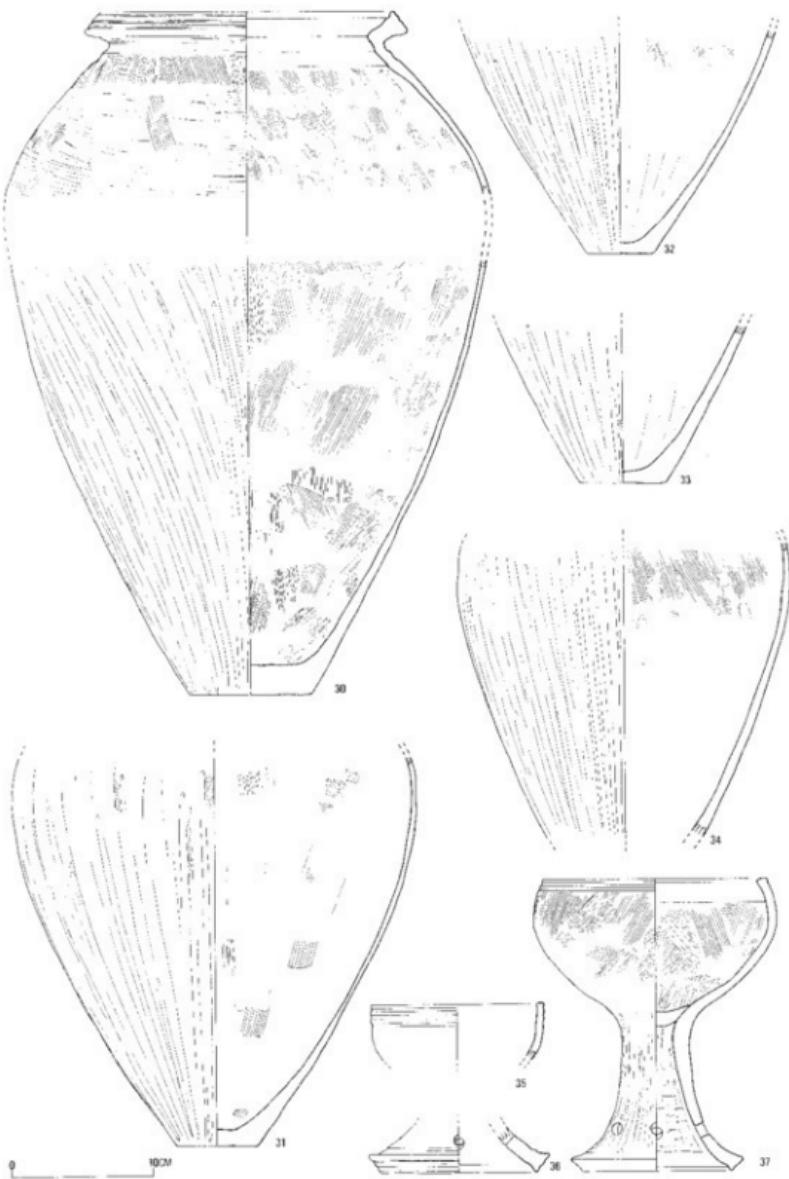
傾した端面は凹線文を3条めぐらせた後、斜方向の連続刻目文を施している。39~44は変形土器である。39、42~44の口縁端面には2~3条の凹線文がめぐる。基本的に胴上半部は内外面ともハケ目仕上げである。45~49は壺形土器あるいは変形土器の底部である。

#### 住居址5（第19~21図）

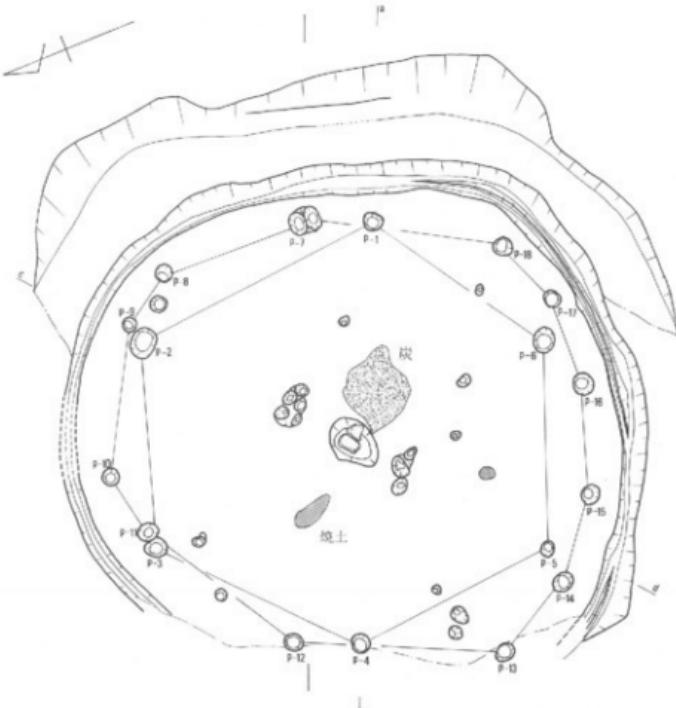
4号住居址の下方、南斜面に位置する。床面の1辺が4.8mを測る隅丸方形プランの住居である。主柱穴4本でP-1~P-4がそれに相当する。中央には深さ約30cmを測る楕円形の中央穴が位置する。山側の北壁、東壁には幅約40~50cmを測るテラスが付設する。テラスの壁面側



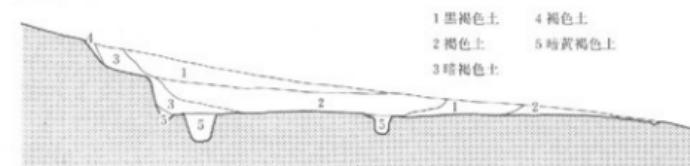
第15図 住居址3出土遺物(1)



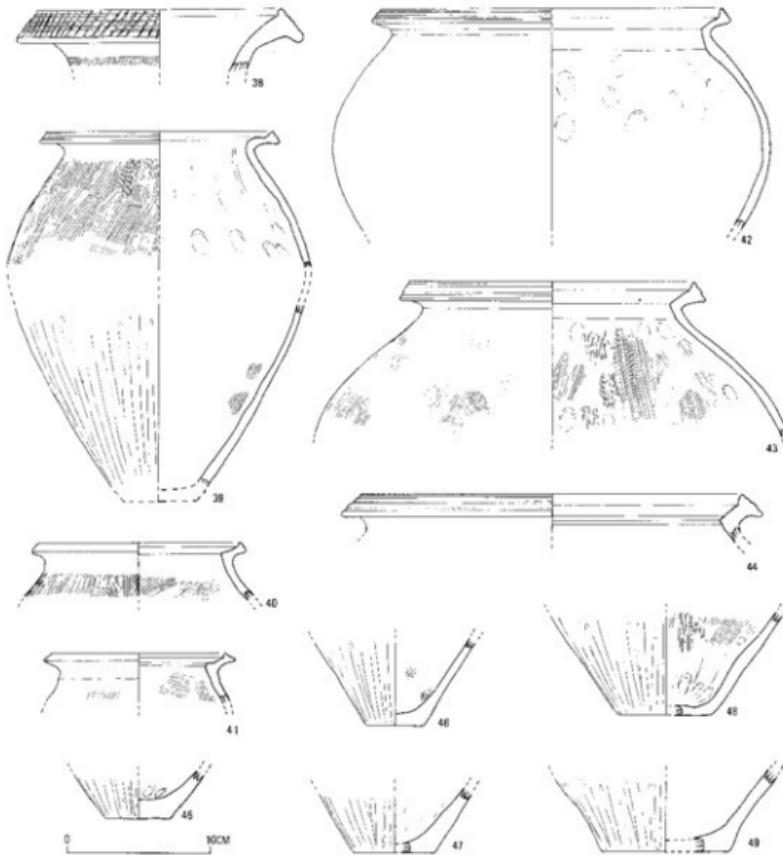
第16図 住居址3出土遺物(2)



- 1 黑褐色土  
2 棕色土  
3 暗褐色土  
4 棕色土  
5 灰褐色土



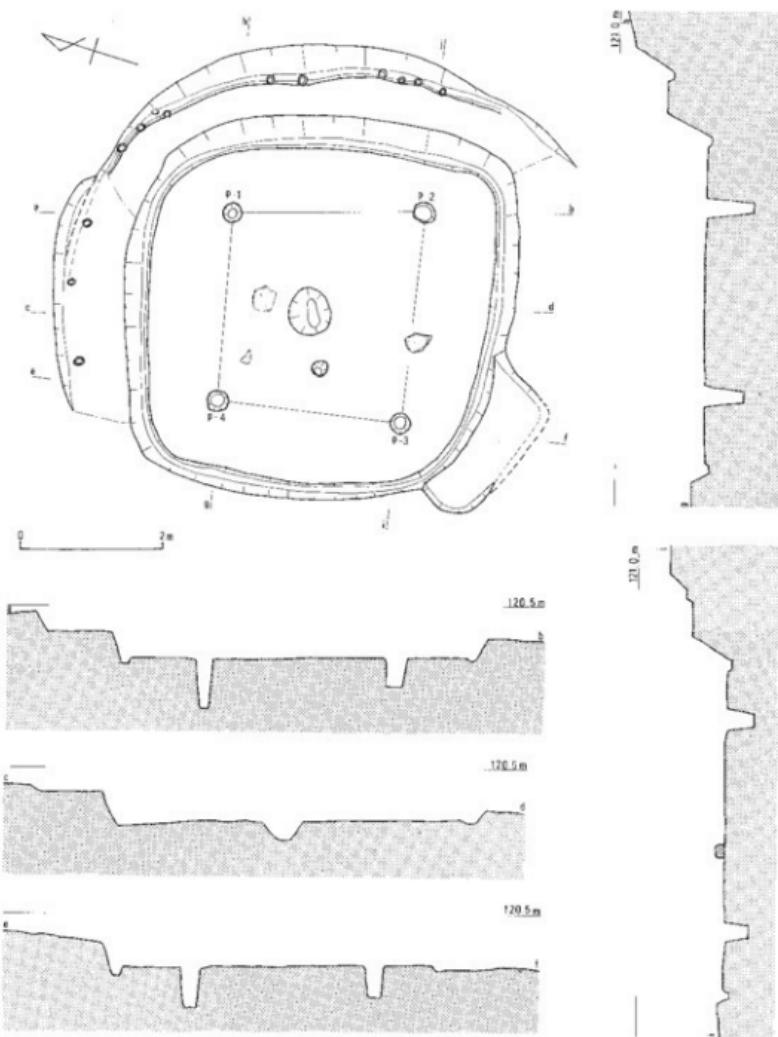
第17図 住居址 4 平面・断面図 ( $S = 1 : 80$ )



第18図 住居址4出土遺物

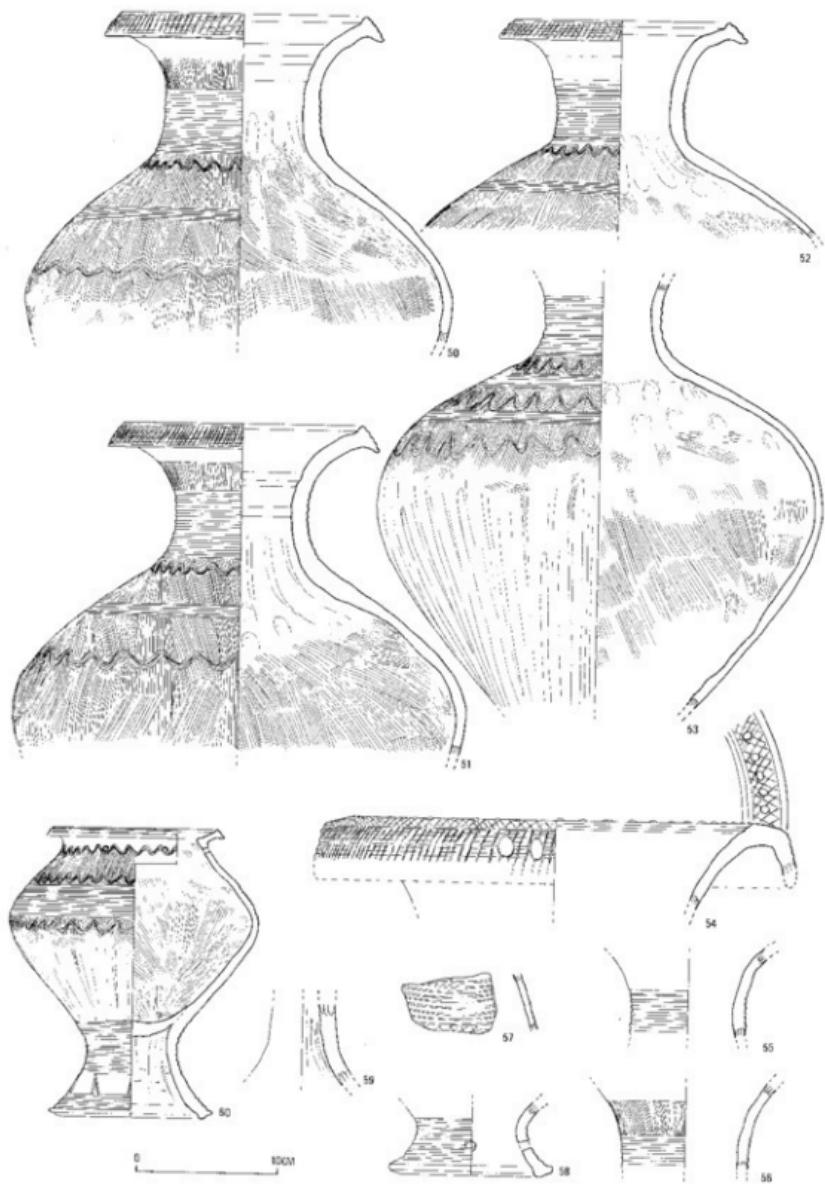
には幅約10cmを測る浅い溝があげぐる。さらに、この溝には杭の存在を想定させる小ピットが並んで検出された。住居の南西コーナー部には幅約60cm、長さ約2mの張り出し部がつく。主柱穴の深さは40~70cmを測る。

遺物は床面からやや浮いた埋土中からまとめて出土した。土器の他に石器1点がある。50~56は壺形土器である。54を除き形態、文様、調整等同一型式のものである。すなわち、数条の凹線文をもつ頸部から大きく外反する口縁部をもち、やや内傾する口縁端面には4条の凹線文をめぐらせた後、斜方向の連続刻目文を施していること。外面は縦方向のハケ目を施した後、櫛描波状文、櫛描直線文を交互に繰り返し、内面はハケ目仕上げであることなどである。

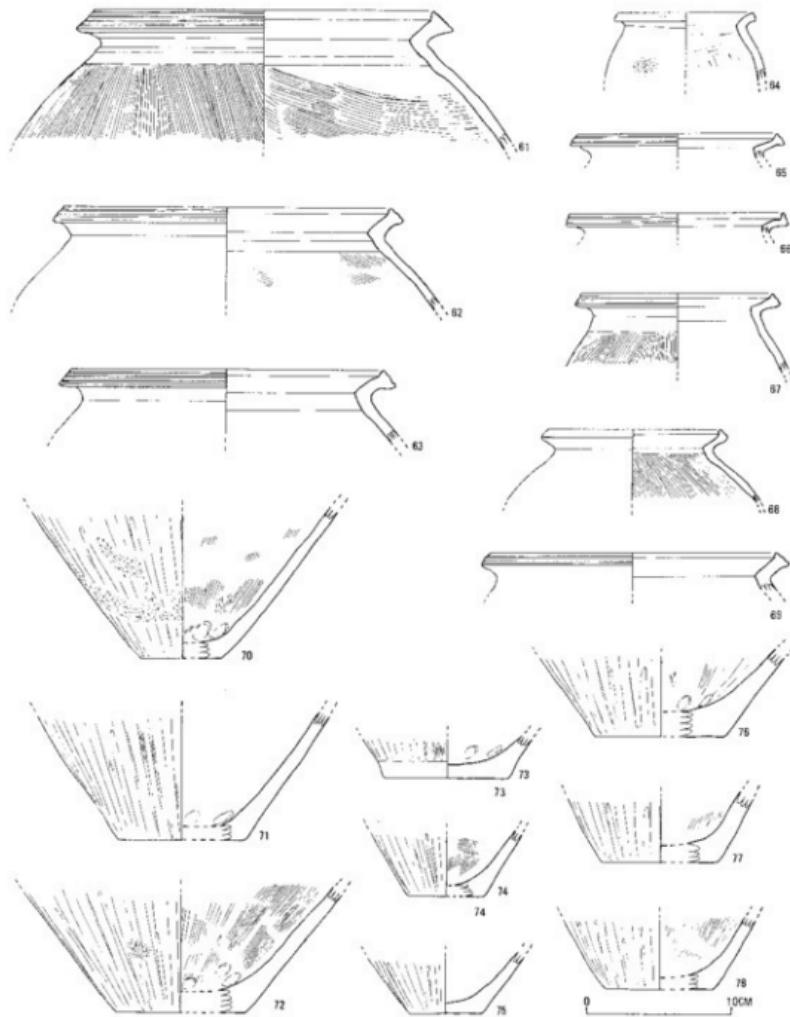


第19図 住居址5平面・断面図 (S = 1 : 80)

54は大型の壺形土器口縁部である。外反した口縁部は水平方向に外方に開いた後、大きく垂れ下がる。水平面にはヘラ描格子目文を施した後、円形浮文で加飾している。60は台付鉢形土器である。文様構成は前述の壺形土器同様、凹線文と縦描波状文という構成で同一型式のものである。脚部には三角形の透し孔が穿たれるが、貫通までにはいたっていない。61~69は壺形土



第20図 住居址 5 出土遺物(1)

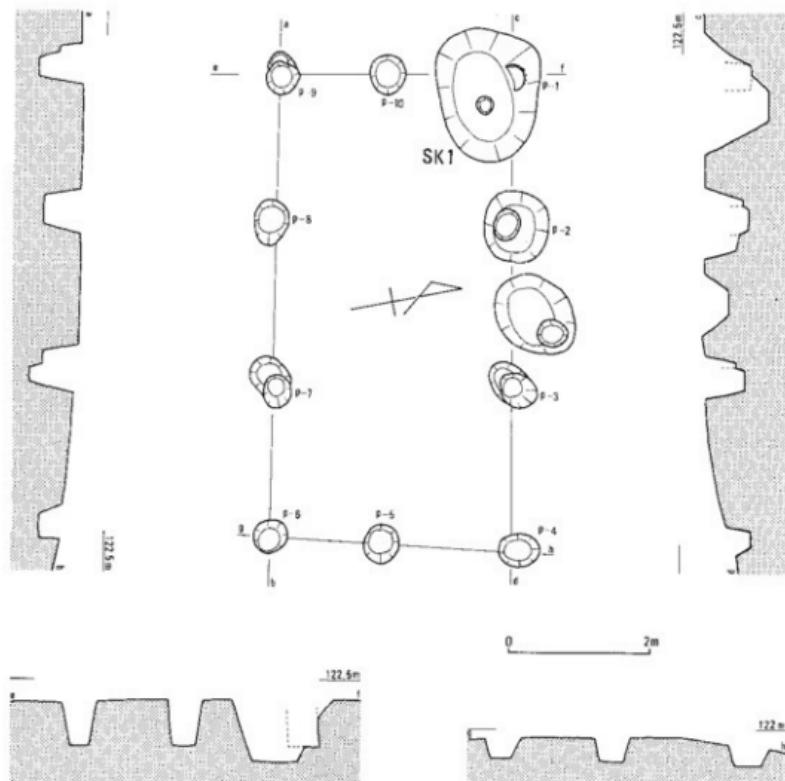


第21図 住居址5出土遺物(2)

器である。器形は大小バラエティーに富む。口縁端面に凹線文をもつものともたないものの二者が認められる。70~78は壺形土器あるいは甌形土器の底部である。

#### 建物址1（第22図）

調査区中央頂部から北へ伸びた丘陵の頂部に位置する桁行3間、梁間2間の建物である。桁



第22図 建物址1平面・断面図 ( $S = 1 : 80$ )

行方向はほぼ東西であり、等高線走向に直交する。桁行P-1～P-4の心々距離は6.6m、P-6～P-9は6.5m、梁間P-4～P-6は3.5m、P-9～P-1は3.2mをそれぞれ測る。各柱穴の遺構確認面からの深さは30～60cmを測る。P-1はSK1と重複しているが、P-1の方が新しい。

#### 建物址2（第23図）

調査区中央の頂部から西へ延びた丘陵の頂部や北斜面側に位置する桁行4間、梁間1間の建物である。桁行は等高線走向に平行する。桁行P-2～P-6の心々距離は11.8m、P-1～P-7は11.5m、梁間P-1～P-2は3.1m、P-6～P-7は3.2mをそれぞれ測る。P-2、P-3付近は地山の搅乱が著しく、柱穴底面がわずかに遺存するだけである。最も深いP-8、P-10で約60cmを測る。

段状遺構 1 (第  
24図)

住居址 1 の南側丘陵西斜面に位置する。斜面を削平し幅約1.5m、長さ約13mを測る平坦面を形成している。平坦面には溝・柱穴等は検出されなかった。遺物も出土していない。

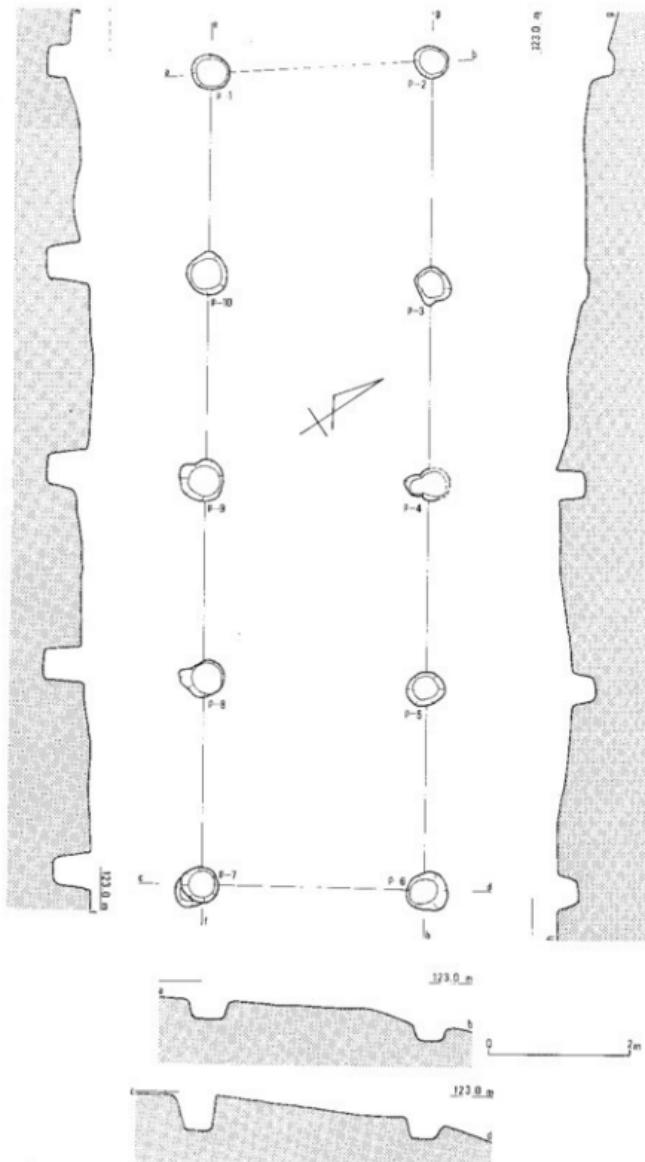
段状遺構 2 (第  
24・25図)

段状遺構 1 と尾根を狭んだ反対側の東斜面に位置する。斜面を削平し、幅約1m、長さ約13.5mを測る平坦面を有す。平坦面にはピットが2ヶ所検出された。

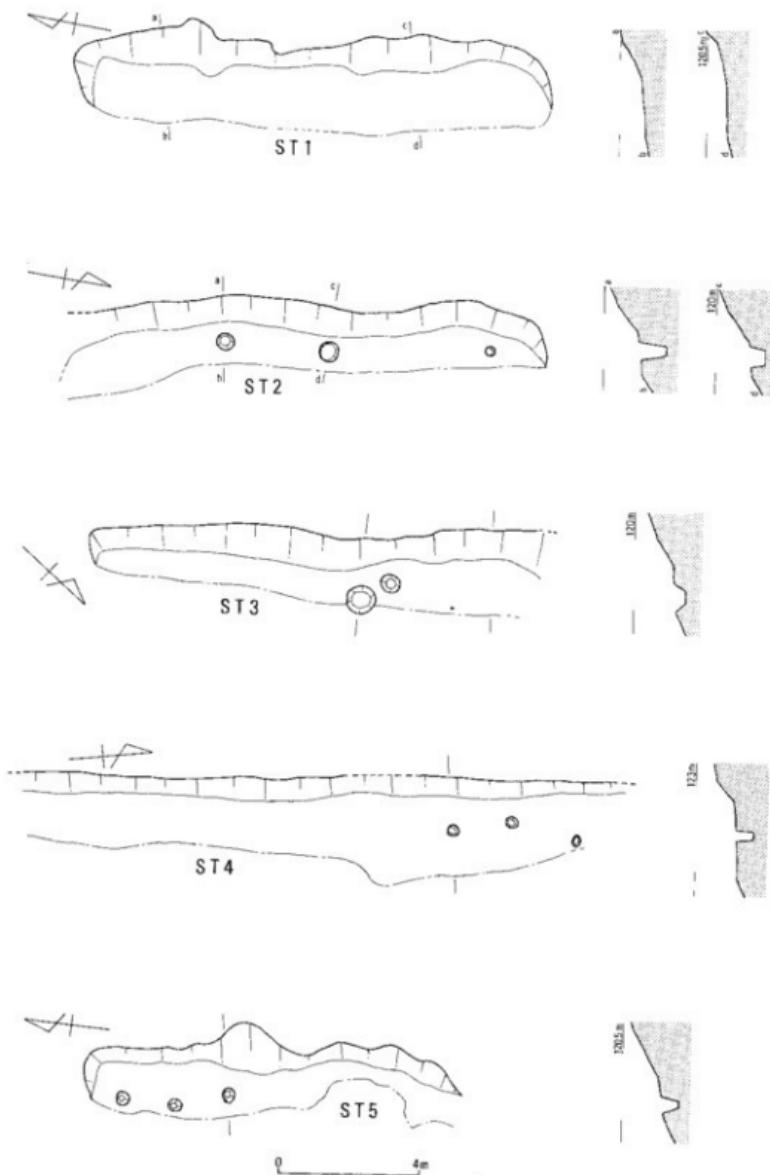
埋土中より第25図の弥生土器が出土した。

段状遺構 3 (第  
24・26図)

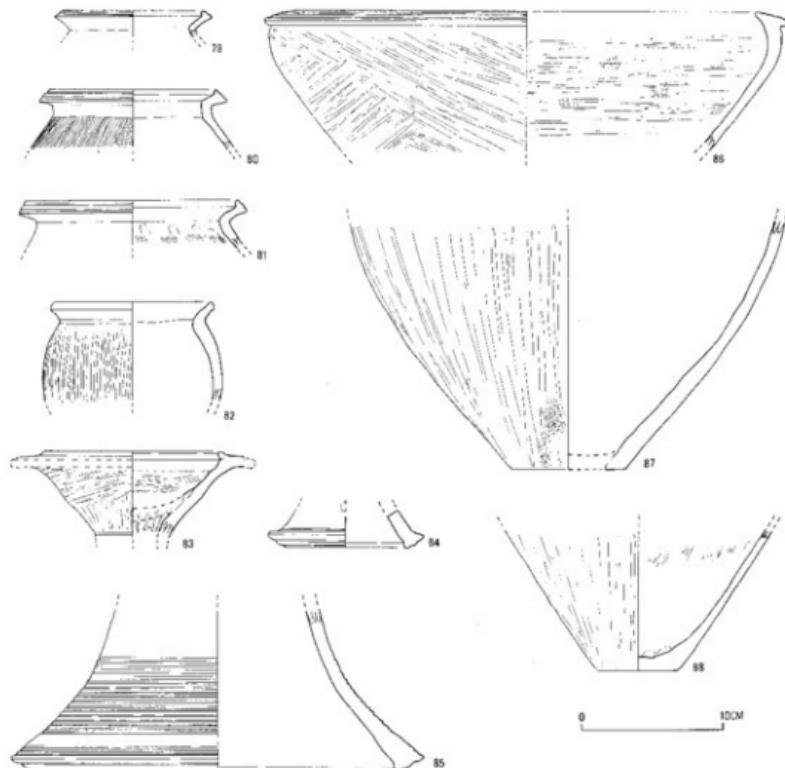
段状遺構 2 に南接して位置



第23図 建物址 2 平面・断面図 (S = 1 : 80)



第24図 段状遺構 1～5 平面・断面図 ( $S = 1 : 160$ )

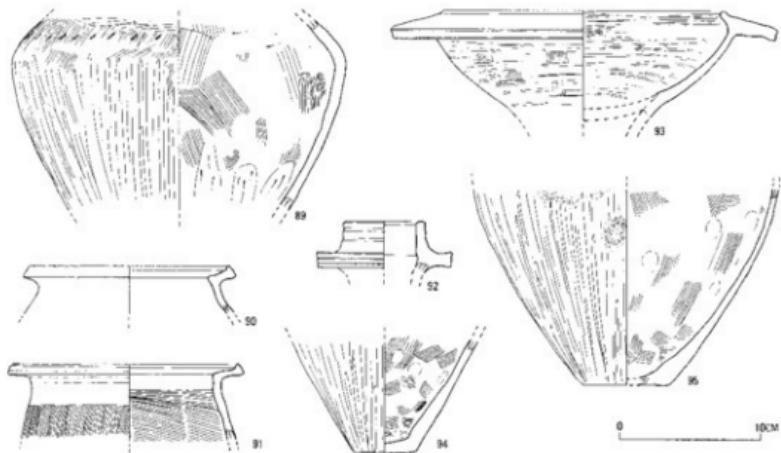


第25図 段状遺構 2 出土遺物

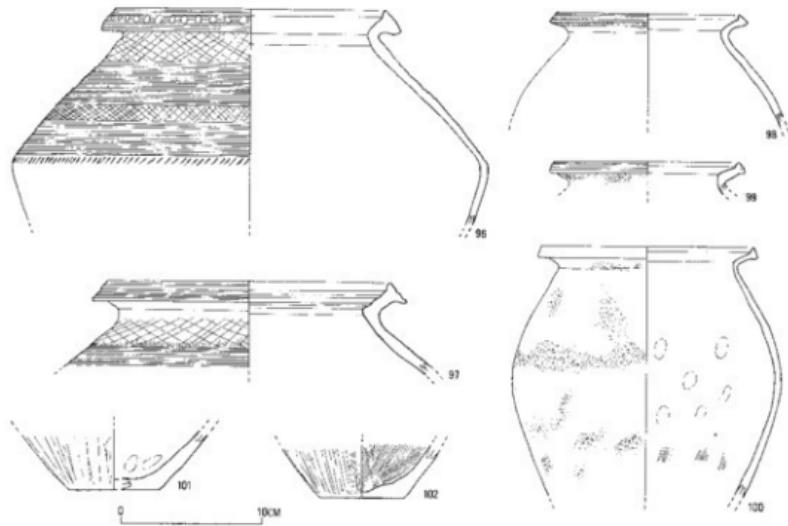
する。斜面を削平し、幅40~80cm、長さ約6.5mを測る平坦面を形成している。平坦面には浅いピットが2ヶ所検出された。平坦面のレベルは段状遺構2とほぼ同一である。遺物は埋土中より第26図に図示した弥生土器が出土した。

#### 段状遺構4（第24・27図）

建物址1の東斜面、段状遺構3の南に位置する。丘陵斜面を削平し幅60~120cm、長さ約8mの平坦面を形成している。平坦面にはピットが3ヶ所検出された。遺物は埋土中より若干量が出土した。96・97は肩部がそろばん玉状に張り出す器形の壺形土器である。外面の肩部より上位の文様構成は上からヘラ描き斜格子目文、凹線文を交互に繰り返す点では同一であるが、口縁部端面の円形浮文の加飾の有無で異なる。98~100は甕形土器である、口縁部下面及び胴部外面はススの付着が顕著である。



第26図 段状遺構3出土遺物



第27図 段状遺構4出土遺物

### 段状遺構5（第24・28図）

調査区中央の頂部からやや北に下がった屋根の西斜面に位置する。上位の屋根の稜線上には住居址2と3号墳が重複して位置する。斜面を削平し幅約60cm、長さ約5mの平坦面を形成している。平坦面にはピットが3ヶ所検出された。遺物は埋土中より若干量の弥生土器が出土した。第28図がそれである。

### 段状遺構 6 (第29・30図)

調査区中央頂部の北東斜面に等高線走向に沿って位置する。大きく北半と南半の2つに区分することができる。

北半は半円状に平坦

面を形成している。

長さ6m、奥行2.8m

を測る。壁に沿って

弧状に溝がめぐり両

端には小ピットが位

置する。南半部は斜

面を削平し、幅40~

50cm、長さ約12mの

平坦面を形成してい

る。平坦面の南端部

には壁に沿って「L」

字状の溝が検出され

た。遺物はちょうど

この溝に重なるよう

に床面よりやや浮い

た状態で出土した。

108の壺形土器と116

の器台形上器は完形

に復元できた。いず

れも凹線文と櫛描文

が多様される時期の

ものである。109は肩

部がそろばん玉状に張り出す壺形土器で外面はヘラ描き斜格子目文、凹線文が交互に繰り返さ

れる文様構成をとる。

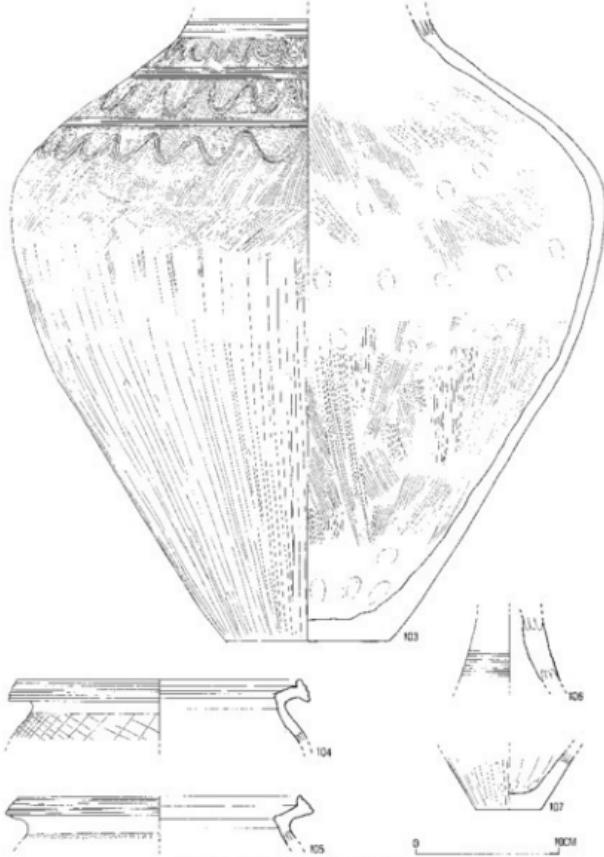
### 段状遺構 7 (第29図)

調査区中央頂部北東斜面、段状遺構6の上位に位置する。斜面を削平し、幅60~100cm、長さ

約7mを測る平坦面を作り出している。平坦面上に2ヶ所、斜面部に3ヶ所のピットが検出され

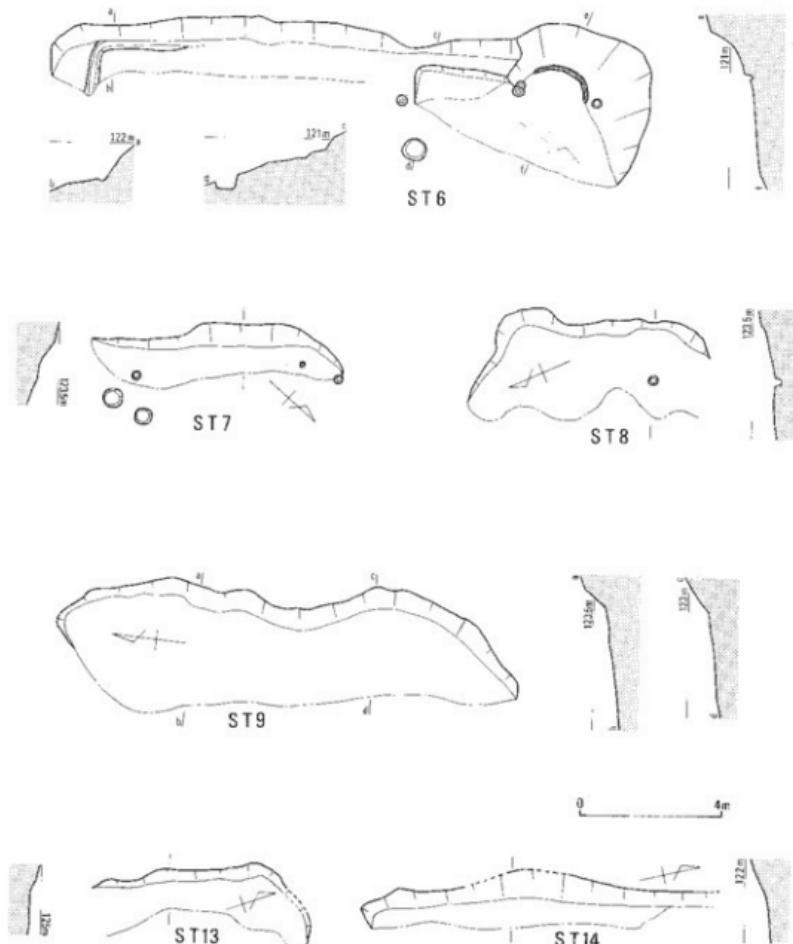
た。遺物としては数点の弥生土器片が出土しただけである。

### 段状遺構 8 (第29図)



第28図 段状遺構5出土遺物

調査区中央頂部北西斜面に位置する。斜面を削平し、幅平均約2m、長さ約7mの平坦面を形成している。平坦面にはピットが1ヶ所検出された。遺物としては埋土中より弥生土器片数

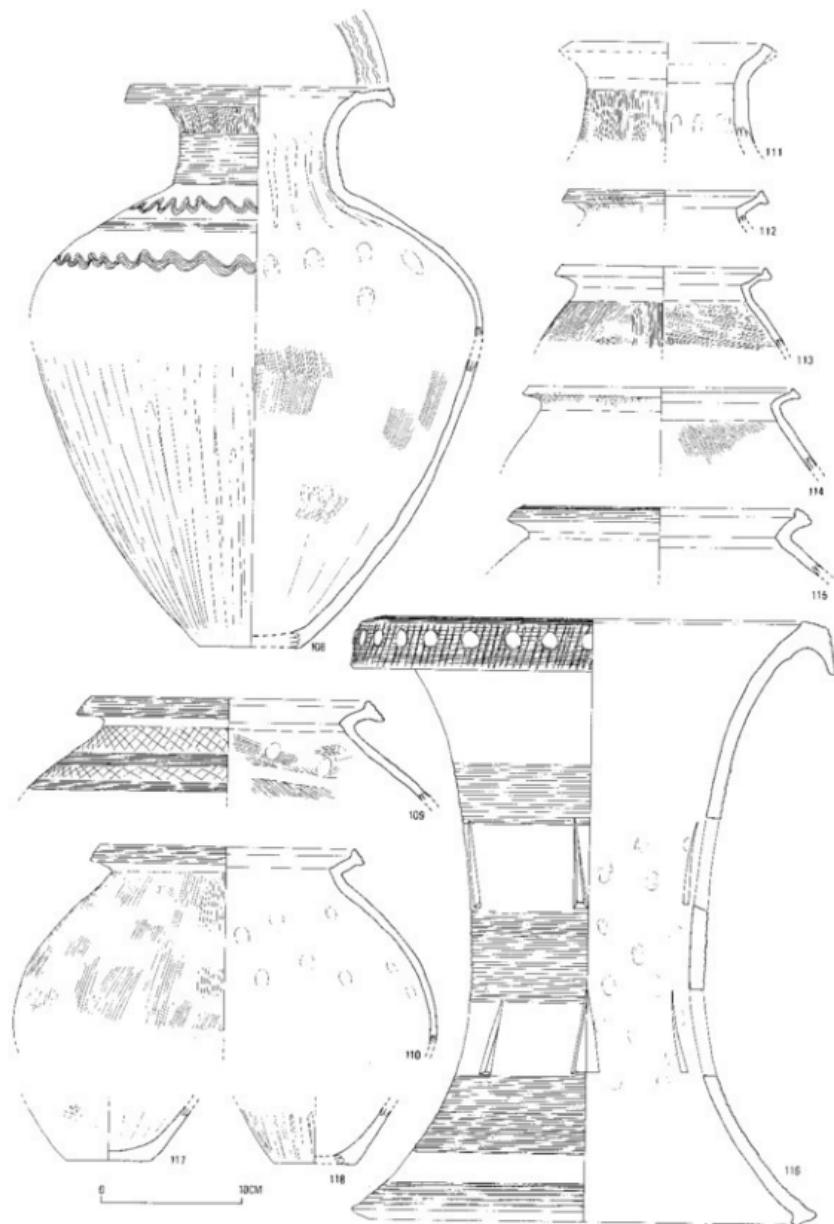


第29図 段状遺構6～9、13、14平面・断面図 (S = 1 : 160)

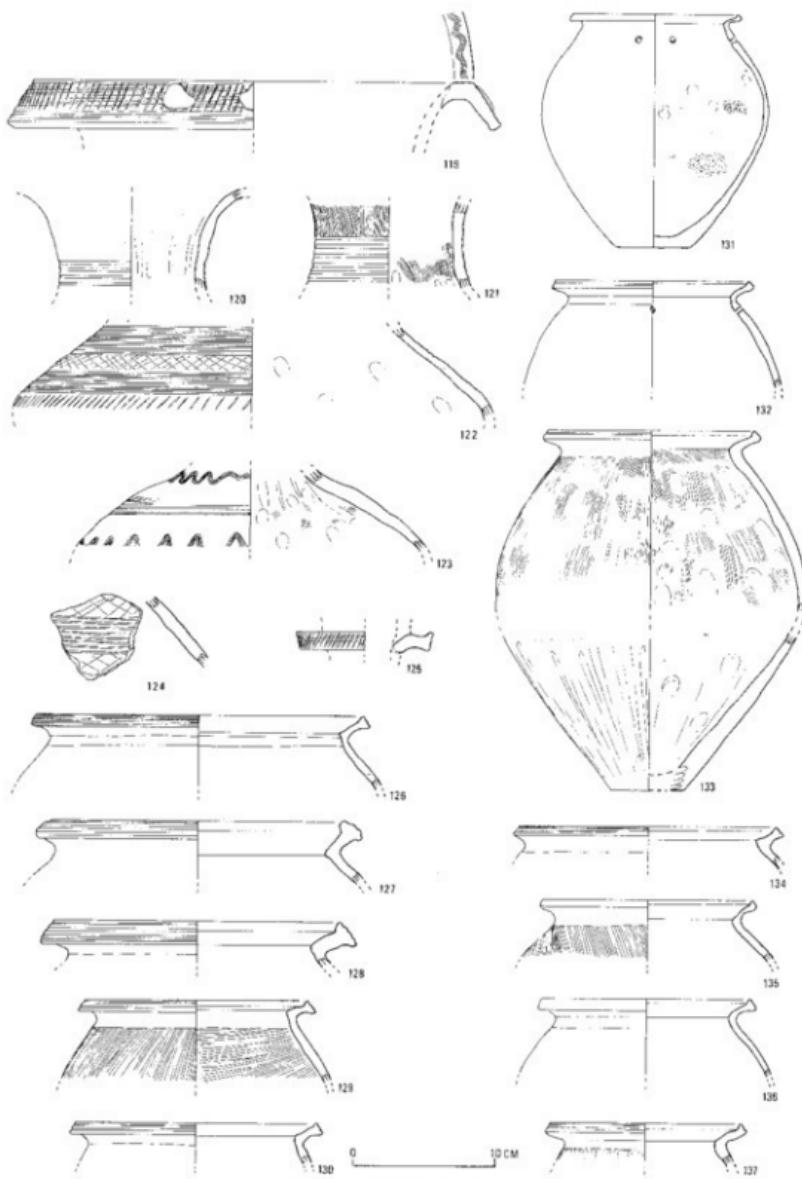
点が出土しただけである。

#### 段状遺構9（第29・31・32図）

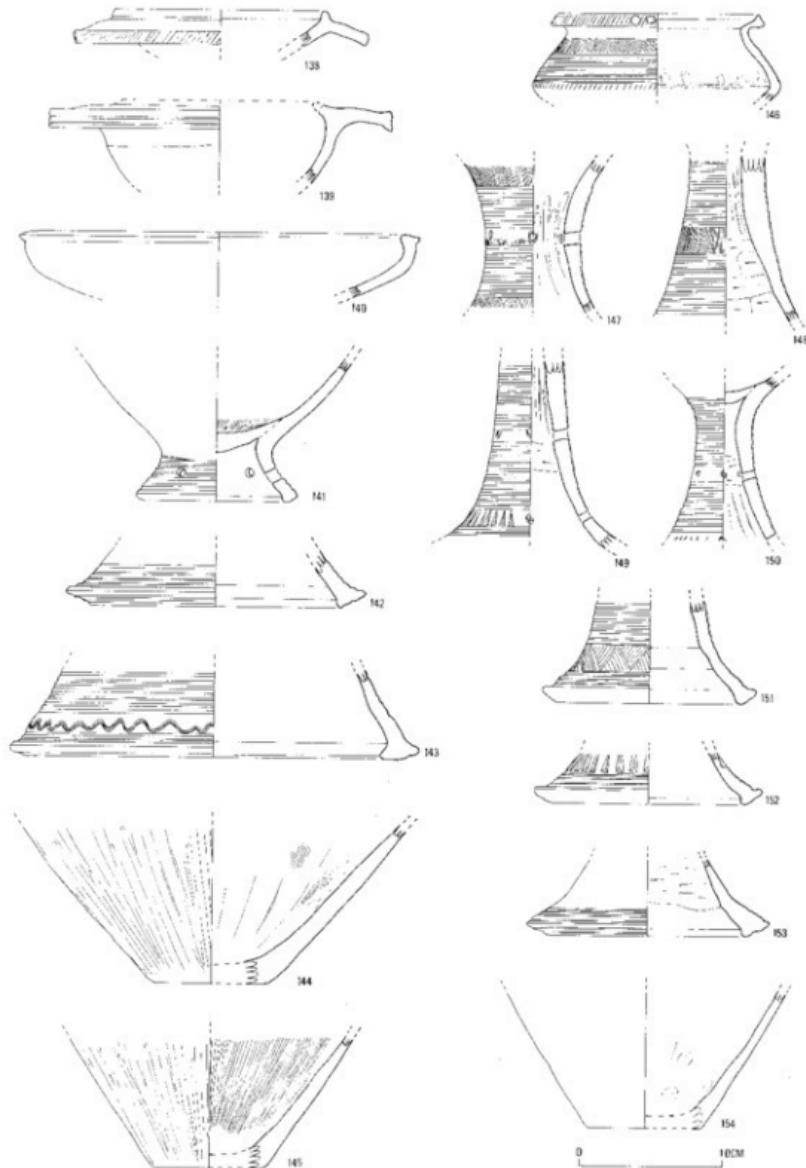
調査区中央頂部の西斜面に位置する。斜面を削平し、幅2～3m、長さ約12mを測る平坦面を作り出している。平坦面には溝・柱穴等何も検出されなかった。しかし、埋土中から多量の



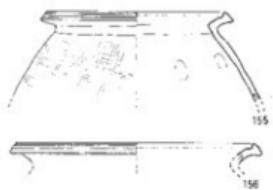
第30図 段状遺構 6 出土遺物



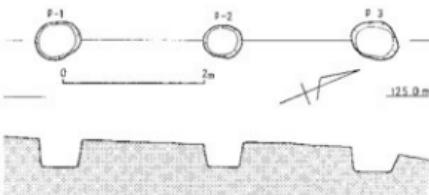
第31図 段状造構 9 出土遺物(1)



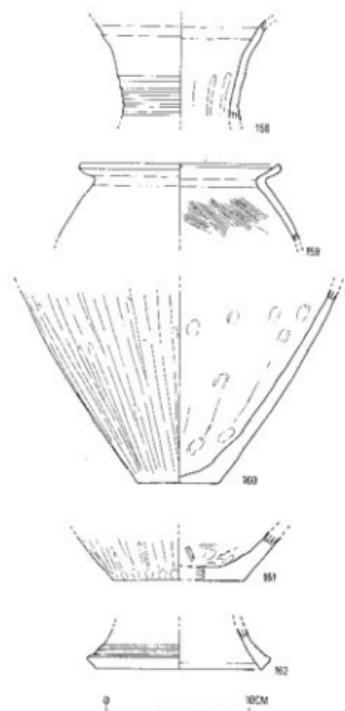
第32図 段状遺構9出上遺物(2)



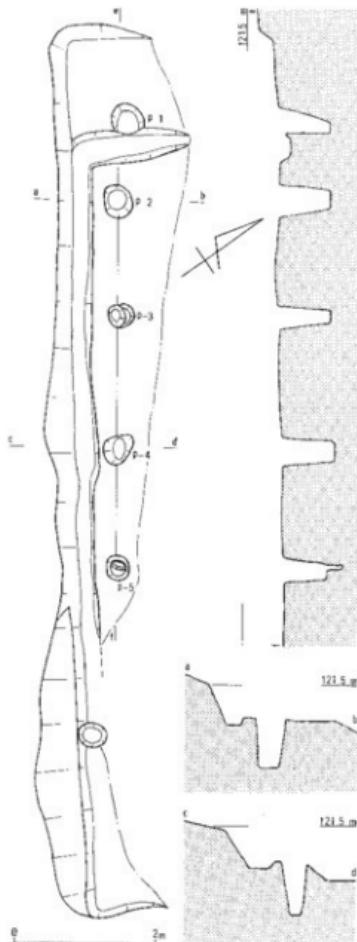
第33図 段状遺構14出土遺物



第34図 段状遺構10平面・断面図 ( $S = 1 : 18$ )



第36図 段状遺構15出土遺物



第35図 段状遺構15平面・断面図 ( $S = 1 : 18$ )

弥生土器が出土した。只数の関係で多くをふれることはできないが、特徴的な点をあげると147・151の高杯形土器脚部の鋸歯文を平行斜線でうめる技法が指摘できよう。

#### 段状遺構10（第34図）

調査区中央頂部のやや北西に位置する。段状遺構の柱穴列で削平により平坦面がとばされ柱穴だけが残った状況と判断し段状遺構に分類した。当初、建物の桁行になるものと考えたが、対になる柱穴が検出されなかつたからである。しかし、建物の可能性も十分指摘できる。遺物は出土しなかつた。

#### 段状遺構11（第50図）

調査区中央頂部の東端に2号墳と重複して位置する。山側に底面幅10~20cm、現存長約4mを測る溝を削削し、溝から東に約1mの距離をおいて、7本の柱穴からなる柱穴列が溝と平行に一列に並ぶ。柱穴列は南北方向と一致する。P-1~P-7までの各々の心々距離は1.4~1.6mを測りほぼ同一である。遺物は埋土中より数点の弥生土器片と石庖丁1点が出土した。

#### 段状遺構12

調査区中央頂部の南端斜面に位置する。斜面を削平し幅約2m、奥行約1mの平坦面を形成している。平坦面のコーナー部にはビットがそれぞれ配されている。東側のビットは重複しており2時期認められる。遺物は出土しなかつたため所属時期は不明であるが、遺構の分布状況から弥生時代に属させた。

#### 段状遺構13（第29図）

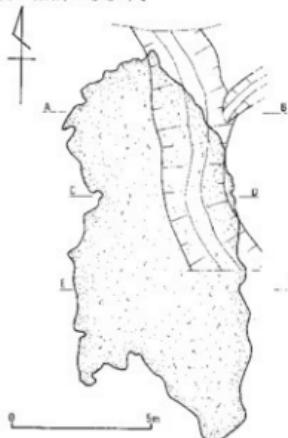
調査区中央頂部東南端斜面に位置する。斜面を削平し幅80~160cm、長さ約6mを測る平坦面を形成している。遺物は出土しなかつたため、所属時期は不明であるが遺構の分布状況及び他の段状遺構との関連から弥生時代に属させた。

#### 段状遺構14（第29・33図）

調査区中央頂部の東斜面、住居址3の下位に位置する。斜面を削平し、幅約80cm、長さ約8mを測る平坦面を形成している。遺物は埋土中より若干量出土した。第33図に図示した。

#### 段状遺構15（第35・36図）

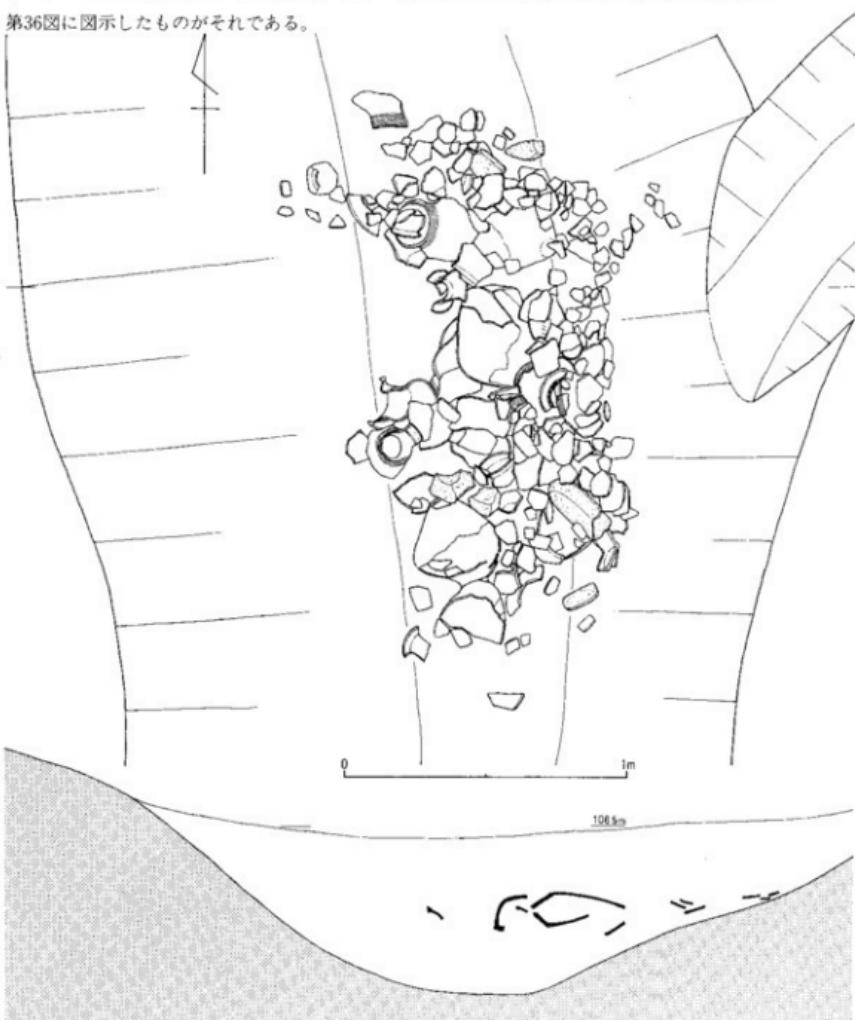
調査区中央の頂部から西に延びた尾根の北斜面に位置する。斜面を削平し、幅約1.5m、長さ約12mを測る平坦面を形成した後、壁面に沿って溝を設定している。溝の西端は壁までにはいたらず1.2mの距離をおいて北に屈曲している。平坦面にはP-2~P-4の柱穴列が検出された。P-1はP-2との距離が短かいことから、この柱穴列とは別のものと考えられる。P-



第37図 溝平面位置図 (S = 1 : 200)

2～P～4の各柱穴間の心々距離は1.6～1.8mを測る。埋土中より若干量の土器が出土した。

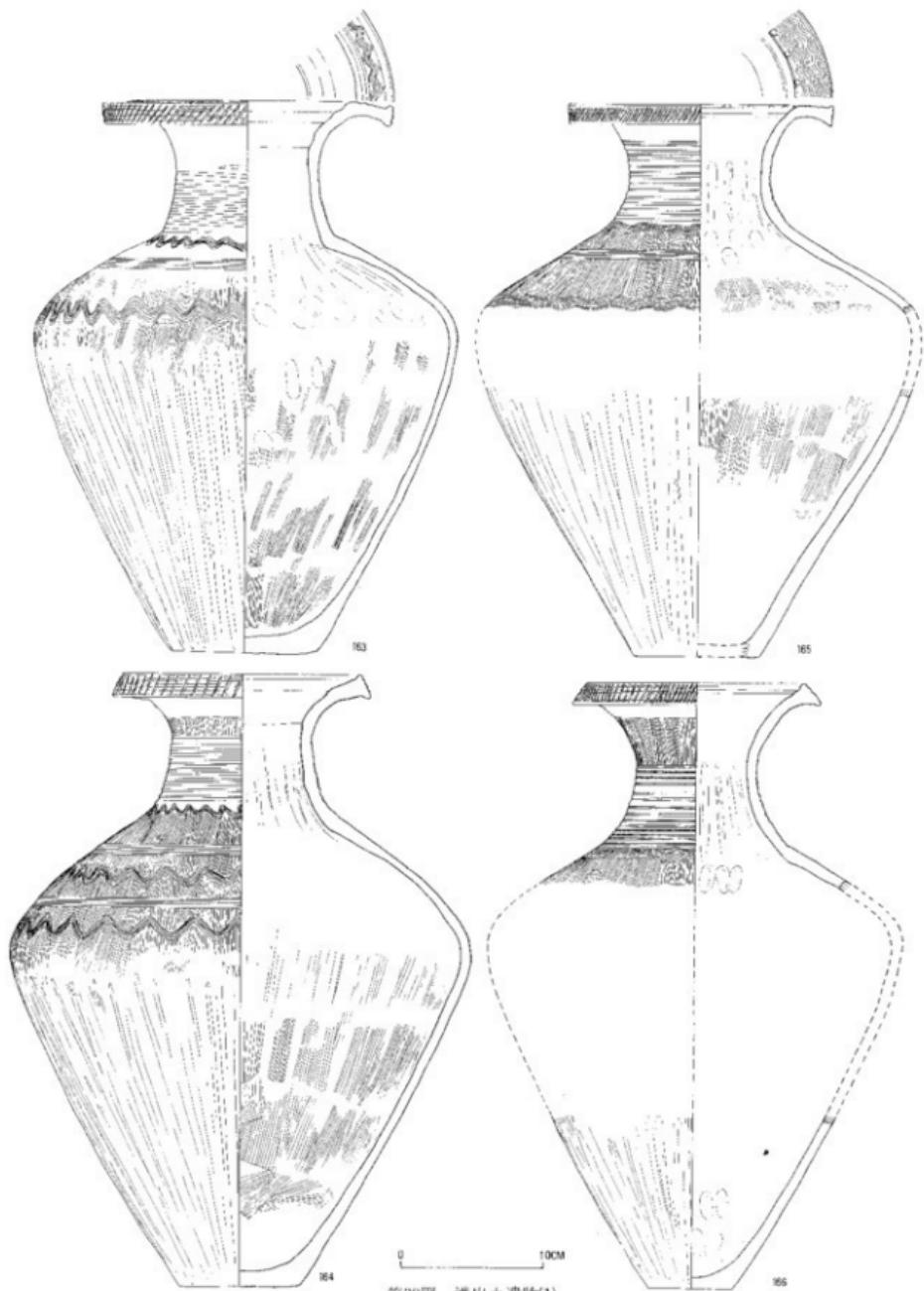
第36図に図示したものがそれである。



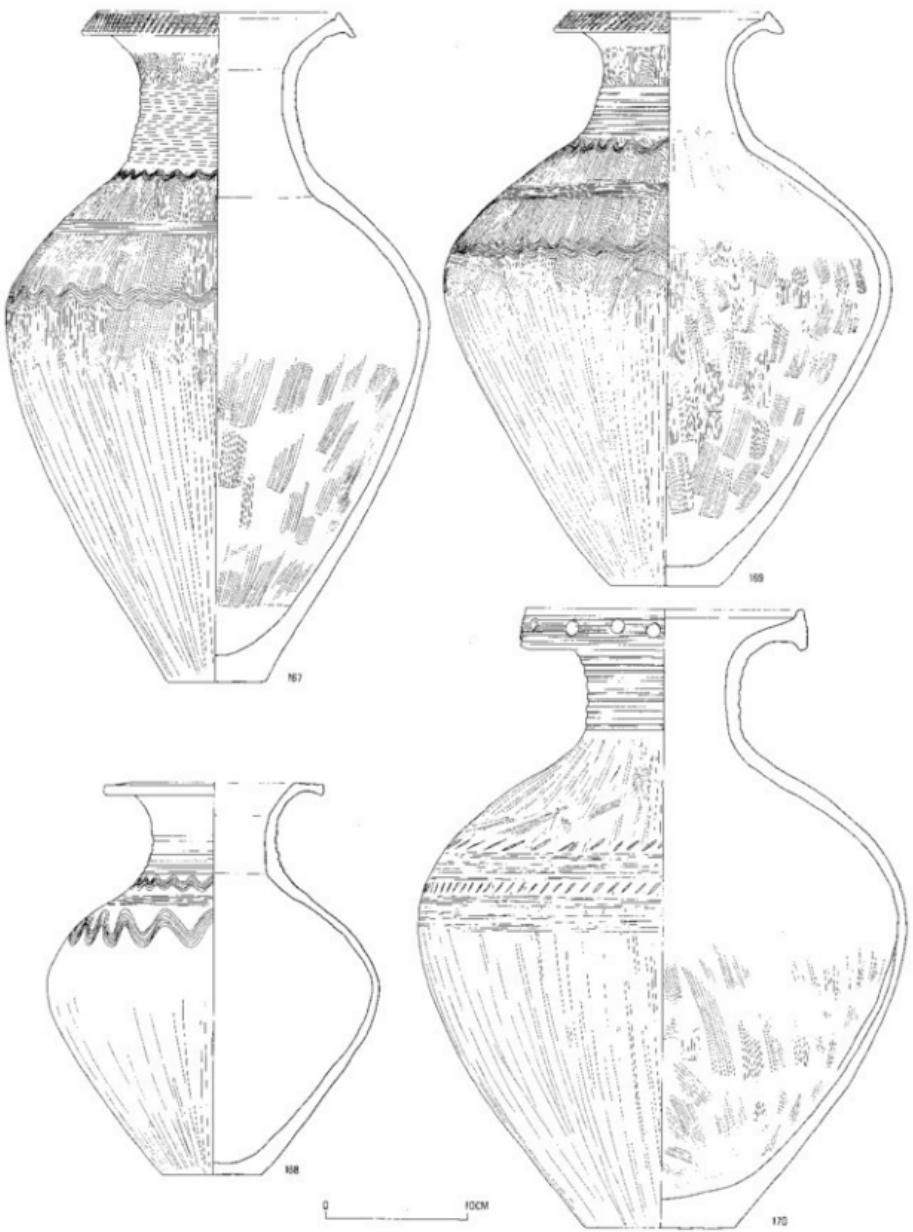
溝（第37～41図）

第38図 溝遺物出土状況 (S = 1 : 20)

調査区南西部に南方向に開析した小支谷が位置する。ちょうどこの場所には長さ約14m、幅約6m、厚さ約50cmを測る炉壁・鉄滓捨て場が検出された。この堆積状況を確認するためのトレンチを認定したところ、炉壁・鉄滓包含層の下層より弥生土器を多量に包含する溝を検出し



第39図 溝出土遺物(1)



第40図 溝出土遺物(2)

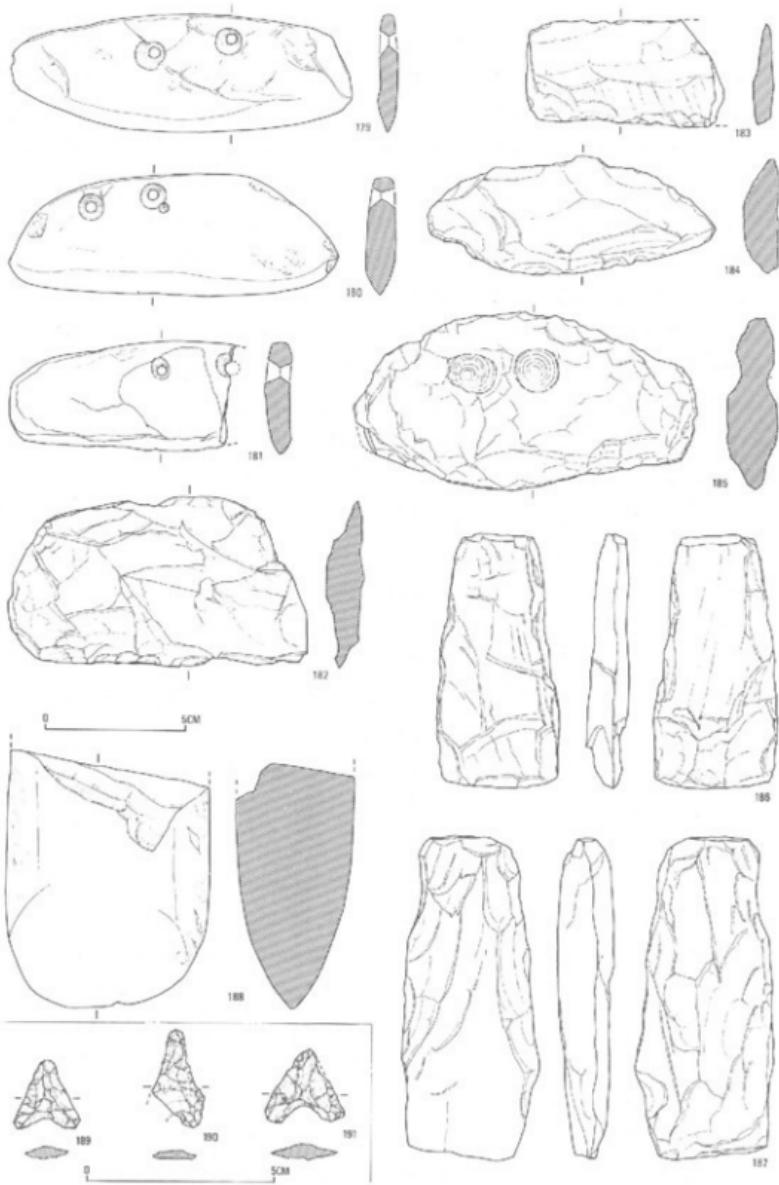


第41図 溝出土遺物(3)

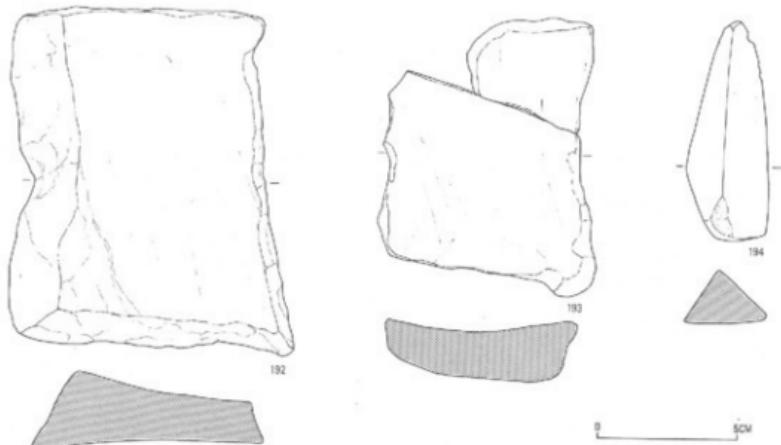
た。このため、炉壁・鉄滓の包含層を除去し、下層の溝の調査を行った。溝は遺構検出面で平均幅約2m、底面で平均約50cmを測る。深さは中央部で約50cmを測る。この溝にはさらに、上面幅約80cm、底面幅約30cm、深さ約20cmを測る小規模な溝が北東方向から合流している。両者の溝とも谷頭部に位置しており、自然湧水を利用した溝と考えられる。調査中にも水が湧き出していた。弥生土器はちょうど両者の溝の合流地点で出土した。弥生土器は完形の土器がおしつぶされたような状態で出土した。163・176は壺形土器である。この中にもいくつかのグループが認められている。163・165・168・171・172は水平方向に外方に張り出した口縁部をもつもので、水平面は櫛描波状文、円形浮文で加飾される。さらに端面はほぼ垂直で凹線文をめぐらせた後、斜方向の連続刻目文を施している。164・166・167・169は口縁端面がやや内傾し、端部は上下に拡張するものである。端面は前者と同じ文様構成である。両者とも外面は頸部に凹線文をもち、頸部から肩部にかけては櫛描波状文、櫛描直線文を交互に繰り返す。178は後者に属すが、櫛描波状文、櫛描直線文をもたないのが特徴である。170と175はまたそれぞれ別のタイプである。170は頸部に凹線文をもち、口縁端面はほぼ垂直に立つ。端部は上下に拡張し、肥厚する。端面は凹線文をめぐらせた後、円形浮文で加飾する。外面頸部下位には櫛描文をもたず、胴最大径付近に2列の刻目文をめぐらしている。175は頸部に凹線文をもたず、3列の指による連続刺突文を用いている。内傾する口縁端面には凹線文をめぐらせた後、斜方向の連続刻目文を施し、さらに円形浮文で加飾している。肩部には櫛描文を用いず、3列の連続刻目文をめぐらしている。170・175とも胴部最大径に横方向のヘラ磨きを施すのが特徴である。176は胴部がそろばん玉状に張り出す器形のものである。外面は頸部下位にヘラ搔斜格子目文を施し、さらに凹線文をめぐらしている。胴最大径には連続刺突文を用いている。177・178は台付鉢形土器の接合部である。図示したもの以外にも多くの破片があるが、壺形土器の量が圧倒的に多いことが指摘できる。

#### 石 器（第42・43図）

179～181は磨製石包丁である。いずれも穿孔は表裏両面から行われており、断面中央部に棱を形成する。180には穿孔途中の凹みが画面にみられる。179はC-11区遊離、180は段状遺構11埋土、181は段状遺構6埋土中の出土である。182～185は石包丁の未製品と考えられる。185は穿孔途中の凹みが認められるが、他については凹みはない。しかし、形状からみて未製品とするのが妥当と考えられる。183は実測圓右位を欠くがサスカイト製の快入のものの未製品と考えられる。いずれも住居址1埋土よりまとめて出土した。188は住居址3から出土した磨製石斧である。186・187は打製石斧か磨製の石斧の素材になるものと考えられる。186は住居址3、187は住居址5から出土した。189～191は四基式石鏡である。189は段状遺構25、190は土塹37、191は1号墳石室内より出土しました。石材は179～182、184・185が粘板岩、186・187が緑色片岩、石鏡はすべてサスカイトである。188は石材不明である。192～194は砥石である。192は表裏2面



第42図 石 器(1)

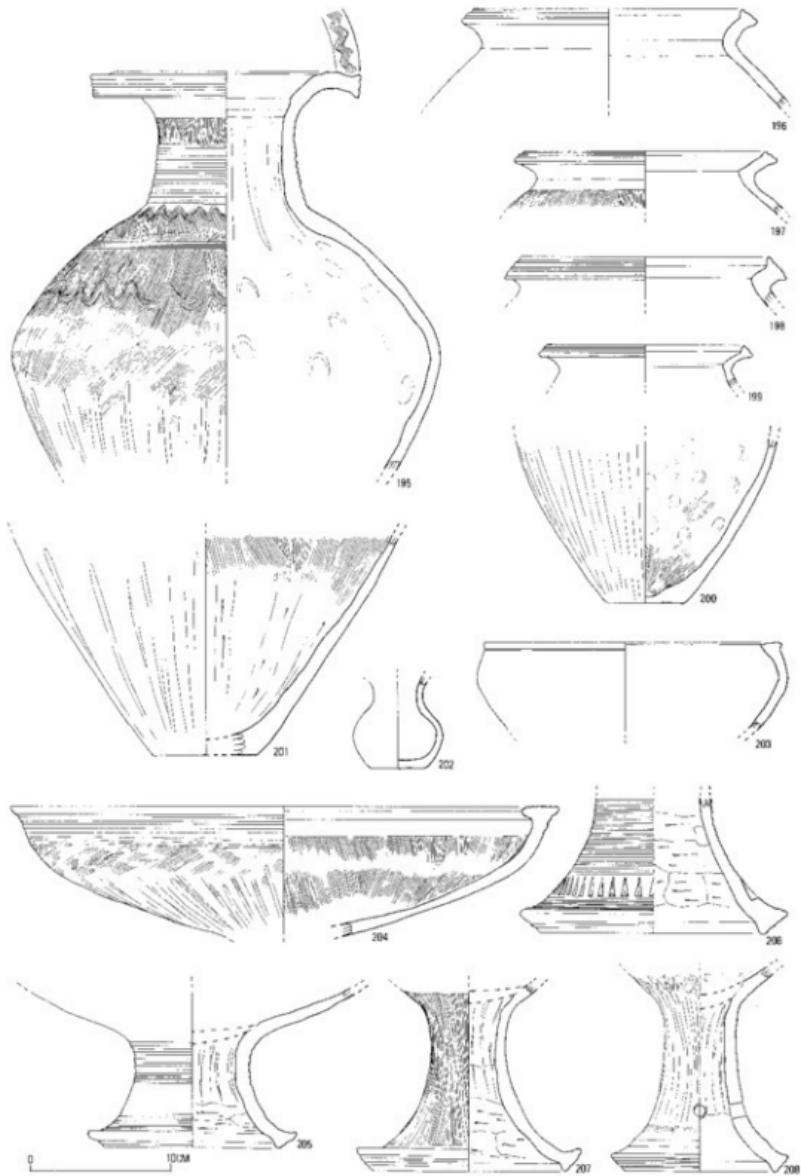


第43図 石 器(2)

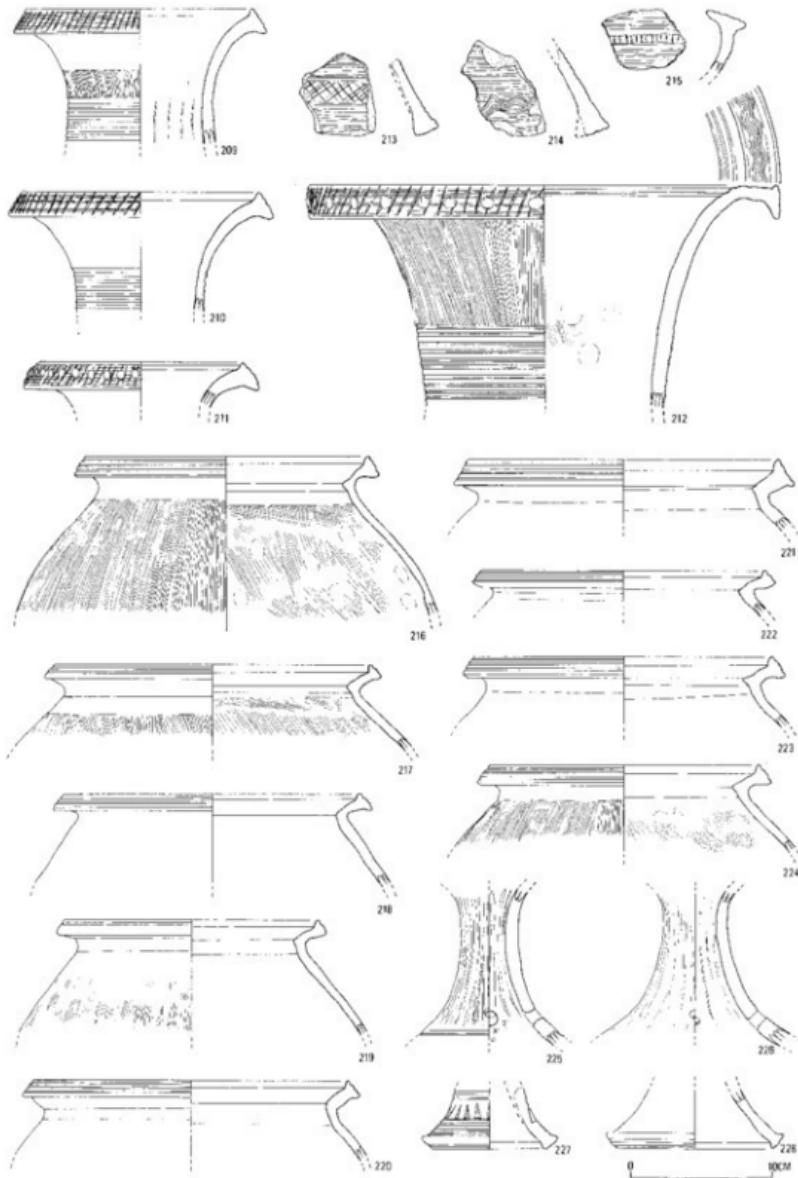
を砥面として使用している。住居址3から出土した。193も表裏2面を使用している。住居址1より出土した。両者とも鋭利な物を使用したらしく条痕が多く認められる。石材は砂岩である。194は住居址1から出土した。断面にみられるように3面を使用している。石材は不明である。遺構に伴わない遺物（第44・45図）

195～208は調査区中央頂部の東斜面M-15区よりまとまって出土した。出土地点をかなり精査したが遺構は検出できなかった。195は壺形土器である。水平方向に外方に張り出した口縁部をもち、水平面には櫛描波状文を施している。ほぼ垂直に立つ口縁端面には凹線文をめぐらせている。196～199は甕形土器である。内傾する端面にはいずれも凹線文をめぐらせている。202はミニチュアの壺形土器である。203～208は高杯形土器である。

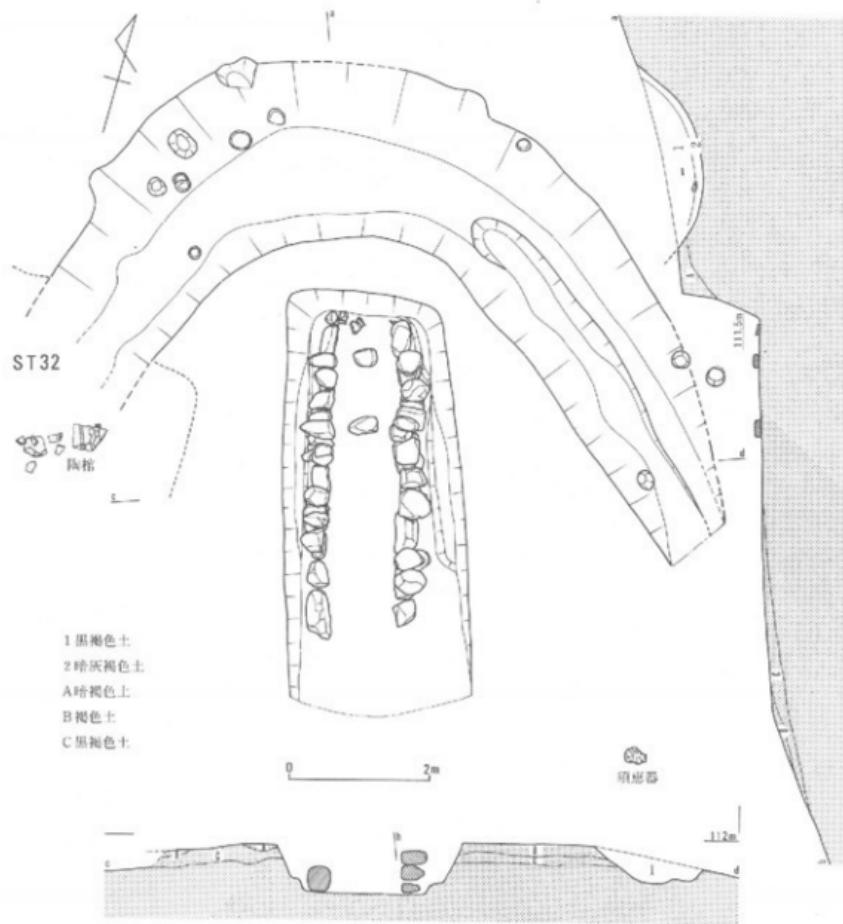
209～228は炉壁・鉄滓捨て場、弥生時代の溝が位置する小支谷に堆積した包含層からの出土である。209～212は壺形土器である。209～211は内傾する口縁部端面に凹線文をめぐらせ、その上を斜方向の連続した刻目文、円形浮文で飾るものである。212は水平方向に外方に張り出した口縁部をもち、水平面には櫛描波状文をめぐらせている。端面はほぼ垂直で凹線文をめぐらせた後、斜方向の連続刻目文さらに円形浮文で加飾するものである。216～224は甕形土器である。内傾する口縁端面はいずれも凹線文をもち、端部は肥厚し拡張する。



第44図 遺構に伴わない遺物(1)



第45図 遺構に伴わない遺物(2)



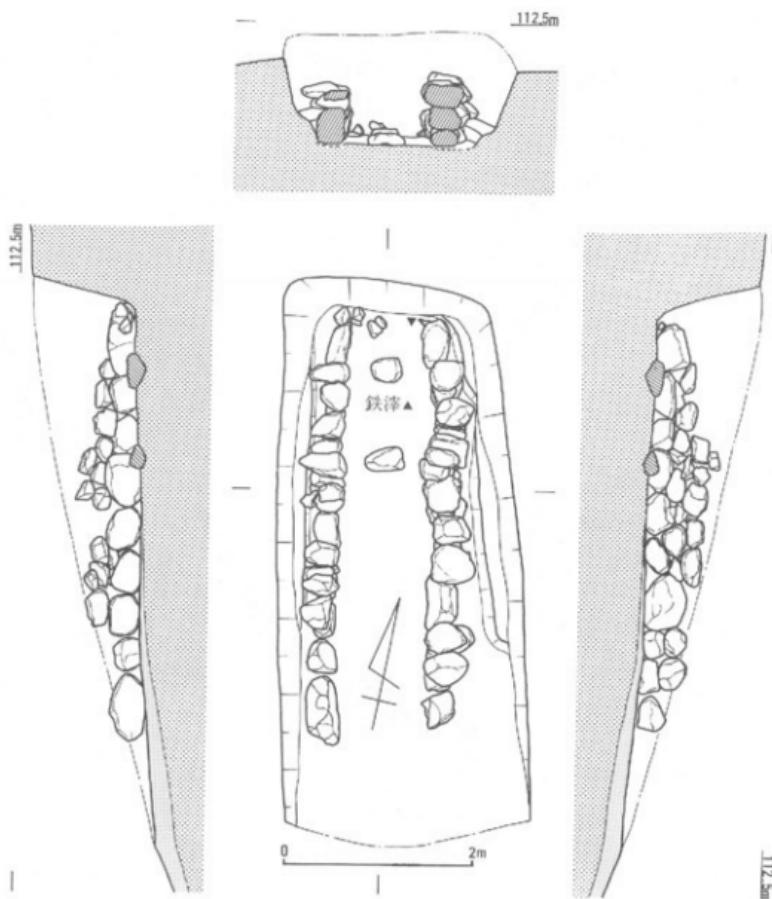
第46図 1号墳平面・断面図 ( $S = 1 : 80$ )

## (2) 古墳時代

古墳時代に属する遺構は1~3号の古墳と調査区南端に位置する3つの段状遺構及び土壙墓1基だけであり、本遺跡に集落を営んでいたような形跡は認められない。以下、各遺構ごとに概観してみよう。

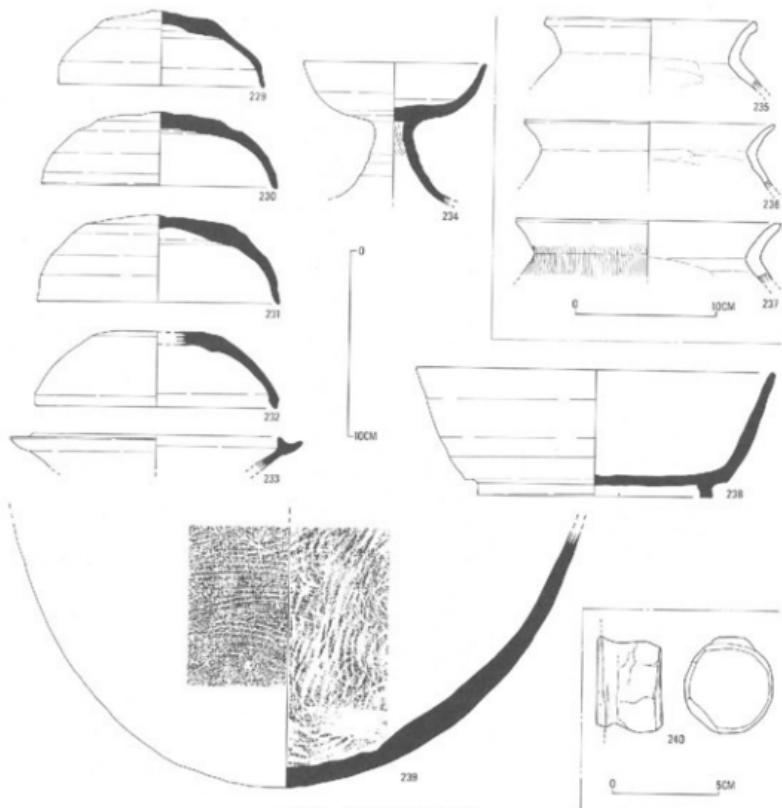
### 1号墳 (第46~49図)

調査区中央の頂部から南に派生した尾根の先端部に位置する。山側に半円状に周溝をめぐら



第47図 1号墳石室平面・断面図 ( $S = 1 : 60$ )

せ、中央部に横穴式石室を構築している。周溝の西端は段状造構32と重複している。新旧関係は1号墳の方が新しい。ちょうどこの部分から陶棺の破片がまとまって出土した。埋葬後比較的早い時期すなわち周溝が埋まる段階で盜壠され、投げ込まれたものと考えられる。石室床面幅は1m、長さは現存長4.5mを測る。床面北寄りに扁平な石が2個検出された。おそらく棺台と考えられる。石室の石材はかなり抜き取られており奥壁石は遺存しない。側壁は基本的に横口積であり、最もよく残っているところで3段を数える。周溝から復元して径約7mの円墳と推定される。石室床面から鉄滓2点が出土した。他に周溝埋土、石室埋土から奈良時代の遺物がかなり出土した。ここでは主に古墳に関係する時期のものを図示した。238を除き当該時期の



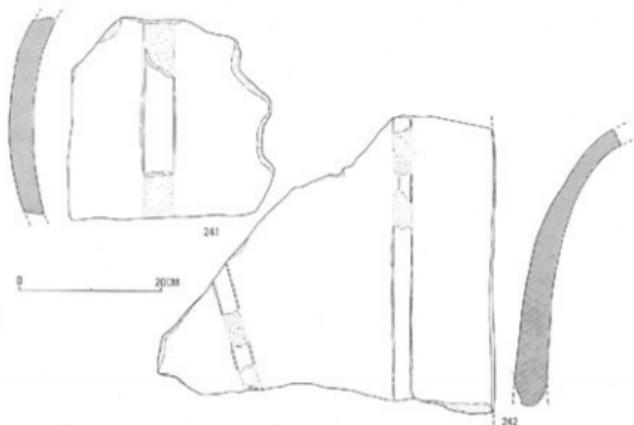
第48図 1号墳出土遺物(1)

ものである。239の須恵器甕は埴丘南斜面に置かれた状態で出土した。第49図は周溝埋土より出土陶棺片である。

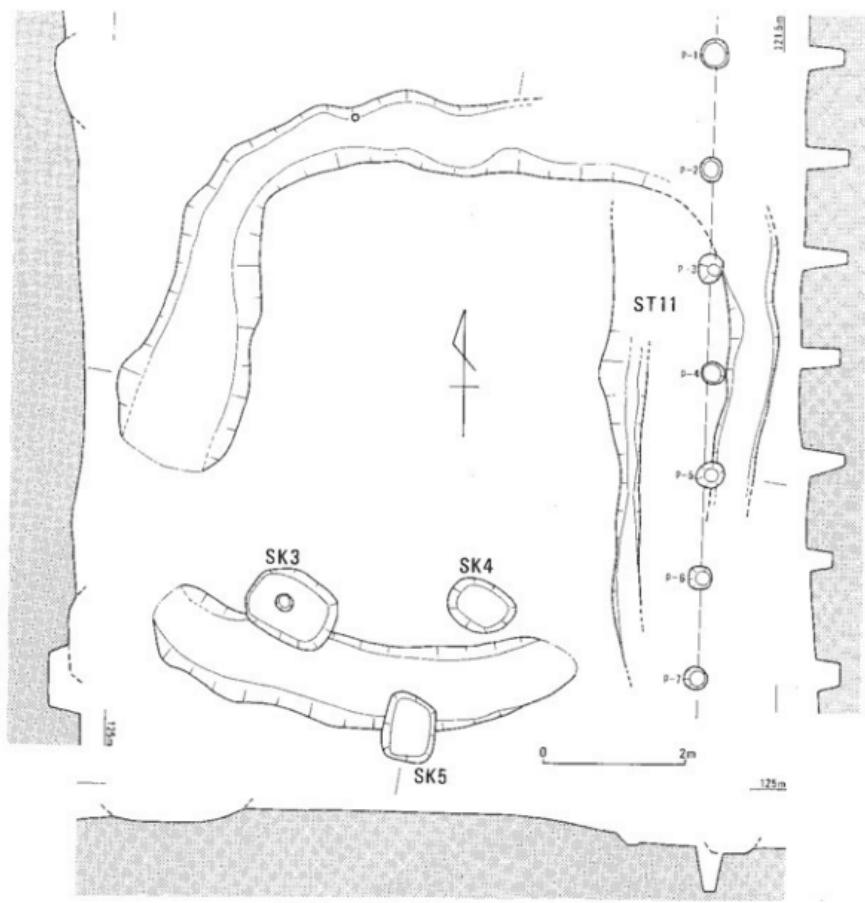
2号墳（第50・

51図）

調査区中央頂

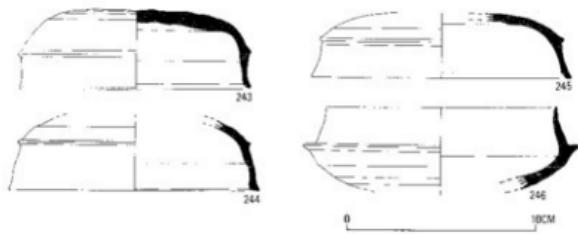


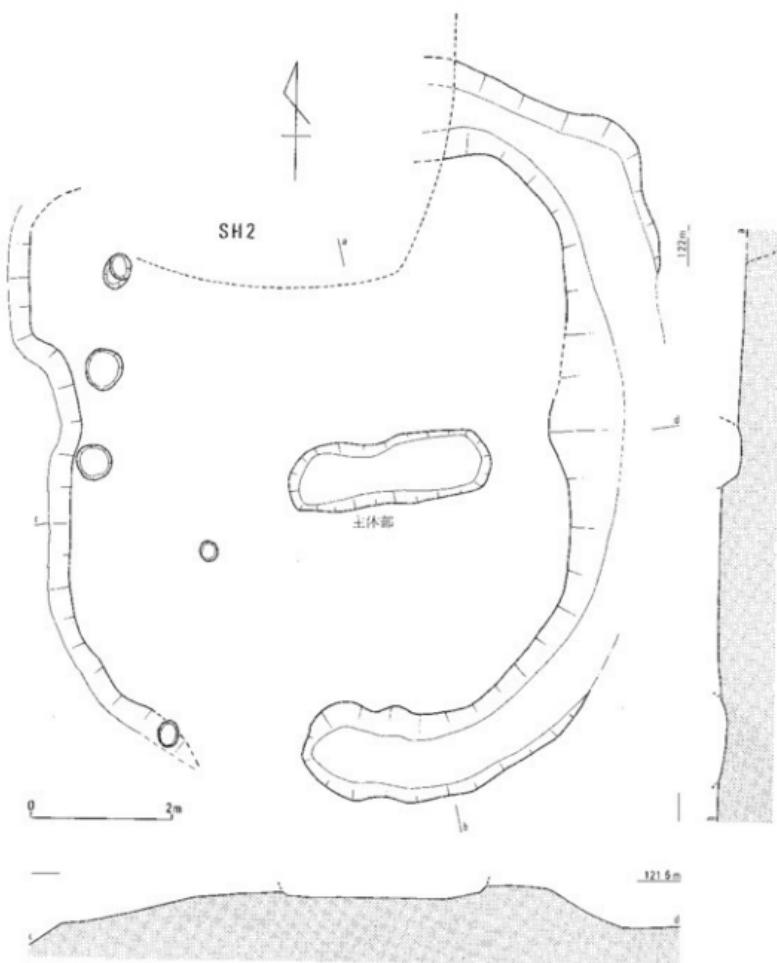
第49図 1号墳出土遺物(2)



第50図 2号墳・段状造構11平而・断面図 (S = 1 : 80)

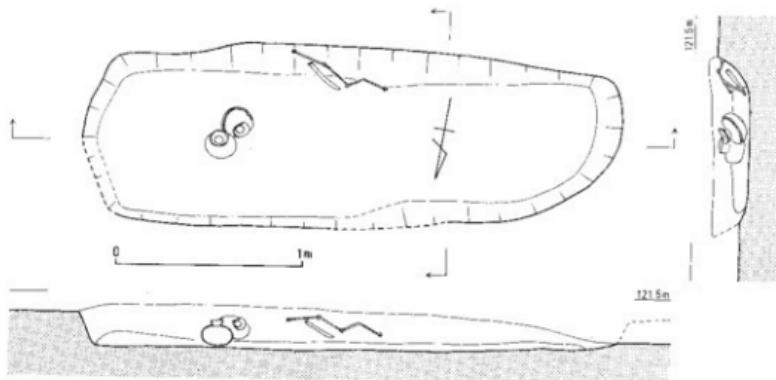
部に段状造構11と重複して位置する。埋葬主体部は遺存せず、周溝底面がわずかに認められるだけである。周溝のプランから推定して1辺約7mを測る方墳に復元される。周溝は





第52図 3号墳平面・断面図 ( $S = 1:80$ )

南西隅、南東隅部が途切れているが他はほぼ一貫する。周溝の幅は上面で60~160cmを測る。遺物は周溝北西部の床面より完形の須恵器杯蓋が出土しただけである。243がそれである。天井部と口縁部の境界は外方に鋭角に張り出し、明瞭な稜線を形成している。口縁端部は丸くおさめている。天井部上位は削軸ヘラケズリ仕上げである。244~246は周辺の遊離である。244・245は杯蓋である。両者とも天井部と口縁部の境界は鋭く外方に張り出し、口縁端部は平らに仕上げている。246は杯身である。立ち上がり部はやや内傾しながら立ち上がる。受部は水平方向に



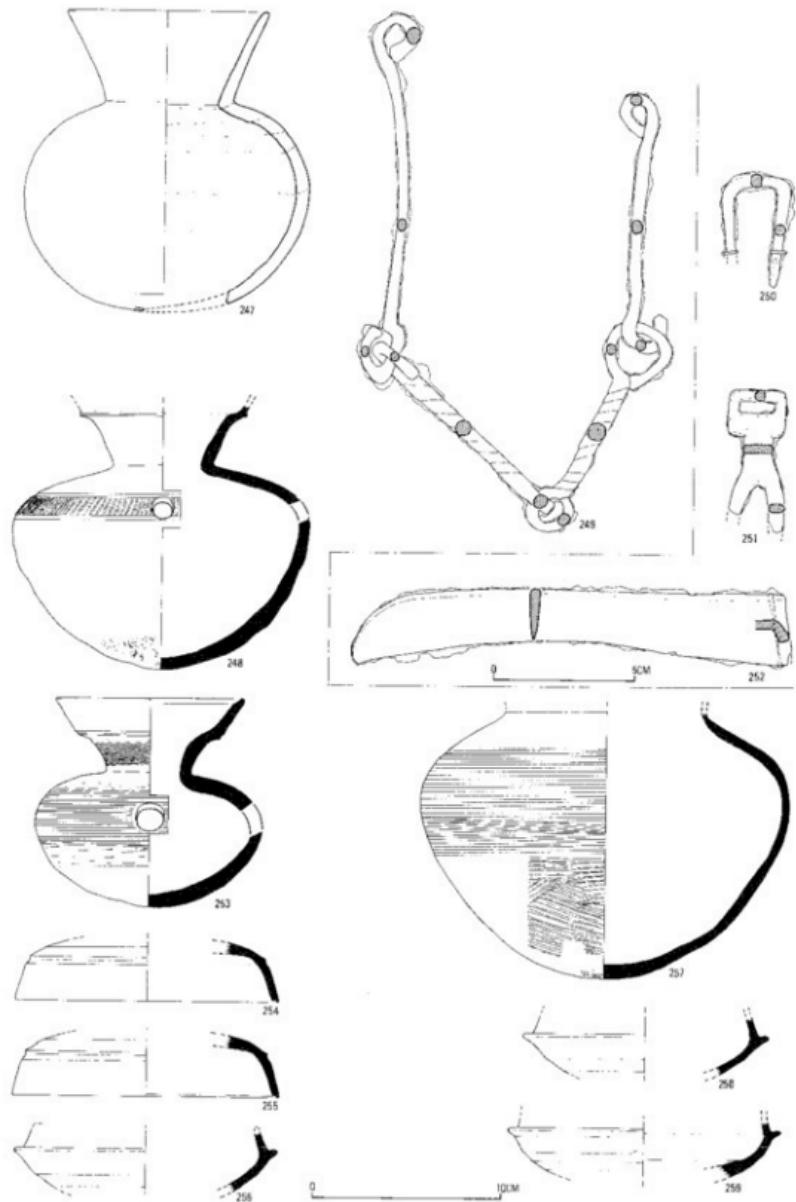
第53図 3号墳主体部平面・断面図 ( $S = 1 : 30$ )

外方に張り出す。端部はどちらも鋭角におさめている。

### 3号墳 (第52~54図)

調査区中央頂部から北に派生した尾根の鞍部に住居址2と重複して位置する。表土を約20cm程度剥いだら主体部と周溝が検出されたことから盛土は遺存していないものと考えられる。残存する周溝のプランから考えて、東西約7m、南北約8mを測る方墳に復元される。周溝は一巡せず南辺で途切れている。埋葬主体部は東西方向に長軸をとり、中央部よりやや東よりに位置する。遺物は床面中央やや東寄りに須恵器甕、土師器直口壺が、両側壁面に沿って馬具のクツワ、鎌、用途不明の鉄製品が2点出土した。

247は土師器直口壺である。胎土には精製した土を用い、内面には粘土帶の接合痕跡が顕著に観察される。底部は非常に薄くて明らかではないが、焼成後の穿孔の可能性も考えられる。248は甕である。口縁端部を欠く。249は馬具のクツワである。銜金具はネジリ仕上げによる。引き手金具の長さは左右異なる。結合部など全体的に粗雑な作りである。250・251は用途不明である。250の下端には木質が接着しており、木に打ち込んだものである。251はバックル状のものである。252は鎌である。柄の装着部は断面「L」字状に折り曲げている。刃部中央はかなり高い頻度で使用されたらしく、わん曲している。この他に古墳の南側から表土除去中に数点の須恵器が出土した。精査したが遺構は検出されなかった。おそらく、別の埋葬主体部が存在したものと考えられる。253~259がそれである。253は甕、257は壺である。254・255は杯蓋、256・258・259は杯身である。杯蓋はいずれも口縁部と天井部との境界に明確な凹線をもつ。口縁部端面は2段になる特徴をもつ。杯身は受部が外方に張り出し、口縁部はやや内傾し立ち上がる。



第54図 3号墳出土遺物

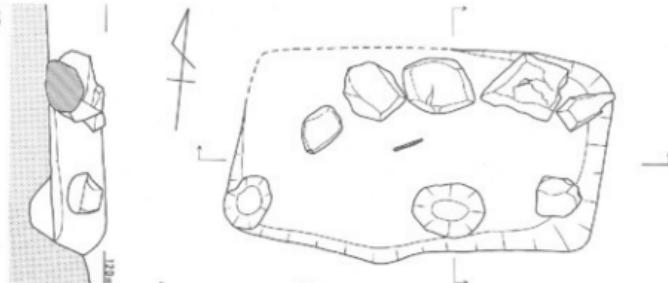
土壤墓2(第

55・56図)

調査区中央  
尖頂部から  
南東方向に  
派生した丘  
陵の南西斜  
面、段状遺  
構18の上位  
に位置する。

長辺1.3m

短辺70cmを  
測る長方形



第55図 土壤墓2 平面・断面図 ( $S = 1:20$ )

の土壤を堀り、内側に約20cm前後の石を配した土

壙墓である。南側石列は遺存しない。埋土は1層  
で床面から260の鉄製品が出土しただけである。先  
端部を欠き、基部には木質が接着している。断面  
でわかるように、刃部は形成されていない。

段状遺構17(第57・59図)

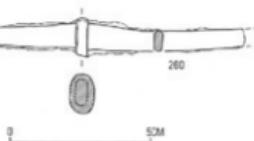
調査区中央の頂部から南東方向に派生した尾根の南西斜面に位置する。斜面を削平し、長さ約17m、平均幅約1mを測る平坦面を形成している。平坦面の北側には壁に沿って約4mにわたり浅い溝が位置する。平坦面にはP-1～P-4の4個の柱穴よりなる柱穴列が位置する。各柱穴の心々距離は2～2.4mを測る。南半部にピットが多数検出されたが、一定の組み合せになるものはない。遺物は埋土中より若干量が出土した。261～265は杯蓋である。266・267は杯身である。265～267は埋土上層より出土した。従って、後の流入と考えられ、本遺構の時期としては261～264が相当するものと考えられる。

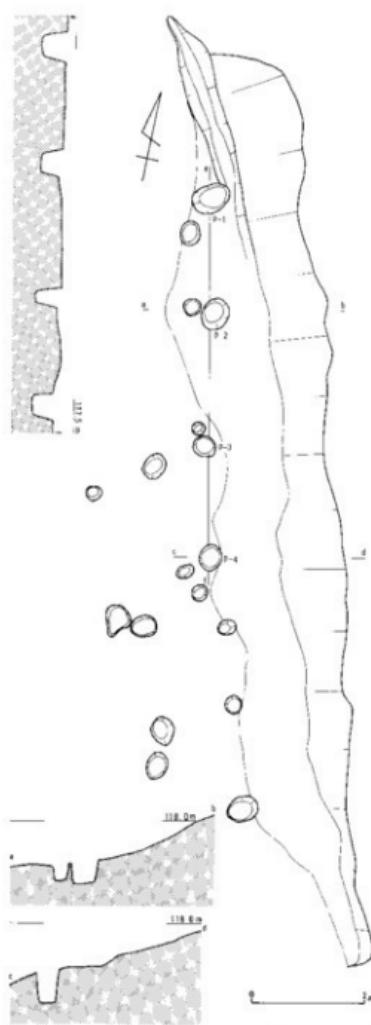
段状遺構18(第58・60図)

調査区中央頂部から南東方向に派生した尾根の南西斜面に段状遺構17と並んで位置する。斜面を削平し長さ約20m、幅約1mを測る平坦面を形成している。山側の壁の状況により西、中央、東の3ブロックに区分される。西ブロックは柱穴列をもたない代わりに溝をもつ。中央ブロックはP-2が土壤48と重複しているが、4個の柱穴よりなる柱穴列をもつ。東ブロックは3個の柱穴よりなる柱穴列をもつ。それぞれの切り合い関係は不明である。遺物は埋土中より若干量出土した。269～271は杯蓋である。口径・器高ともほぼ同一である。273～277は變形土



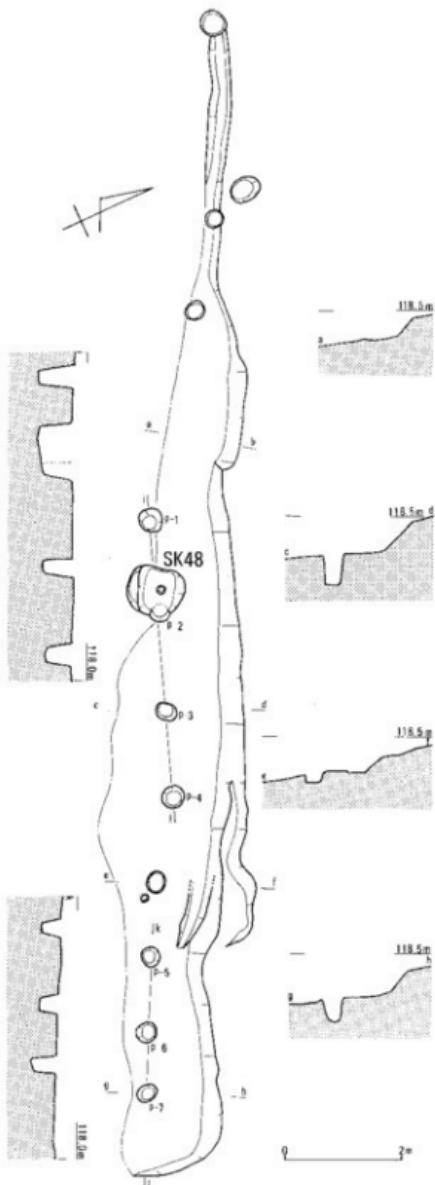
第56図 土壤墓2 出土遺物





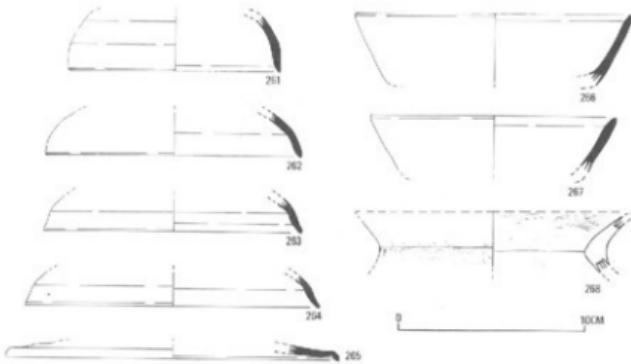
第57図 段状遺構17平面・断面図 ( $S = 1 : 100$ )

器である。269・270は西ブロックの溝より出土した。273～277は中央・東ブロックより出土した。272は砾石である。角柱状のもので4面を砥面として使用している。火を

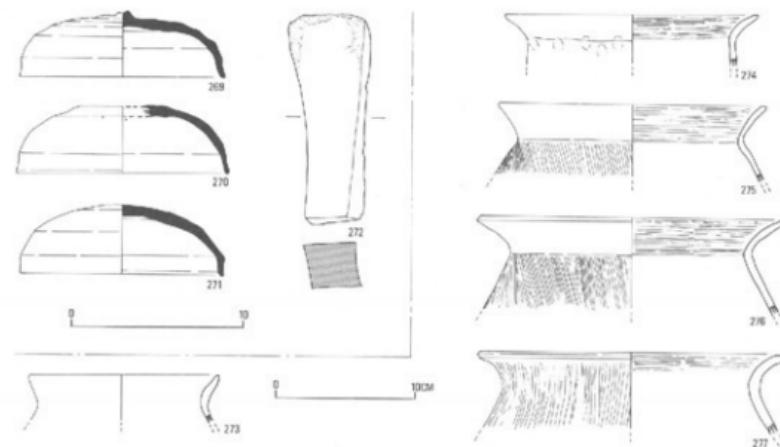


第58図 段状遺構18平面・断面図 ( $S = 1 : 100$ )

受けしており赤化している。石材は不明である。  
東ブロック床面より出土した。  
この種の遺構は等高線走向に沿って位置するものが多い。



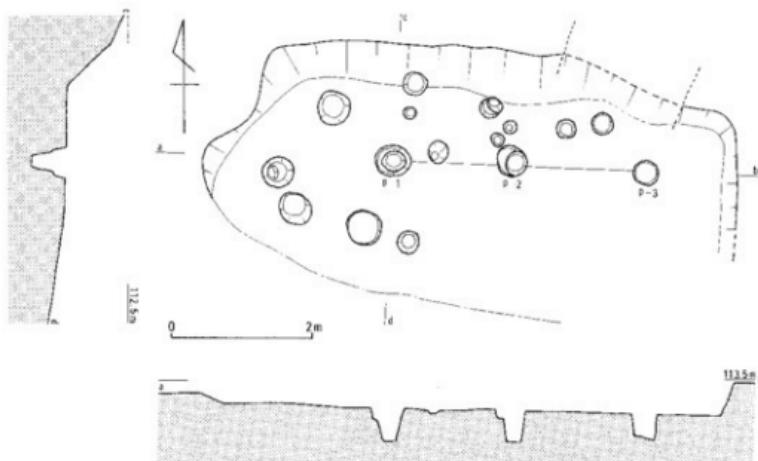
第59図 段状遺構17出土遺物



第60図 段状遺構18出土遺物

### 段状遺構32（第61図）

調査区中央頂部から南に派生した尾根の先端部に1号墳と重複して位置する。丘陵斜面を断面「L」字状、平面「コ」の字状に削平し、長さ約7m、幅約3mを測る平坦面を形成している。平坦面上には3柱穴よりなる柱穴列が位置する。遺物は土師器小片が出土したが図示できるものではない。



第61図 段状遺構32平面・断面図 (S = 1 : 80)

### (3) 奈良時代

奈良時代の遺構は調査区の南側、Uラインよりすべて南に位置する。遺構は製鉄関連のものである。すなわち、住居址、建物址群、段状遺構群、製鉄遺構及び炉壁・鉄滓捨て場である。

以下、各遺構ごとに概観してみよう。

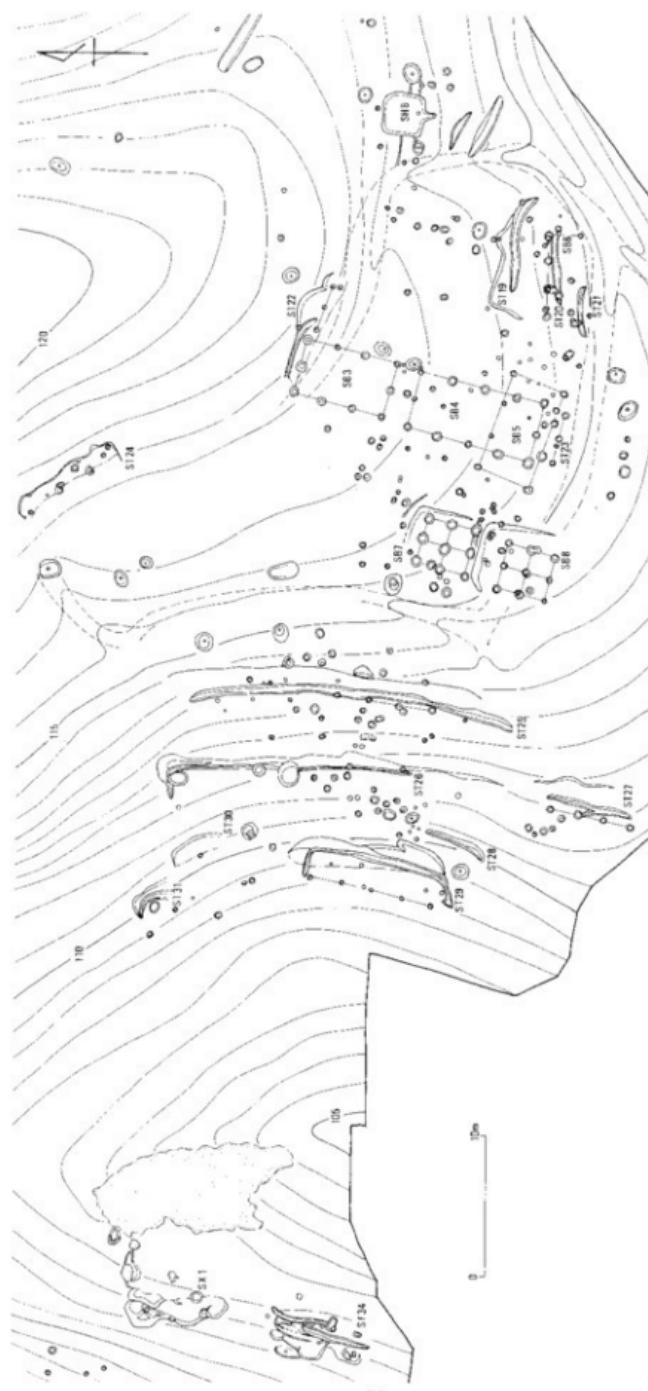
#### 住居址 6 (第63・64図)

製鉄関連遺構群の東端に溝2と重複して位置する。新旧関係は溝2の方が新しい。1辺約3mを測る方形住居である。南辺側中央部に幅約50cm、長さ約1mを測る溝状の張り出し部がつく。底面のレベルは住居址床面と同一である。深さは中央部で約50cmを測る。床面に柱穴は検出されなかった。浅いピットが1ヶ所検出されたが柱穴になるものではない。柱穴、カマド、炉等何も確認されなかつたが住居址に分類した。遺物は埋土上層より若干量出土した。278は杯蓋、279～281は杯身である。279は高台の付くもの、280・281の底部は回転ヘラ切りである。280の口縁端部は外方に丸くつまみ出しておさめている。281の口縁部外面には3条の沈線を施している。282は変形土器である。胴部内面には同心円の叩きによる青海波文がわずかに観察できる。他に埋土上層より多量の鉄滓が出土している。

#### 建物址 3 (第65・66図)

尾根の中央部に桁行方向が等高線走向に直交して位置する。桁行3間、梁間2間の南北棟である。北側の山側には斜面を断面「L」字状に削平した平坦面が形成されている。壁際には幅約20cmを測る浅い溝が位置する。本末、柱穴はこの平坦面から掘り込まれていたものであるが、後世の畠地の造成によりP-1～P-3にかけてわずかに平坦面が残存するだけである。梁間

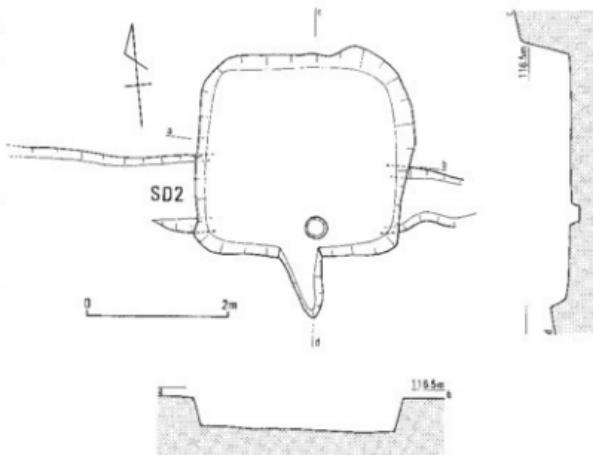
第622圖 製鐵廠建造構平面圖 ( $S = 1 : 400$ )



P-1～P-3、P-6～P-8の心々距離はともに4mを測る。桁行P-3～P-6は6.7m、P-8～P-1は6.6mを測る。P-1、P-3には柱痕跡が認められ、径は約20cmである。各柱穴の底面のレベルは多少の差はあるが同一である。段状遺構22と重複しているが、新旧関係は不明である。瓦を含む若干量の遺物が平坦面の埋土中より出土した。283は杯蓋である。口径は20cmを測る大型のものである。284～286は杯身である。284には高台がつく。他に鉄滓1点が出土した。

#### 建物址4（第67図）

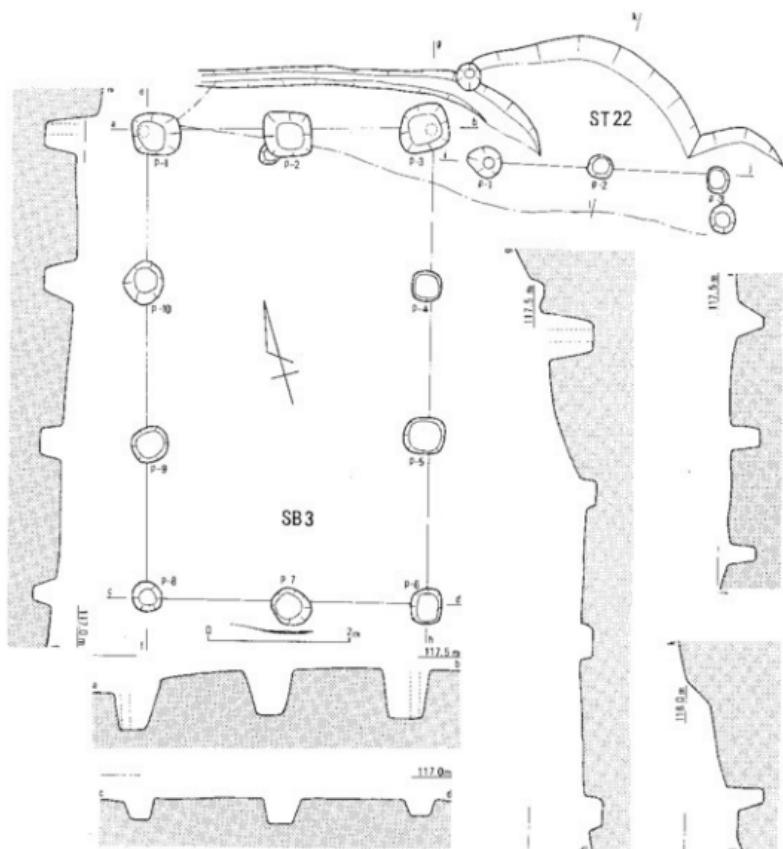
建物址3の南に平行して位置する。桁行方向は建物址3と同様、等高線走向に直交する。桁行4間、梁間2間の南北棟である。梁間P-1～P-3の心々距離は4.1m、P-7～P-9は4.5m、桁行P-3～P-7、P-9～P-1はともに9mを測る。梁間の各柱穴の底面のレベルはほぼ同一である。



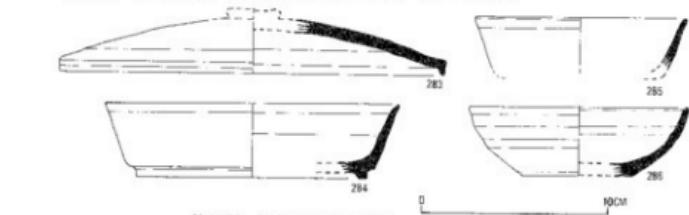
第63図 住居址6平面・断面図 (S = 1:80)



第64図 住居址6出土遺物



第65図 建物址3、段状造構22平面・断面図 ( $S = 1:80$ )

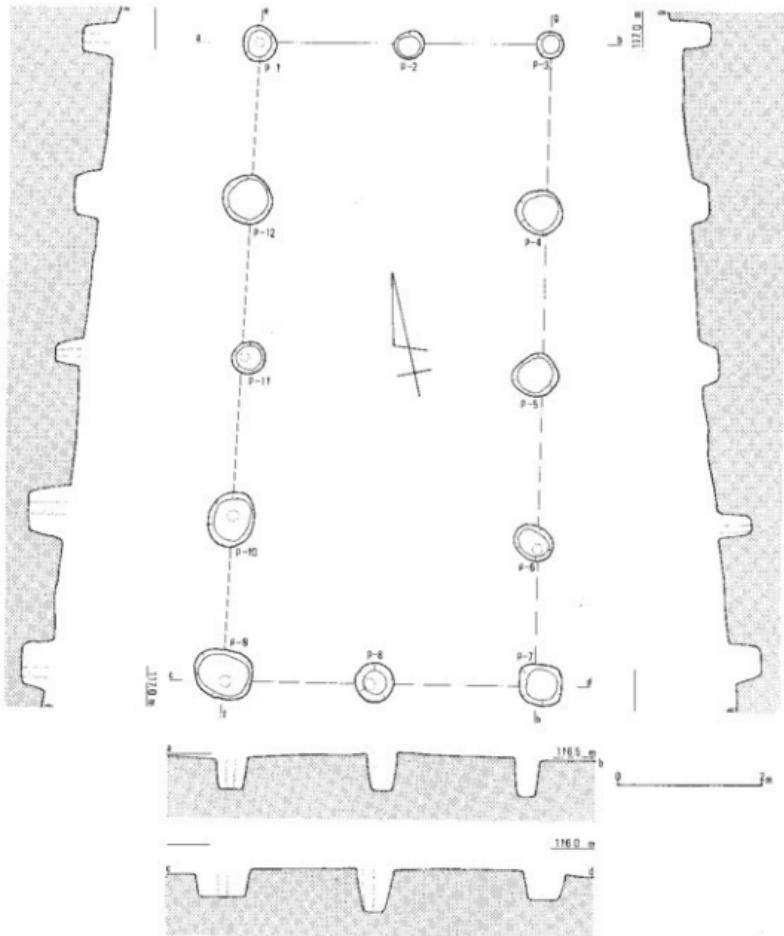


第66図 建物址3出土遺物

が、桁行の柱穴の底面のレベルは傾斜にそって順次低くなっている。P-1、P-6、P-8～P-11に柱痕跡が認められた。

#### 建物址5（第68図）

建物址4の南半に重複して位置する。桁行方向は等高線走向に平行する。桁行3間、梁間1

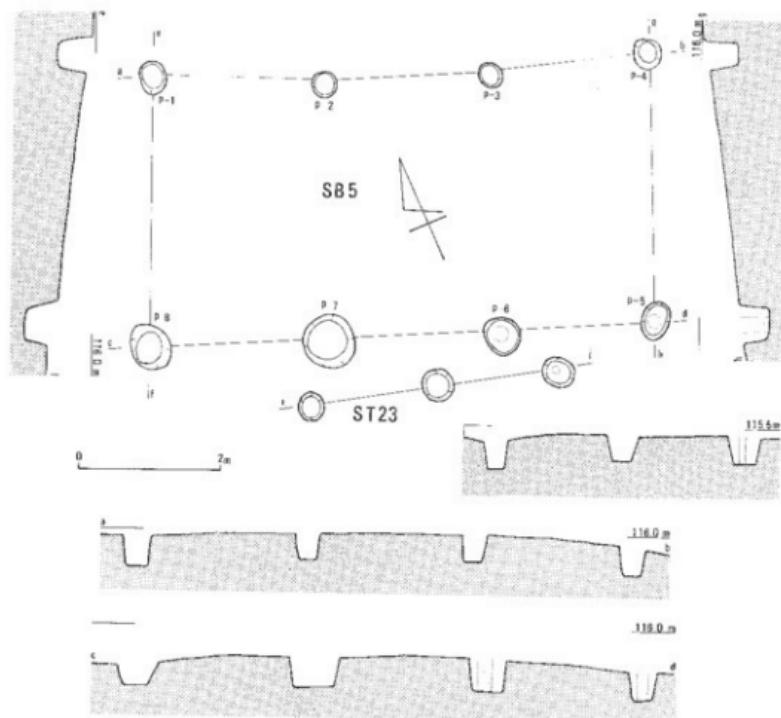


第67図 建物址4平面・断面図 ( $S = 1 : 80$ )

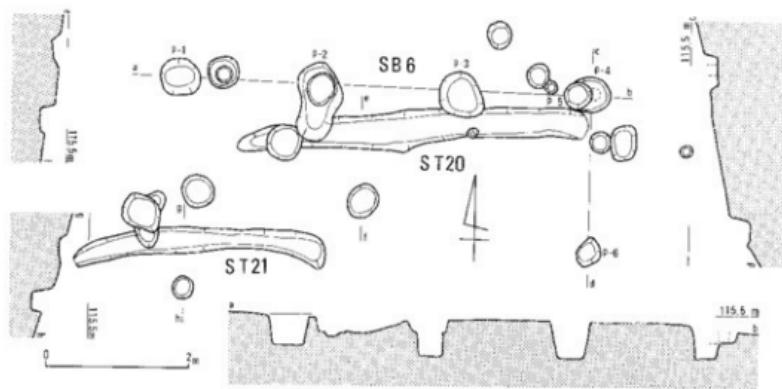
間の東西棟である。梁間P-1～P-8、P-4～P-5の心々距離はともに3.8m、桁行P-1～P-4は7m、P-5～P-8は7.1mをそれぞれ測る。桁行方向P-1～P-4の間のP-2、P-3は内側に少しふっている。桁行方向の柱穴の底面のレベルはほぼ一定であるが、梁間の柱穴の底面は傾斜にそって谷側が低い。P-2から鉄滓1点が出土している。

#### 建物址6（第69図）

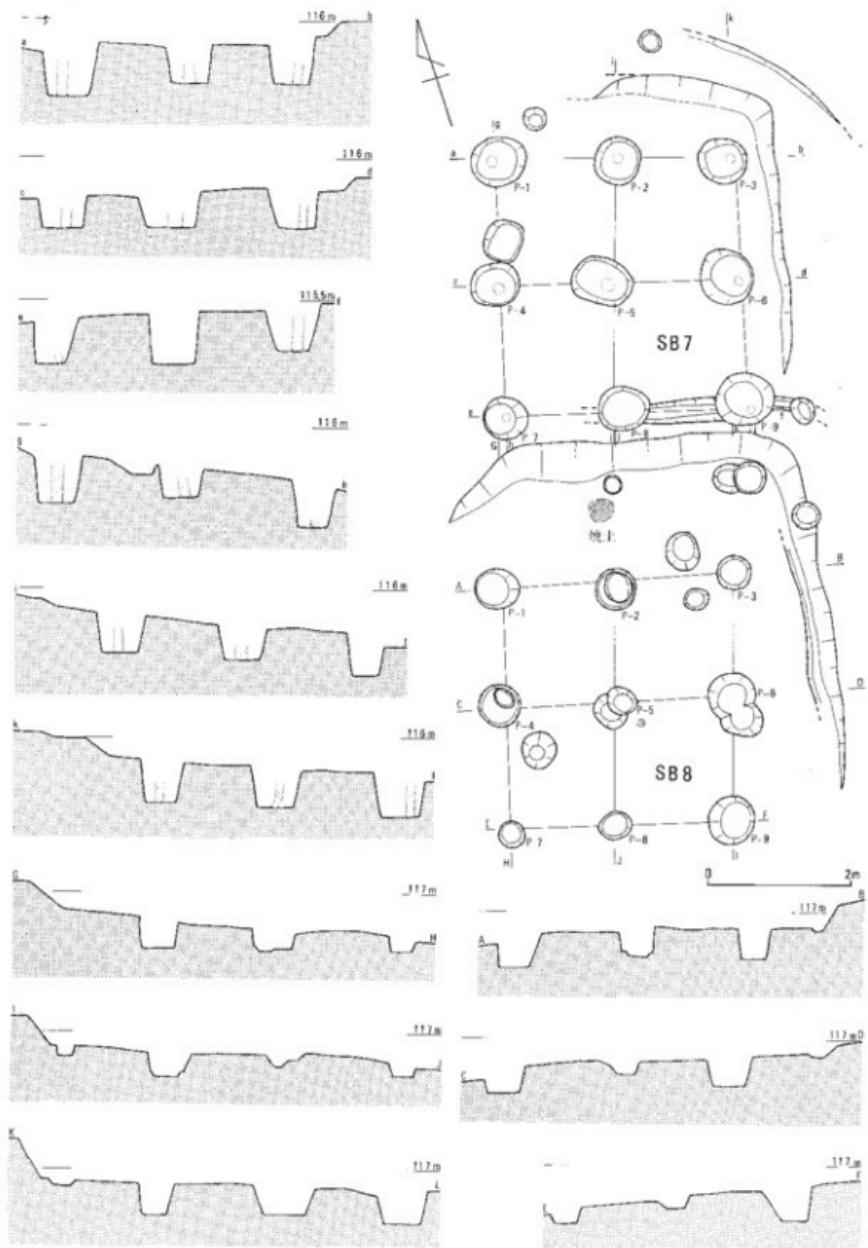
建物址5の東側に等高線走向に平行して位置する。南半は現代の区画溝に切られており、北



第68図 建物址5、段状遺構23平面・断面図 ( $S = 1 : 80$ )



第69図 建物址6、段状遺構20・21平面・断面図 ( $S = 1 : 80$ )



第70図 建物址7・8平面・断面図 ( $S = 1 : 80$ )

側桁行及び東側梁間の1柱穴が遺存するだけである。これから推定して、桁行3間、梁間2間の建物と考えられる。桁行方向P-1～P-4の心々距離は約6mを測る。柱穴の底面のレベルはほぼ同一である。P-4には柱痕跡が認められた。段状遺構20・21と重複する。

#### 建物址7（第70・71図）

建物址4、建物址5の西側に建物址8と重複して位置する。新旧関係は建物址7の方が新しい。2間×2間の純柱建物である。斜面を削平し、平坦面を形成する。その平坦面に柱穴を配している。柱穴の掘り方は非常に大きく、径約60-90cmを測る。掘り方に比べ、柱は小さく柱痕跡から20-30cm前後の径となる。P-1～P-3、P-4～P-6、P-7～P-9の心々距離は3.4m、P-1～P-7、P-2～P-8、P-3～P-9は3.6mを測る。P-8を除きすべての柱穴より柱痕跡が確認された。埋土中より鉄滓を含む若干量の遺物が出土した。第71図がそれである。

#### 建物址8（第70・72図）

建物址7同様、斜面を削平し平坦面を形成している。平坦面に2間×2間の純柱建物を配置している。堀り方の北側及び床面の東壁にそって浅い溝が検出された。P-1～P-3、P-1～P-7、P-2～P-8の心々距離は3.4m、P-4～P-6は3.5m、P-7～P-9は3.2m、P-3～P-9は3.6mをそれぞれ測る。中央柱穴のP-5が他の柱穴に比べてやや深い。床面P-

2の北側及び  
P-5付近に

焼土面が検出  
された。埋土

は非常に固く  
たたきしめら

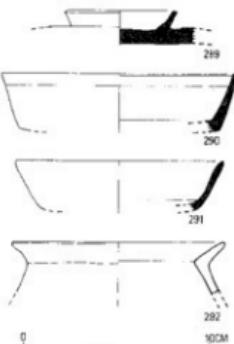
れていた。こ  
の埋土中より

若干量の遺物

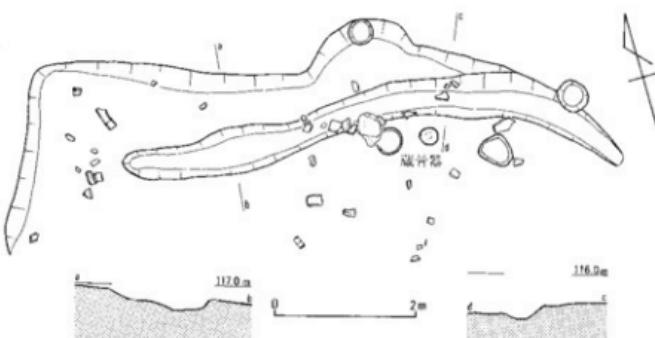
が出土した。



第71図 建物址7出土遺物

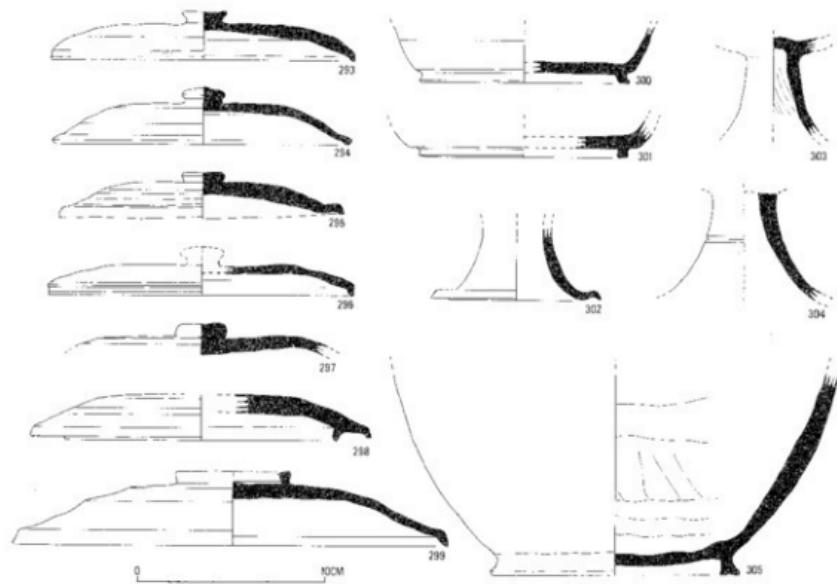


第72図 建物址8出土遺物



第73図 段状遺構19平面・断面図 (S = 1 : 80)

第72図に図示した。



第74図 段状造構19出土遺物

建物址6の北側に位置する。斜面を削平し、長さ8.5m、幅2.5mの平坦面を形成している。平坦面には幅約30cm、長さ約7mを測る浅い溝が位置する。溝及び床面から須恵器、瓦等の遺物がかなり出土した。さらに、本遺構埋没後の所産と考えられる藏骨器1点が出土した。298は身と蓋が逆転した時期のものである。299は大型の杯蓋でツマミは高台状のものがつく。305は藏骨器である。中からは焼入骨が出土した。瓦も多量に出土したが、いずれも火を受けており赤化してもらひ。文様は第89図にあるように平瓦はすべて表面は布目、裏面は繩印き目である。

## 段状造構20（第69図）

建物址6と重複して位置する。新旧関係は不明である。幅約40cm、長さ約5mを測る浅い溝が位置する。溝の両側には平坦面が存在したものと考えられるが、ちょうどこの付近から現代の溝による削平を受けており遺存しない。柱穴はe-fの断面図に示すように1ヶ所だけ検出されただけで、柱穴列を構成するものではない。

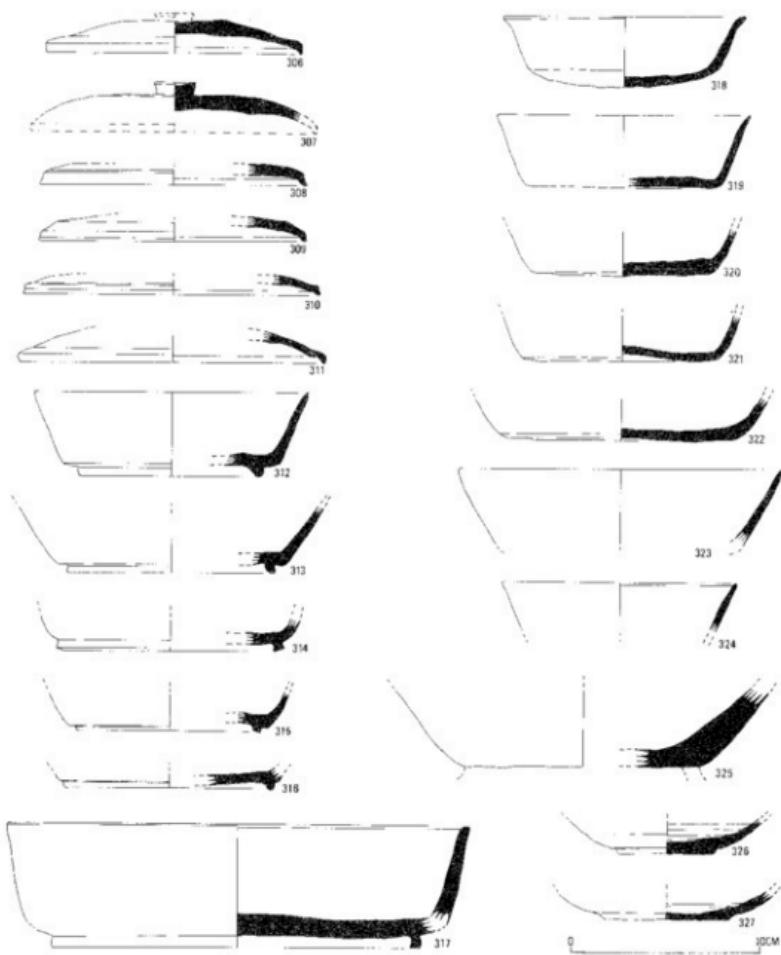
## 段状造構21（第69図）

建物址6と重複し、段状造構20の下位に位置する。段状造構20と同じ状況で、幅約30cm、長さ約3.6mの浅い溝が等高線走向に沿って位置する。やはり溝に沿って平坦面があったものと考えられるが、後世の削平により遺存しない。柱穴も段状造構20同様、1ヶ所で列をなすものではない。遺物は出土しなかった。



第76図 段状造構26平面・断面図 ( $S = 1 : 100$ )

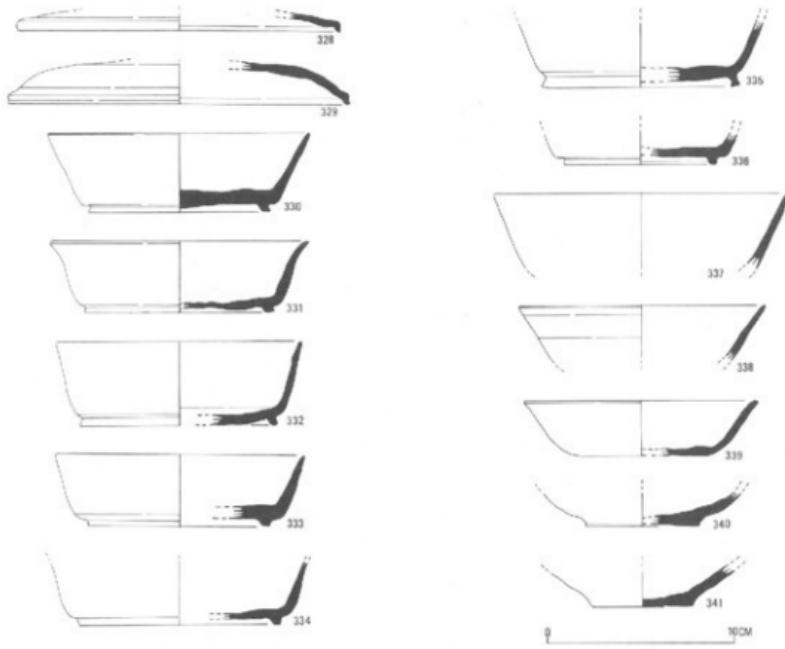
第75図 段状造構25平面・断面図 ( $S = 1 : 100$ )



第77図 段状遺構25出土遺物

段状遺構22（第65図）

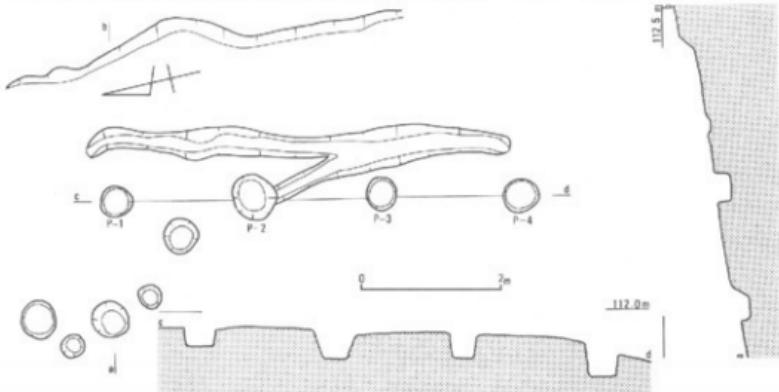
建物址3の東側に重複して位置する。新旧関係は不明である。斜面を削平し平坦面を形成している。平坦面の南側は後世の溝の掘削により遺存しない。平坦面は不整形であるが、最大幅約2m、長さ約5mを測りそのまま建物址3の平坦面へと通じている。平坦面にはP-1-P-3の3個の柱穴列が位置する。各柱穴の心々距離は約1.6mを測り、底面のレベルはほぼ一定である。



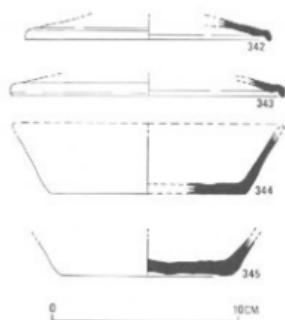
第78図 段状遺構26出土土器

#### 段状遺構23（第68図）

建物址5の南側に位置する。3個の柱穴列よりなるが、ちょうどこの部分が現代の溝により削平をうけているので、本来は斜面を削平した平坦面上に位置していたものと考えられる。P-1～P-3の心々距離は3.5mを測る。底面のレベルはP-2、P-3に比べて、P-1はや



第79図 段状遺構27平面・断面図 (S = 1 : 80)



第80図 段状遺構27出土遺物

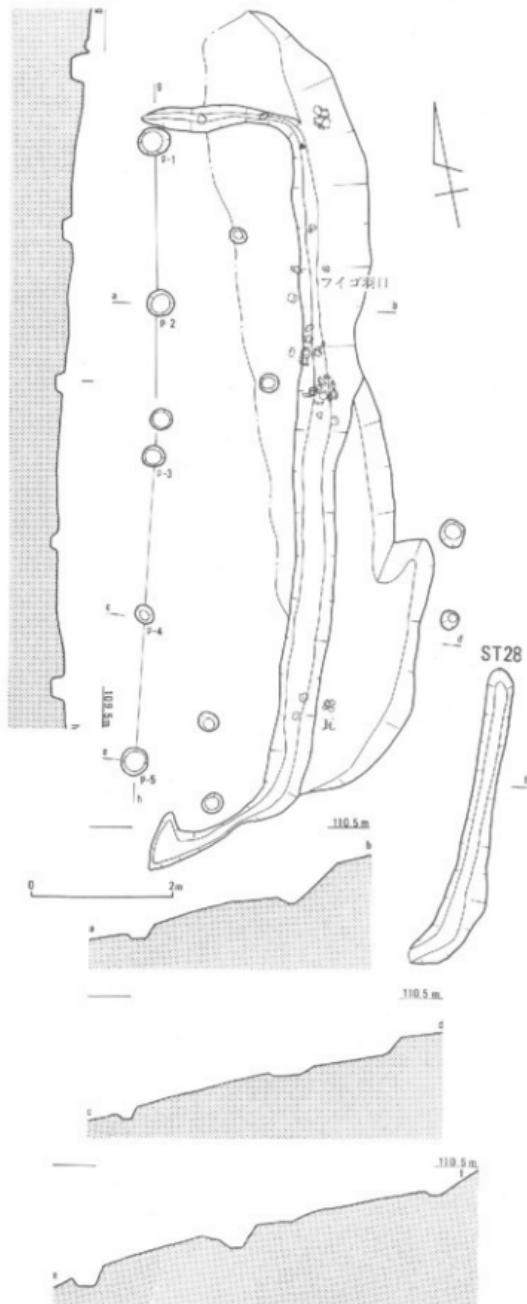
や深い。P—3には柱痕跡が認められた。

#### 段状遺構25（第75・77図）

建物址7・8の西側斜面に等高線走向に沿って位置する。斜面を削平し幅約3m、長さ約19mを測る平坦面を形成している。壁際には幅30~50cmを測る浅い溝が位置する。平坦面西側中央部には非常によく焼けた焼土面が位置する。平坦面の南半には溝に沿ってP—1~P—4の柱穴列が位置する。各柱穴の心々距離は1.8~2mを測る。遺物はいずれも埋土中からの出土である。326・327は勝間田焼碗であり、遺構検出時に出土した。他に瓦数点が出土している。

#### 段状遺構26（第76・78図）

段状遺構25の下位の斜面に等高線走向に沿って位置する。斜面を削平し、幅約2m、長さ約19mを測る平坦面を形成している。南側を除き、壁際に浅い溝が位置する。



第81図 段状遺構28・29平面・断面図 (S = 1 : 80)

平坦面には多数のピットが検出されたが、柱穴列あるいは建物配置をなすものはない。遺物はいずれも埋土より出土した。

#### 段状遺構27（第79・80図）

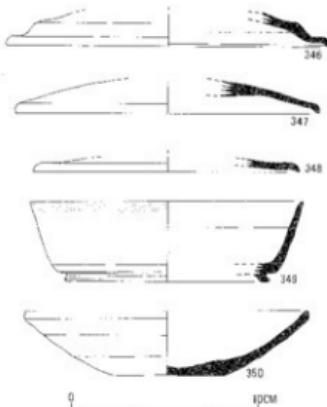
段状遺構26の南側に位置する。丘陵斜面を削平し幅約1.5m、長さ約7mを測る平坦面を形成している。平坦面が斜面の自然傾斜に解消される付近に長さ約6mを測る浅い溝が位置し、さらに西側下位に4個の柱穴からなる柱穴列が溝に平行して位置する。各柱穴の心々距離は1.8~2mを測る。遺物は埋土中より若干量出土した。図示したものの他に、鉄滓1点が出土した。

#### 段状遺構28（第81・82図）

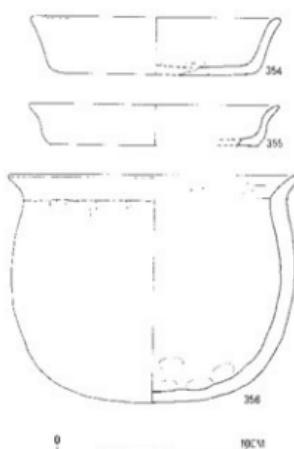
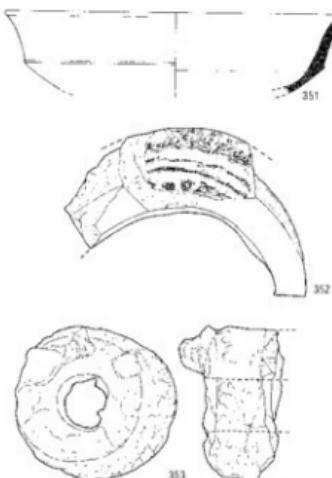
段状遺構26の下位に位置する。現状では幅約30cm、長さ約4.5mを測る浅い溝が位置するだけであるが、当初は平坦面を有していたものと考えられる。溝から斜面にかけて遺物が出土した。350は土師器である。

#### 段状遺構29（第81・83~85図）

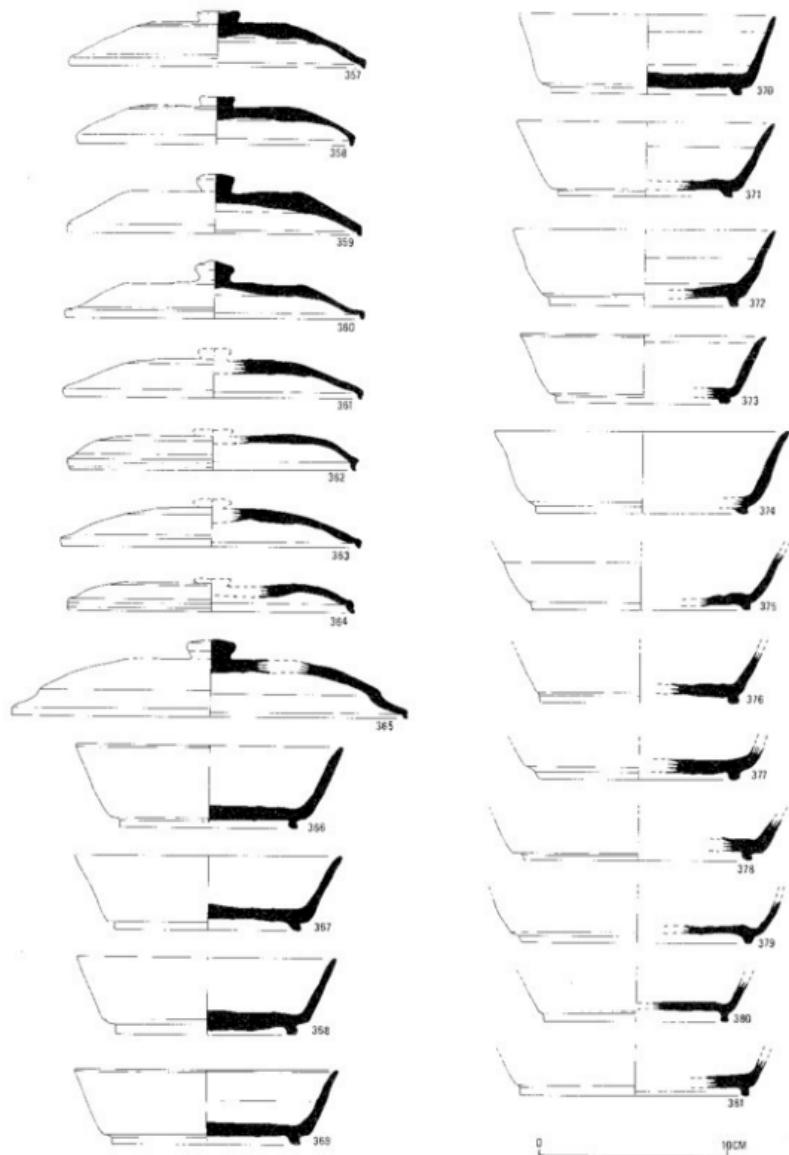
段状遺構28の下位の斜面に位置する。斜面を削平し、長さ約12m、幅約2mの平坦面を形成



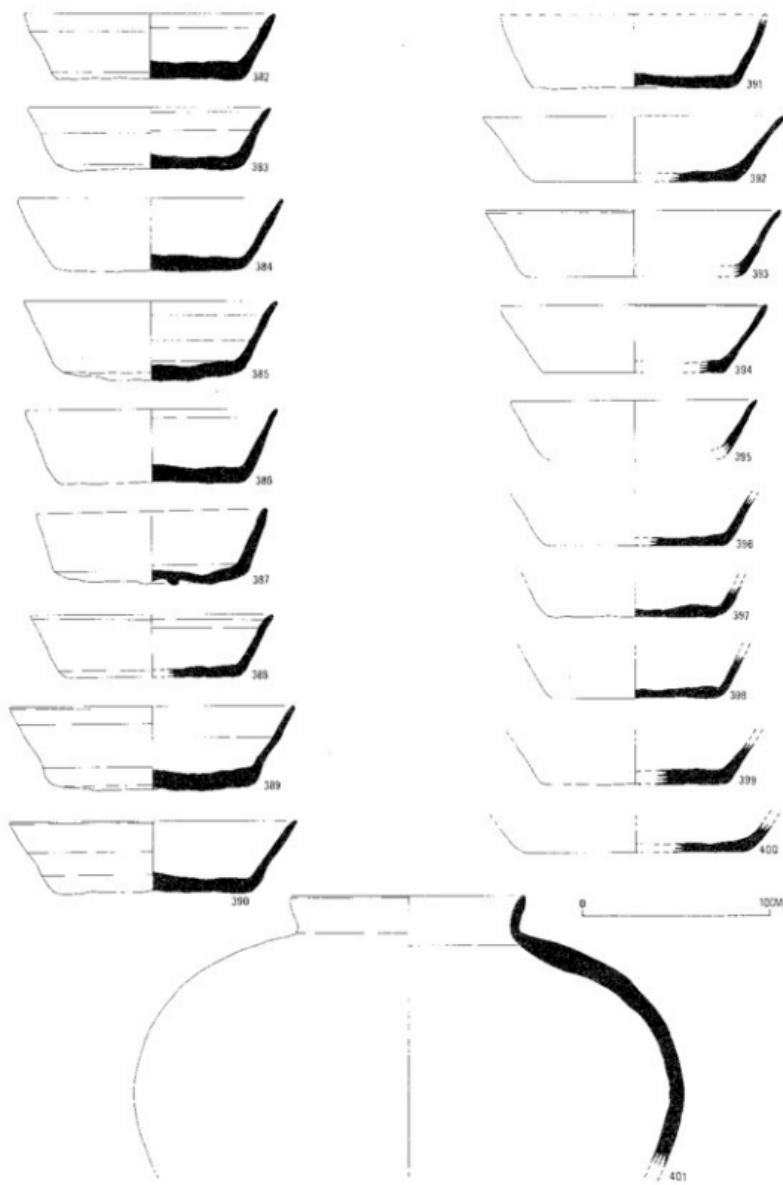
第82図 段状遺構28出土遺物



第83図 段状遺構29出土遺物(1)



第84図 段状遺構29出土遺物(2)



第85図 段状造構29出土遺物(3)

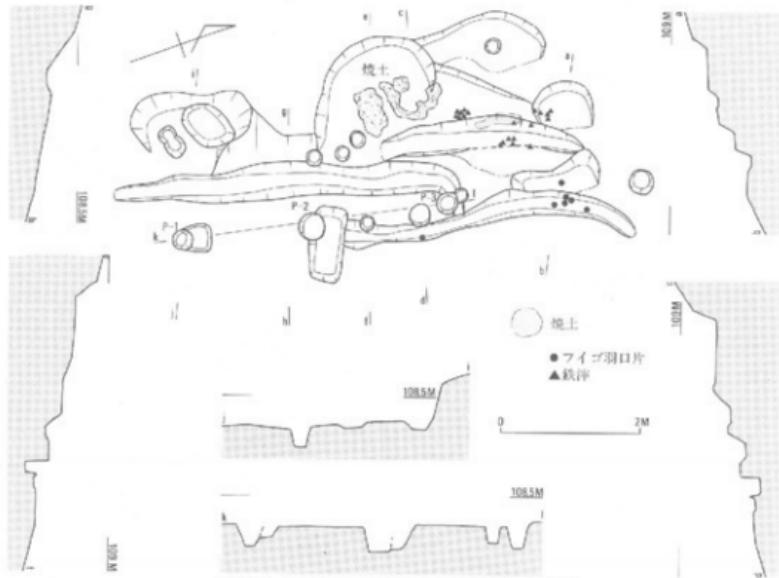
している。壁際に沿って溝を配しているが、北側部分だけはそのまま北方向に延びず、直角に西へ曲がる。また、東側の斜面上位には長さ約5m、幅0.5~1mを測る不整形な平坦面が取り付く。溝から約2mの距離をおいて溝に平行して5個の柱穴よりなる柱穴列が位置する。各柱穴の心々距離は2~2.2mを測る。遺物は多量の須恵器類の他に、鐵滓、斐伊ゴの羽口、瓦等がある。いずれも床面及び床面からやや浮いた状態で出土した。352は軒丸瓦である。わずかに瓦当面が残っている。火を受けており、もう少しほどくなっている。353は斐伊ゴの羽口である。354~356は土師器である。354は丹塗りである。

#### 段状遺構30

段状遺構26の下位の斜面に位置する。斜面を削平し、現存幅約1m、長さ約3mの平坦面を形成している。南側は後世の削平により遺存しないが、もう少し延びていたものと考えられる。現存平坦面には小規模な柱穴が1個検出された。埋土中より若干量の遺物が出土した。

#### 段状遺構31

段状遺構30の北西斜面に位置する。斜面を削平し、現存幅1.5m、長さ約3mの平坦面を形成している。南半は後世の削平のためか遺存しない。平坦面には壁から20~40cmの距離をおいて小規模な溝が位置する。また、この溝に囲まれるように径約60cm、深さ40cmを測るピットが検出された。遺物は出土しなかった。

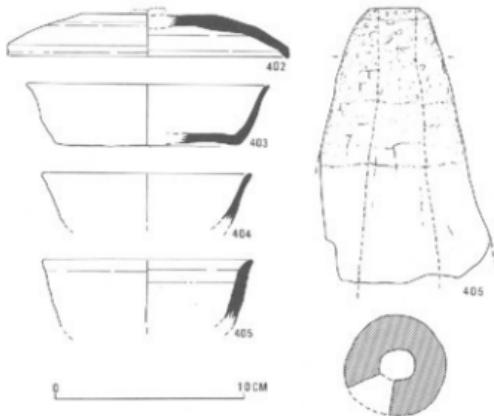


第86図 段状遺構34平面・断面図 (S = 1 : 80)

### 段状遺構34（第86・87図）

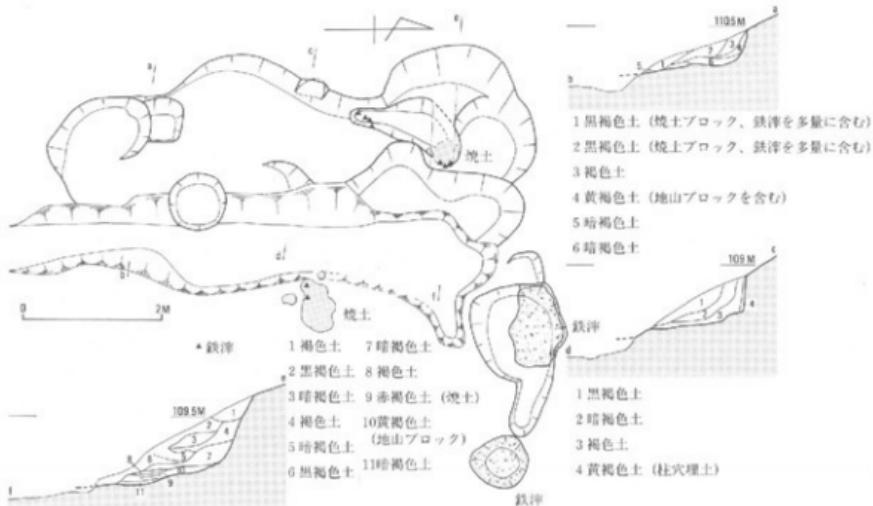
段状遺構25～31が位置した斜面の谷を狭んで反対側の斜面、すなわち東斜面に位置する。いくつかの遺構の重複がある。溝をもつもの、不整形な平坦面をもつもの、土壌状のもの等である。まず、溝は上段、中段、下段の3ヶ所に位置する。中段の溝に平坦面が付設される。平坦面にはP-1～P-3よりなる柱穴列が溝に平行に位置する。

上段と下段の溝には平坦面は形



第87図 段状遺構34出土遺物

成されるものの、柱穴は認められない。上段の溝の山側壁面中央部は火を受けて赤変している。次に、不整形な平坦面をもつものは上段と中段の溝の上位に重複して位置する。中でも中央部の梢円形状のものが特に顕著であり、床面中央部には焼土塊がまとまって検出され、さらに径約20cmを測る大型の鉄滓も出土した。土壌状のものは南端の不整形な平坦面をもつものと、中段の溝の平坦面のP-2とそれぞれ重複して検出された。両者ともほぼ方形で、前者は長辺約

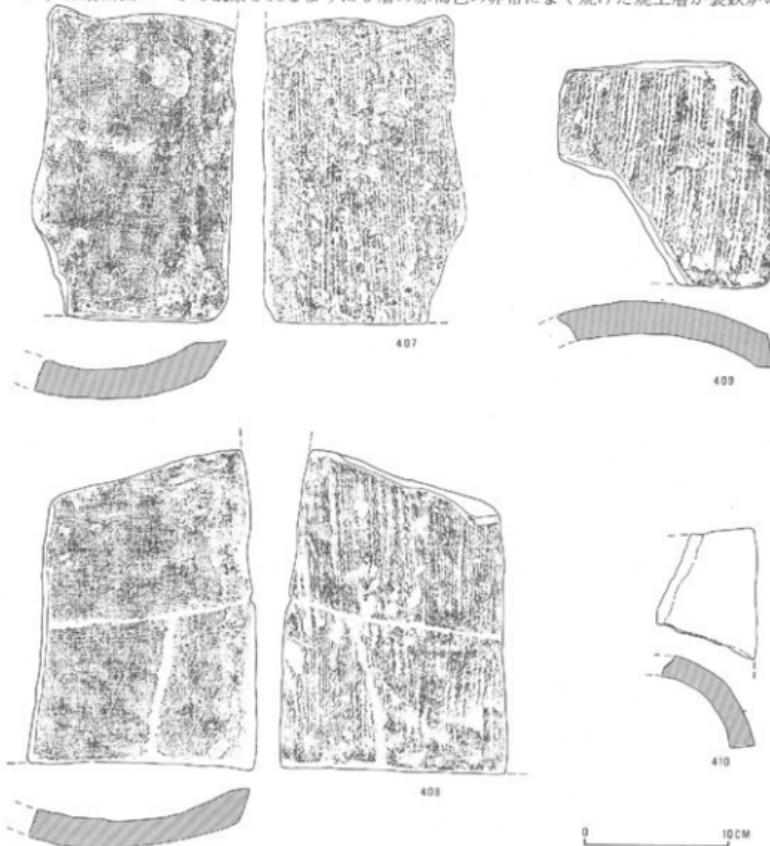


第88図 製鉄遺構平面・断面図 (S = 1:80)

70cm、短辺約50cm、平坦面からの深さ約15cmを測る。後者は長辺約1m、短辺約45cm、深さ約40cmを測る。下段の溝の約1.5m下位には径40cmを測る円形の焼土面が位置する。埋土は1層で個々の新旧関係は把握できなかった。遺物としては上段の溝を中心としてまとめて鉄滓が出土した。さらに、下段の溝を中心としてフイゴ羽口片が数点出土した。接合した結果2点になることが判明した。他に埋土中より若干量の須恵器が出土した。

#### 製鉄遺構（第88図）

段状遺構34の北側の斜面部に位置する。斜面を削平し不整形な平坦面を数回にわたって形成している。東側の斜面下位側は現代の谷水田の溝によって削平され、当時の遺構面は遺存しない。土層断面e-fで観察されるように9層の赤褐色の非常によく焼けた焼上層が製鉄炉の炉

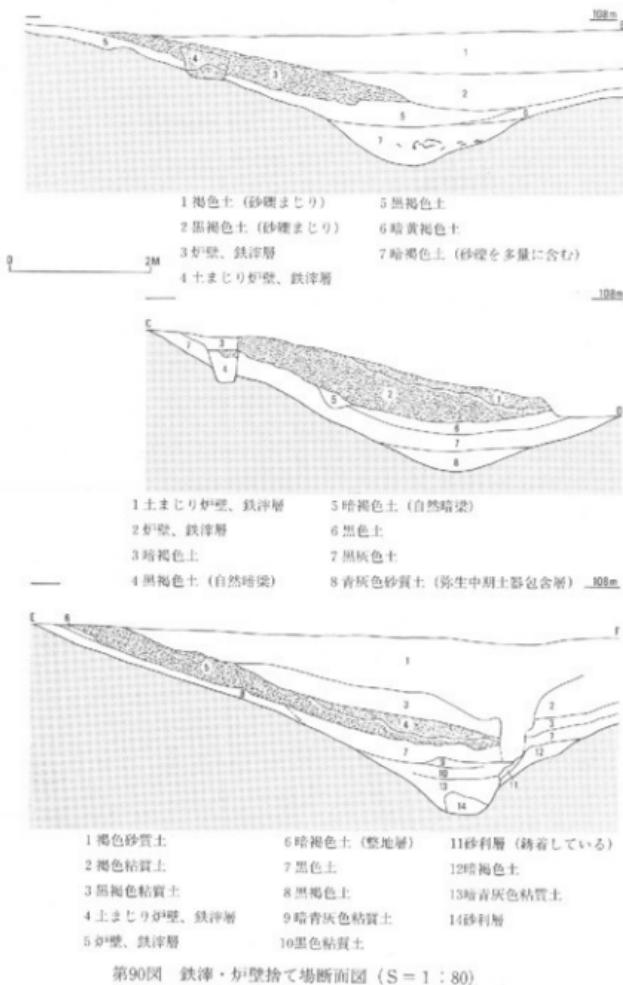


第89図 瓦

底になるものと考えられる。地山を削平し、10・11層を介在させその上に炉を構築している。焼土層の上面には3点の鉄滓が残存していた。焼土層の平面形はほぼ円形で径30cmを測る。他にもう1ヶ所現代の溝に東接して焼土面が検出された。この面にも鉄滓2点がくい込んでおり、炉底と推定された。このように削平を受ける以前は不整形な平坦面の重複が示すように、数ヶ所の炉が存在していたことが推測される。

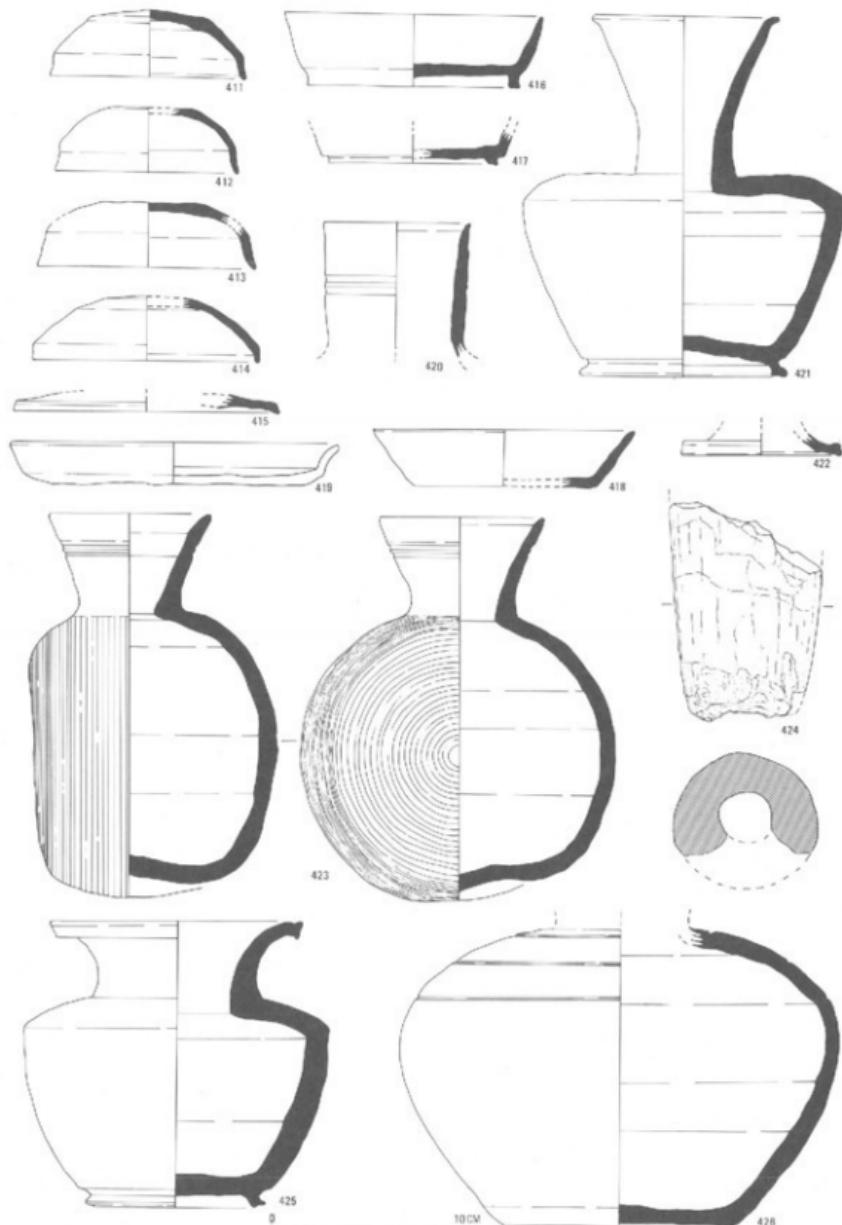
#### 鉄滓・炉壁捨て場（第37・90図）

製鉄遺構の東側斜面下位から谷底にかけて位置する。西端は現代の谷水田により削平を受けているが、以前は製鉄遺構と連続していたものと考えられる。現存分布範囲は南北約14m、東西約6mを測る。堆積の厚さは平均約50cmを測る。堆積状況は基本的に炉壁片・鉄滓の堆積で斜面の下位部で部分的に土まじりの炉壁片・鉄滓層がのっている。炉壁片と鉄滓の比率は圧倒的に炉壁片が多く、鉄滓はわずかである。このことは西側上位の製鉄遺構で操業した後、がいをこ

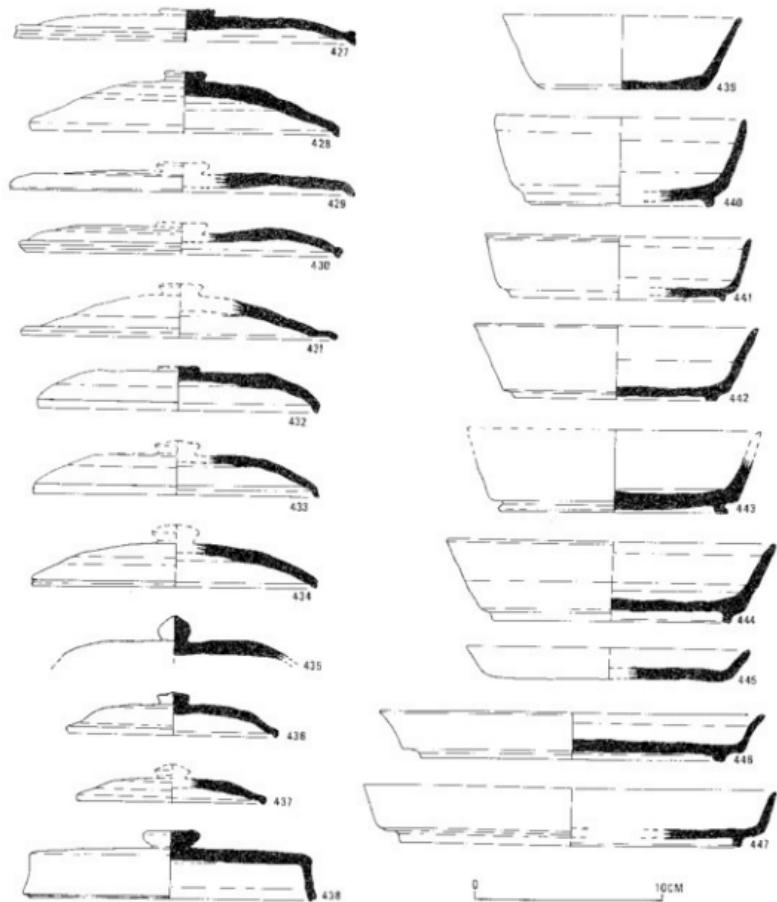


第90図 鉄滓・がい壁捨て場断面図 ( $S = 1:80$ )

測される。遺物としては埋土の上層より多量の鉄滓が焼土塊とともに出土した。



第91図 鉄滓・炉壁包含層出土遺物

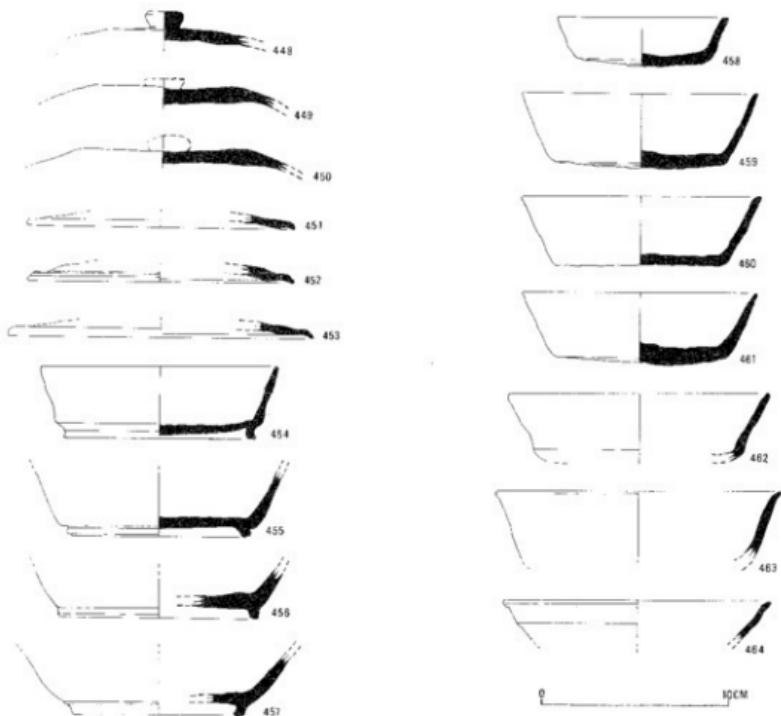


第92図 陶構に伴わない遺物(1)

わして谷部へ廃棄した行為の繰り返しの結果と考えられよう。この包含層を振り下げたところ第91図に図示した遺物が出土した。これらの中には杯だけをみても411のように小型の杯蓋と416のように高台付の杯身もあり、かなりの時間幅があることが指摘できる。

#### 瓦 (第89図)

瓦は製鉄関連遺構に伴って、あるいは遊離の状況でかなりの量出土した。遺物収納用コンテナにして数箱にのばる。これらはいずれも火を受けて、赤化してもらくなっている。その代表的なものを図示した。407は段状遺構19、408は1号墳周溝、409は建物址8、410は段状遺構29から出土した。丸瓦は410と段状遺構29から出土した352の軒丸瓦の2点だけで他はすべて平瓦



第93図 遺構に伴わない遺物(2)

である。平瓦の文様は前述のとおり原則的に表面が布目、裏面が繩叩き文様である。

#### 遺構に伴わない遺物（第92・93図）

製鉄関連遺構群一帯で遺構に伴わない遺物が多量に出土した。図示したものはほんの一部である。基本的に杯蓋・身をあげたが、他に勝間田焼梅の類もかなりある。

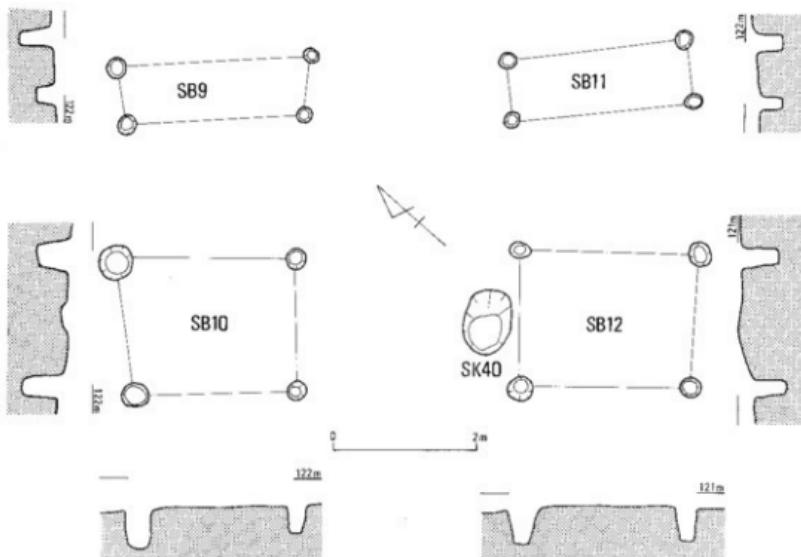
#### (4) 平安末～鎌倉時代

この時期は勝間田焼を伴うものを一括した。遺構数は少なく、弥生時代とか奈良時代のように居住地として本遺跡に関わりをもったという状況ではない。逆に、古墳時代の遺構の在り方と全く同じである。すなわち、居住の主体は認められず刷次的関わり方である。

以下、遺構ごとに記述することにする。

#### 建物址9（第94図）

桁行1間、梁間1間の建物である。桁行P-1～P-2は2.75m、P-3～P-4は2.5mを測る。



第94図 建物址 9~12、土壤40平面・断面図 (S = 1 : 80)

桁間P-2~P-3、P-4~P-1はともに0.9mを測る。柱穴の底面のレベルはP-1、P-2がやや低い。遺物は出土しなかった。

#### 建物址10（第94図）

桁行1間、梁間1間の建物である。桁行P-1~P-2は2.5m、P-3~P-4は2.3m、梁間P-2~P-3、P-4~P-1はともに1.9mを測る。遺物は出土しなかった。

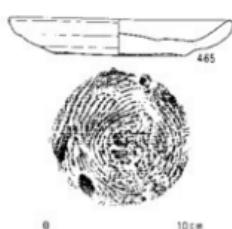
#### 建物址11（第94・95図）

桁行1間、梁間1間の建物である。桁行P-1~P-2は2.5m、P-3~P-4は2.6m、梁間P-2~P-3は0.9m、P-4~P-1は0.85mを測る。各柱穴の底面のレベルはほぼ同一である。建物址9と全く同一規模である。P-3より465の勝間田焼小皿が出土した。

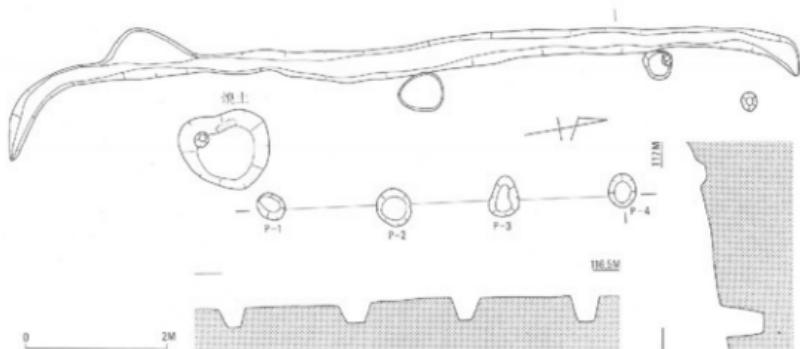
#### 建物址12（第94図）

桁行1間、梁間1間の建物である。桁行P-1~P-2は2.5m、P-3~P-4は2.4m、梁間P-2~P-3、P-4~P-1はともに1.9mを測る。遺物は出土しなかった。建物址10と同一規模である。

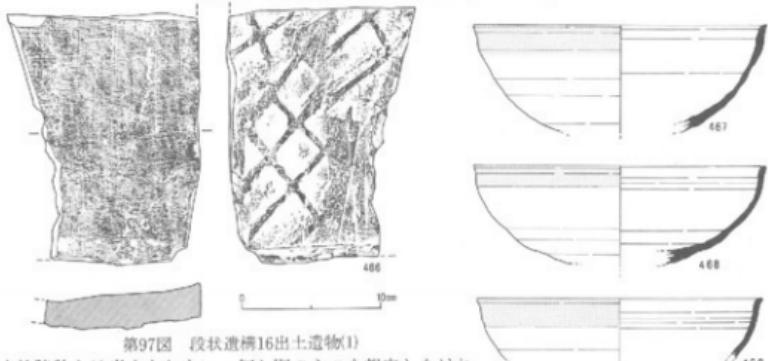
以上、4棟の建物配置をみると相似形2つのグループに分類される。すなわち、建物址9と10のグループに対し、建物址11と12がそれぞれ対応することである。規模からみて、通常の掘



第95図 建物址11出土遺物



第96図 段状遺構16平面・断面図 ( $S = 1 : 80$ )



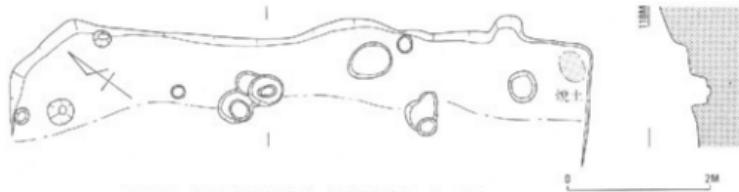
第97図 段状遺構16出土遺物(1)

立柱建物とは考えられない。何か別のものを想定しなければならないだろう。

#### 段状遺構16 (第96~98図)

調査区中央の頂部から南に派生した尾根の東斜面に位置する。丘陵斜面を削平し、幅約2.5m、長さ約11mを測る平坦面を形成している。壁際には幅20~40cmを測る浅い溝がめぐる。平坦面にはP-1~P-4の柱穴列が位置する。遺物はいずれも床面より出土した。466は平瓦である。表面は布目、裏面は荒い格子目である。青灰色を呈す須恵質である。勝間田焼の窯で焼

第98図 段状遺構16出土遺物(2)



第99図 段状遺構24平面・断面図 ( $S = 1 : 80$ )

かれたものと推察される。467~469は勝間田焼椀である。

いずれも口縁部外面に重ね焼きの痕跡がみられる。

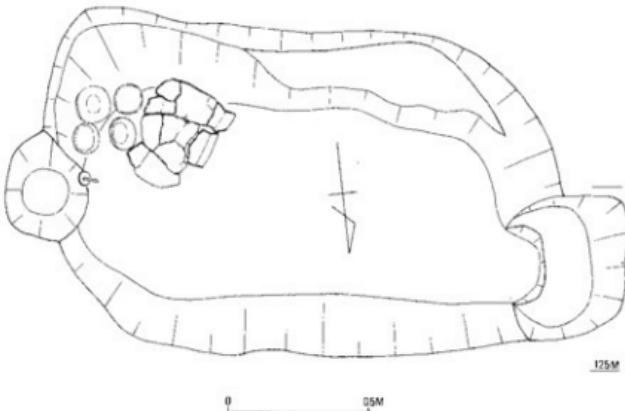
#### 段状遺構24(第99・100図)

調査区中央の頂部から南に派生した尾根の西斜面に位置する。ちょうど段状遺構16の反対側にあたる。斜面を削平し、幅約1m、長さ約8mを測る平坦面を形成している。平

坦面には  
浅いピッ  
トがいく  
つか検出  
されたが  
組み合せ  
になるも  
のではな  
い。南側  
のコーナ  
一部にお  
いて、長  
径約50cm、  
短径約30  
cmを測る  
梢円形の



第100図 段状遺構24出土遺物



第101図 土壙墓1 平面・断面図 (S=1:20)

焼土面が検出された。遺物は埋土中より若干量が出せた。470・471とも勝間田焼である。

#### 土壙墓1(第101・102図)

調査区の中央頂部に位置する。遺構検出面で長辺1.8m、短辺1.2m、床面で長辺1.5m、短辺70cm、中央部での深さ25cmを測る。南壁側は2段に掘り込まれている。東壁は柱穴と重複しているが、柱穴の方が古い。西壁側には浅い土壙状の張り出しが認められたが、埋土は同一であることから同一遺構に含めた。床面南東部において一括して遺物が出せた。472は勝間田焼椀である。473・474は七師質の小皿である。475は高台付の皿である。477は変形土器である。外側はススの付着が著しい。476は鉄製の紡錘車である。円盤の一部、鉄芯の先端部を欠く。

#### 土壙40(第103・104図)

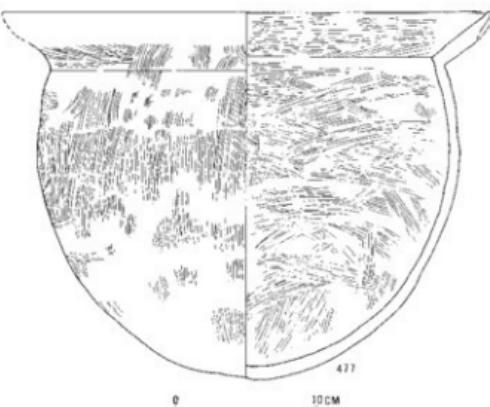
調査区中央の頂部から南東に張り出した尾根の頂部に建物址12と接して位置する。長径90cm、短径60cm、中央部での深さ10cmを測る楕円形の小規模なものである。床面から短刀と勝間田焼椀の破片が出土した。478の短刀は把部を欠くが、現存長25cm、刀身部長23cm、最大幅3cmを測る。一部に鞘と考えられる木質の銷着が認められる。478は勝間田焼椀である。

#### (5) 近世

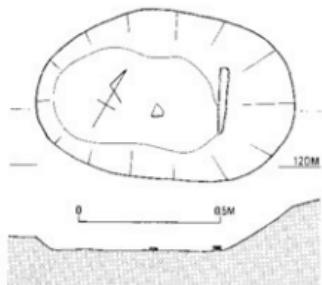
近世に属するものは谷部に形成された石列遺構だけである。この遺構より下層には2時期にわたって遺構が存在している。すなわち、下位には奈良時代を中心とした時期の炉壁・鉄滓捨て場が、さらに下位には弥生時代の溝が位置している。石列遺構と炉壁・鉄滓捨て場は垂直距離にして深い所で1.2mを測り、さらに下層の弥生時代の溝とは、炉壁・鉄滓捨て場の底面と溝の底面で深い所で約1mを測る。

#### 石列遺構（第105・106図）

石列は大きく3ブロックに分けることができる。北西部の少し離れた小規模なもの、西側の南北に連なるもの、北から東にかけて直角に曲がる規模の大きいものの3ブロックである。北西部の小規模なものは長さ1.5mを測る。中央部の石の下より、勝間田焼・鉄滓が1点ずつ出土した。西側



第102図 土壌基1出土遺物



第103図 土壌40平面・断面図 (S = 1 : 20)

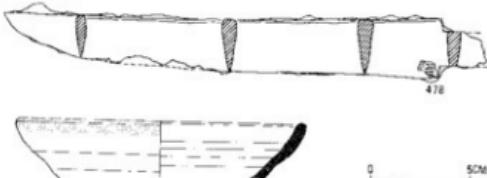
の南北に連なるものは南半から少し西にふっている。幅20~50cmの溝を掘削し、その中に石を配している。中には近世の瓦と鉄滓各1点が混入していた。現存長約10mを測る。東側の直角

に曲がるもののは北辺約9m、東辺約10.5mを測る。石は北辺に特に頗著にみられるように中心部に比較的大きめの石を並べて、その両側に挙大の石を配した部分と、東辺のようにすべて挙大の石で構成される箇所がある。この石列の中には勝間田焼、鉄滓、瓦の他に、陶棺片、石臼、線刻縞など特殊なものが用いられている。石列の面は同一面であるが、傾斜に沿って北から南へ緩やかに下っている。480は石臼である。481は線刻縞2としたものである。最大幅17cm、最大長19cmを測る平面に文様を施している。文様は片面だけであるが3cm方眼の区画を刻んだ後、対角線を施した構成となっている。482は線刻縞1としたものである。最大長60cm、最大幅40cmを測る平面に481同様4cm方眼を刻みさらに、対角線を刻印している。482は砾石にも使用されたらしく、磨滅しつるつるになっている箇所がある。

#### (6) その他

その他としたものは陥し穴と考えられている土壙を一括した。陥し穴とされるものは原則として底面に柱穴と考えられるピットを有しているが、ピットをもたないものも時期不明のためその他に属させた。陥し穴は総計37基になる。分布は調査区のほぼ全域にわたるが、いくつかの集中地点が認められる。調査区南東部の頂部一帯に15基、調査区南側の製鉄関連遺構群の…帶に14基、調査区西側の丘陵北斜面に4基が分布し、残りは点在するという状況である。遺物は土壙37より石鏡1点が出土しただけである。平面形態は円形、橢円形、方形とバラエティーに富む。

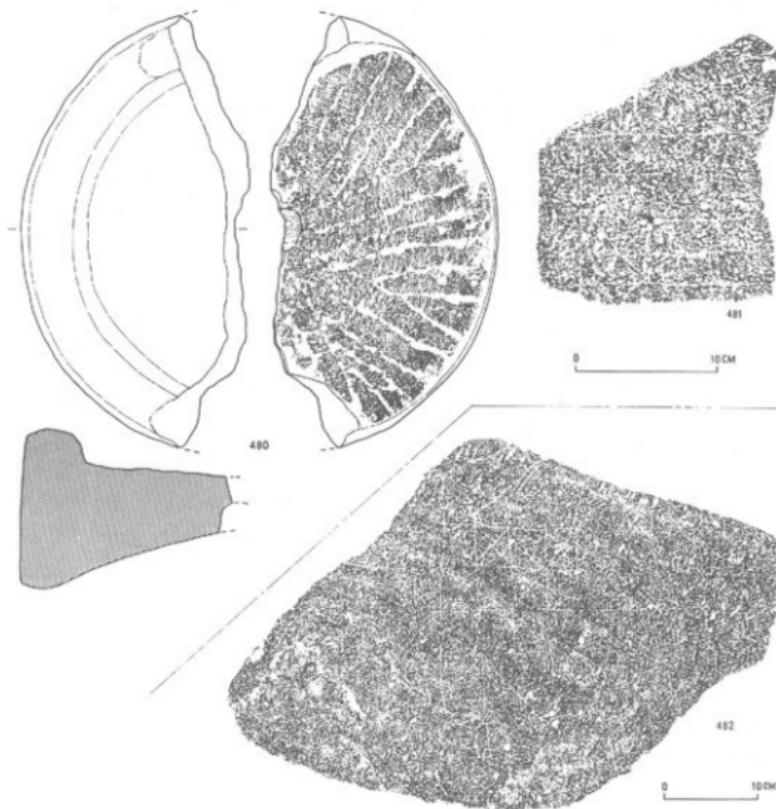
次に、紙数の関係で図示することのできなかった遺構について簡単にふれておくことにする。段状遺構33は調査区西端の丘陵南斜面に位置する。溝状にややくぼんだ平坦面をもつもので遺物は出土しなかった。土壙16は段状遺構28の北側に位置する橢円形を尾す浅いものである。土壙49は住居址6の北側上位に位置する。橢円形の浅いもので底面に炭化物が検出された。溝1は土壙49の北東側、溝2は住居址6を切って、溝3・4は住居址6の南側に平行して位置する。溝6は調査区南東部の頂部から西方向に斜面下位に続くものである。埋土はいずれもボソボソで新しい時期のものと考えられる。



第104図 土壙40出土遺物



第105図 石列遺構平面図 ( $S = 1 : 80$ )



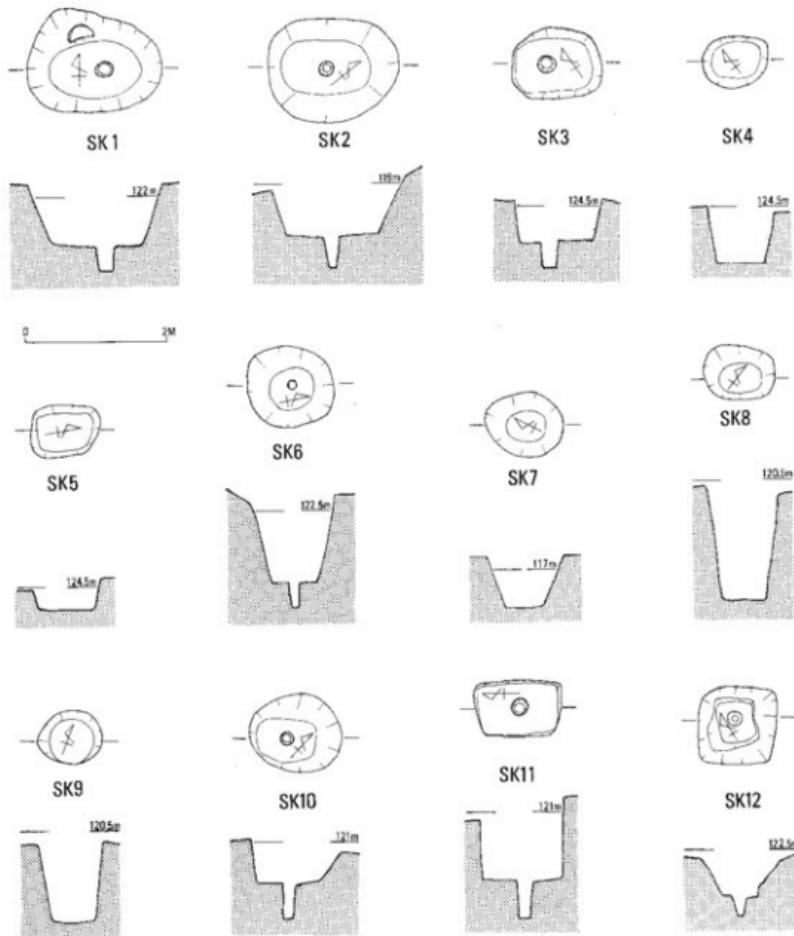
第106図 石列遺構出土遺物

#### 4 まとめ

以上、各時代ごとに概略を述べてきたが、次に具体的にいくつかの項目を取り上げて検討しまとめとしたい。

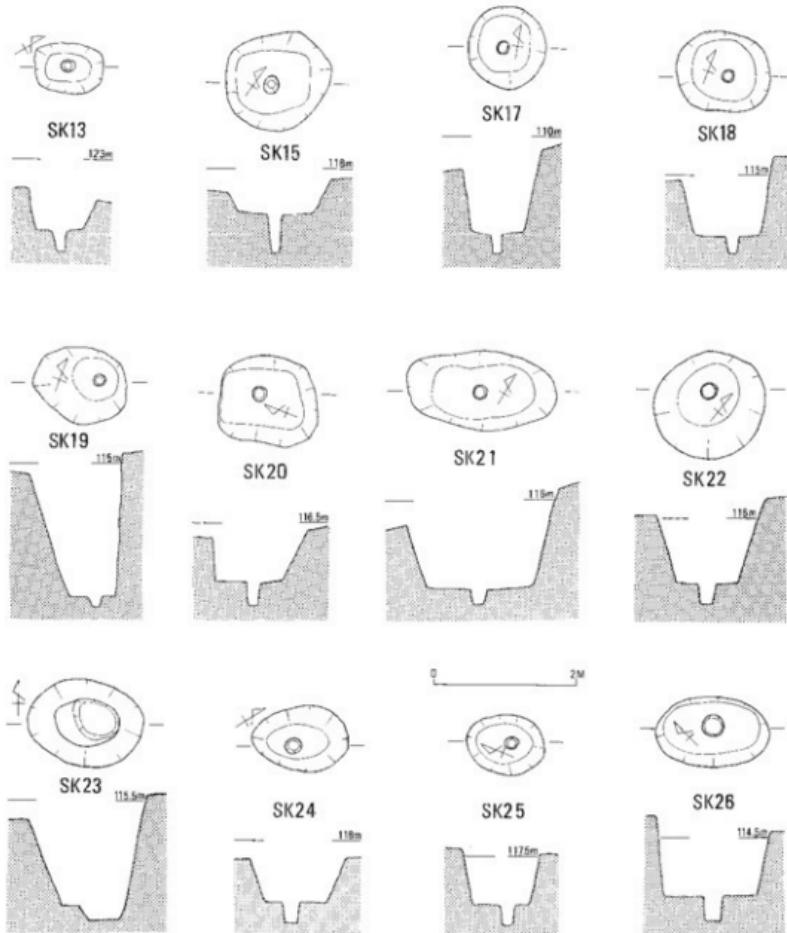
##### (1) 弥生時代の集落と時期について

弥生時代の住居は計5軒検出された。これらはいずれも他の住居と切り合うことなく単独で位置している。立地はすべて調査区の北半に限定される。住居は丘陵の頂部に設定されることなく、すべて丘陵の頂部から斜面に移行する変換点に構築されていることが指摘されよう。そして、頂部には高床式倉庫と考えられる建物が配置されている。このことは、谷を挟んです



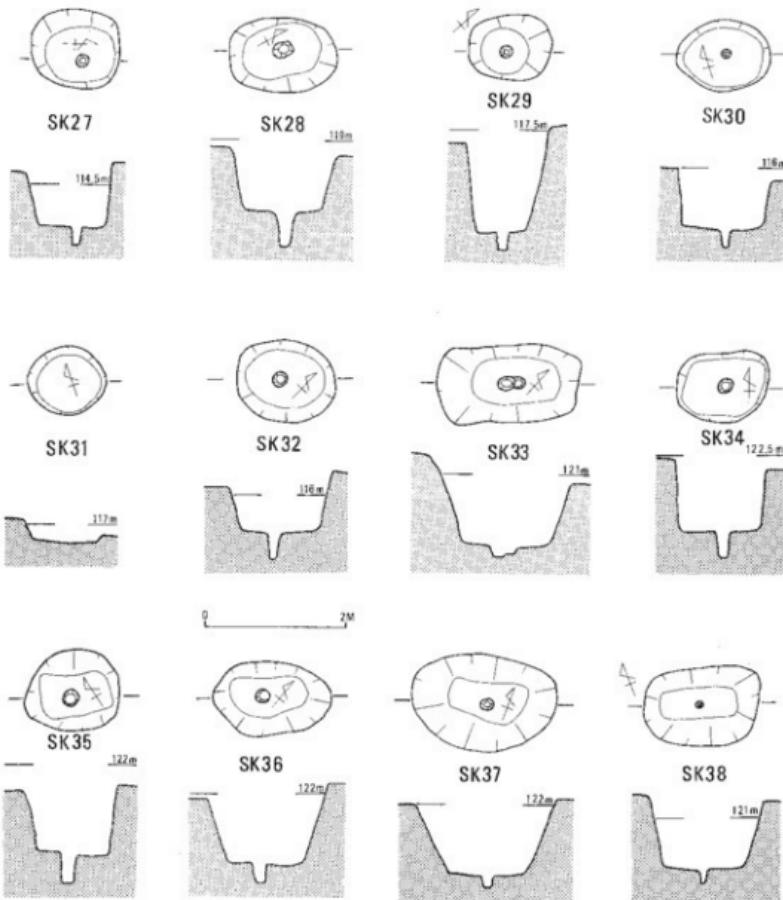
第107図 上層1～12平面・断面図 (S = 1 : 80)

ぐ北側に立地する西吉田遺跡(註1)にも共通するものである。西吉田遺跡は東から西に延びた尾根上に位置し、住居は北斜面と南斜面に構築され、尾根の中央部は空白地帯となっているのである。次に、各住居の同時併存の問題であるが、住居址1～4までは1ないし2回の拡張なり建て替えを行っている。唯一これが認められないのは住居址5の1軒だけである。住居の耐用年数による拡張なり建て替えを想定すると、住居址5だけは他の4軒よりも遅れて構築されたことになろう。換言すると、住居址1～4の4軒の住居が最初に集落を構成し、耐用年数に



第108図 上塙13・15・17~26平面・断面図 (S = 1 : 80)

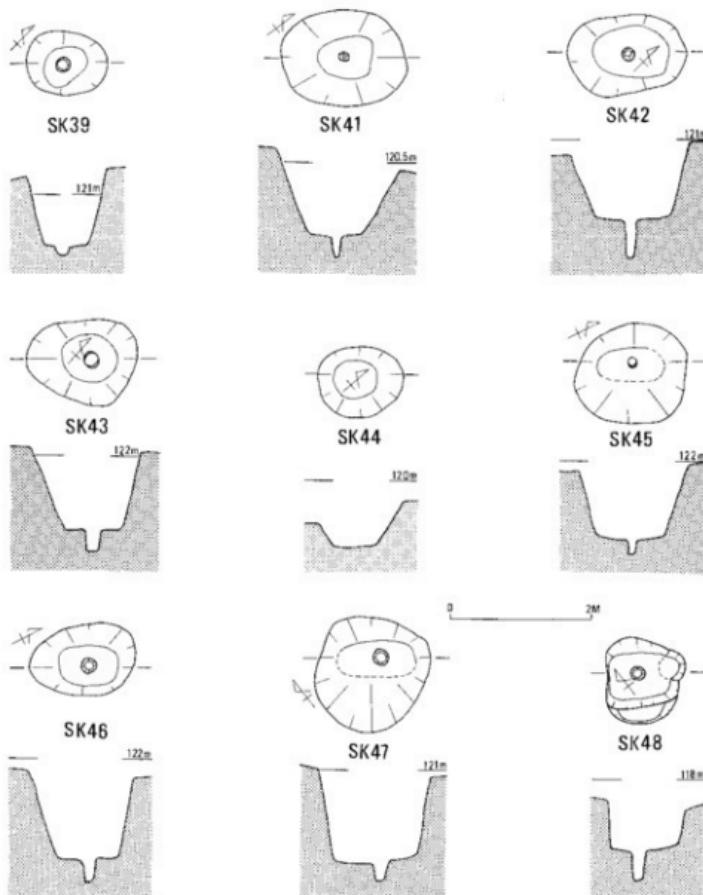
よる建て替えの時期に新たに住居址5が構築されたという考え方である。次に、住居の大小の問題がある。西吉田遺跡の報告書でも指摘しておいたが、大きい住居と小さい住居があるということである。大きい住居というのは住居址4の6本柱以上の住居、小さい住居というのは住居址1~3、5の4本柱の住居である。大きい住居1軒に対して、小さい住居が数軒で集落が構成されているという指摘である。本遺跡でも全く同様の在り方をしていることは興味深い。住居の他に、段状遺構というあまり適切な遺構名とは思われないが、斜面を削平し、平坦面を形成



第109図 土壌27~38平面・断面図 (S = 1 : 80)

成した長細い遺構がある。これは基本的に等高線走向に沿って位置し、住居の立地する標高よりも下位に位置する。丘陵の遺跡を調査すると必ずと言っていいほどくわすものであるが、遺構の性格は今だ不明と言わざるを得ない。

さて、これら弥生時代の集落の時期であるが、1時期に限定されそうである。すなわち、同一土器型式内の範ちゅうに納まるということである。最も良好な資料としては住居址5出土土器、溝出土土器がある。両者は全く同一型式のものである。これらの土器を基準にして、各遺構出土の土器を検討してみるとよく理解できるのである。そして、その時期は弥生時代の中期



第110図 土塚39・41~48平面・断面図 ( $S = 1 : 80$ )

を前・中・後葉の3段階に区分した際の後葉に相当し、さらに後葉を古と新の2時期に区分した際の新に所属させることができるであろう。弥生時代中期後葉新段階はさらに古い様相をもつもの、新しい様相をもつものの2者に区分される。前者は京免遺跡の土器窪り(註2)、ビシヤコ谷遺跡第5号長方形住居状遺構(註3)の土器が、後者は押入西遺跡(註4)の土器が指標となる。本遺跡はまさに前者に併行する時期のものである。

## (2) 古墳の築造時期について

1号墳は横穴式石室に陶棺をもつものである。早い時期に盜掘にあっており、良好な遺物の

出土状態ではないが、本古墳の時期を示すと考えられる遺物が若干量出土している。第48図の229の杯蓋は口径が小さい特徴をもつ。これは田辺編年のTK209（註5）、中村編年のII型式6段階（註6）に相当し、年代は6世紀末～7世紀初頭頃と考えられよう。2号墳と3号墳は方墳と推定される。2号墳は周溝床面、3号墳は主体部から遺物が出土している。しかし、いずれも須恵器は、1点しか出土していないため、編年の対比は難しい。一応、5世紀末頃の年代を与えておきたい。東接する一貫東遺跡（註7）にも8基の古墳が位置している。この内、7基が調査されている。やはり5世紀後半頃に所属するものであり、本遺跡の2号墳、3号墳との関連も十分考えられるものである。

### （3）製鉄関連遺構について

製鉄に関連すると考えられる遺構群は整然とまとまっている。東側の居住区と考えられる高台には住居と建物群を配置し、西側の作業場では製鉄遺構、炉壁・鉄滓捨て場が位置する。中央の斜面部には段状遺構が設定されるという具合である。まず、採業時期から検討してみよう。最も良好な資料は炉壁・鉄滓捨て場に含まれている遺物である。捨て場の平均の堆積層は約50cmあり、かなり長い間にわたって採業が繰り返されたことがうかがえる。この堆積層を除去した際若干量の遺物が出土している。第91図に図示したものがそれである。この中で最も古いと考えられるものは411の杯蓋である。これは田辺編年のTK209、中村編年のII型式6段階に相当するものと考えられ、年代は6世紀末～7世紀初頭の時期、と推定されよう。また、新しい時期のものとしては416などの高台付の杯があげられる。これらは奈良時代の特徴をよく備えており、8世紀代という年代観が得られよう。従って、採業時期は約1世紀にわたることが推定される。しかしTK209の時期に相当する遺構は段状遺構17、段状遺構18しかなく、この時期に採業を開始したというより、この地に占地し準備に入った段階と解釈するほうが適切であろう。そして本格的な採業は8世紀代を中心とした時期だったと考えられるのである。

次に、建物配置について考えてみよう。建物址4と建物址5、建物址7と建物址8はともに重複しており同時併存はあり得ない。2時期にわたる建て替えを想定するのが妥当であろう。まず建物の規模と位置関係から2棟ずつ3グループ分けができる。建物址3と建物址4、建物址5と建物址6、建物址7と建物址8がそれである。これらを遺構の切り合いと配置関係から考えると、建物址3と建物址5と建物址7が新しい時期、建物址4と建物址6と建物址8が古い時期に属し、新旧2時期に区分される。段状遺構25、段状遺構26も規模が全く同じであることから、建物群同様2時期に区分されよう。しかし、その新旧関係は不明である。さて、これらの遺構の性格であるが、全く不明と言わざるを得ない。特に、建物址7、建物址8の竪穴をもつ2間×2間の總柱建物は類例もなく不明である。掘立柱建物と住居址の関係も難しい問題である。かなりの規模をもっているのに対し、住居址が1軒だけというのは少ないようと思われる。掘立柱建物が居住に用いられていた可能性も十分考えられるのである。段状遺

橋からフイゴの羽口が出土しているものもあり、作業場を想定することもできよう。しかしながら、現段階における古代鉄生産に關係した集落、すなわち近世タタラで言うところの「山内」についてはほとんど明らかになっていないのが現状である。各種遺構と鉄生産の工程の機能分担が有機的に結びつかないと具体的に遺構の性格は明らかにならないだろう。従って、ここでは漠然とではあるが、古代鉄生産の集落が浮かび上がってきたという程度でまとめとしておきたい。

遺物で注目されるのは瓦である。前述のとおり遺物収納用コンテナに約5箱分の瓦が出土した。この内、軒瓦は1点だけである。それも破片である。他はすべて平瓦である。軒瓦が少ないこと、量的に少ないとから瓦葺きの建物を想定することはできない。そして、瓦は全て火を受けて赤化してもろくなっている。鉄生産に何か關係あるものか否か興味引かれるものである。

最後に製鉄炉についてふれてみよう。残念ながら後世の削平により明確な炉跡は確認できなかった。しかし、製鉄遺構としたものに2ヶ所の焼土面がわずかに検出された。これらの焼土面が炉床に相当するものと考えられる。最近の調査例で浅い下部構造と考えられる掘り込みが伴うことが確認されているが(註8)、本遺跡では確認できなかった。他に段状遺構34としたのも鐵滓、フイゴの羽口が出土していること、焼土、焼土面を有すことから炉を想定することもできよう。

以上、紙数の関係で詳述することはできなかったが、概要のまとめとする。先学諸氏の御叱正をお願いする次第である。

(註1) 行田裕美『西古田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集 津山市教育委員会

1985年

(註2) 中山俊紀『京免・竹ノ下遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集 津山市教育委員会 1982年

(註3) 行田裕美『ビシャコ谷遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集 津山市教育委員会 1984年

(註4) 河本 清、橋本惣司、下沢公明、井上 弘、柳瀬昭彦『押入西遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3 岡山県教育委員会 1973年

(註5) 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年

(註6) 中村 浩『和泉陶邑窯の研究』 柏書房 1981年

(註7) 津山市教育委員会が発掘調査を実施。報告書未刊。

(註8) 村上幸雄『岡山県水鳥機械金属工業団地協同組合第二団地内遺跡群』 日本考古学年報40(1987年度版) 1989年



# 図 版

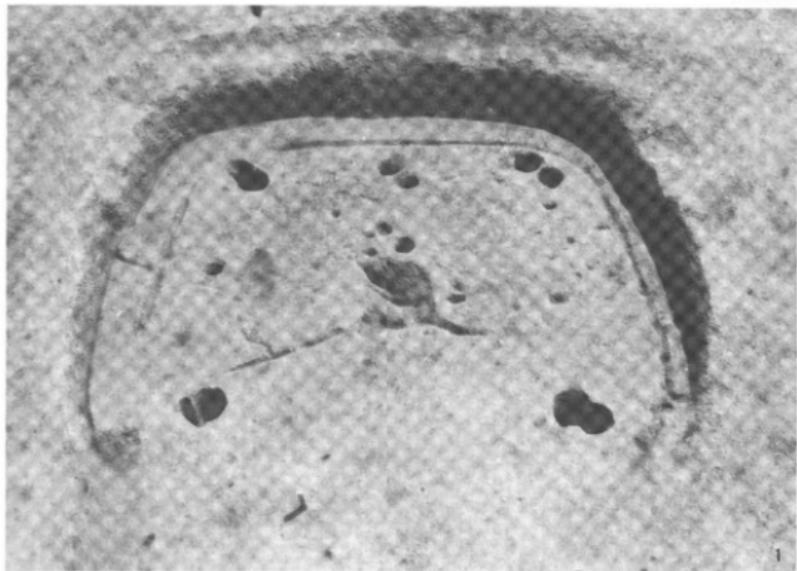




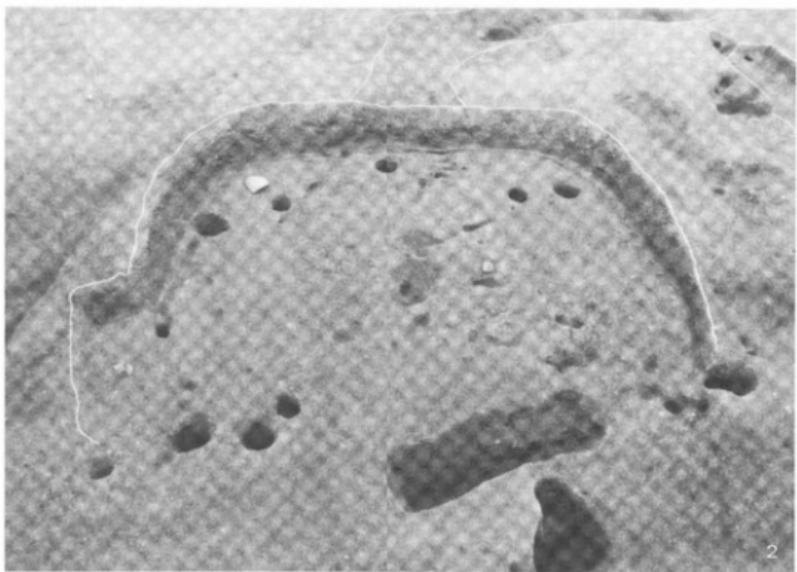
遺跡遠景（北から）



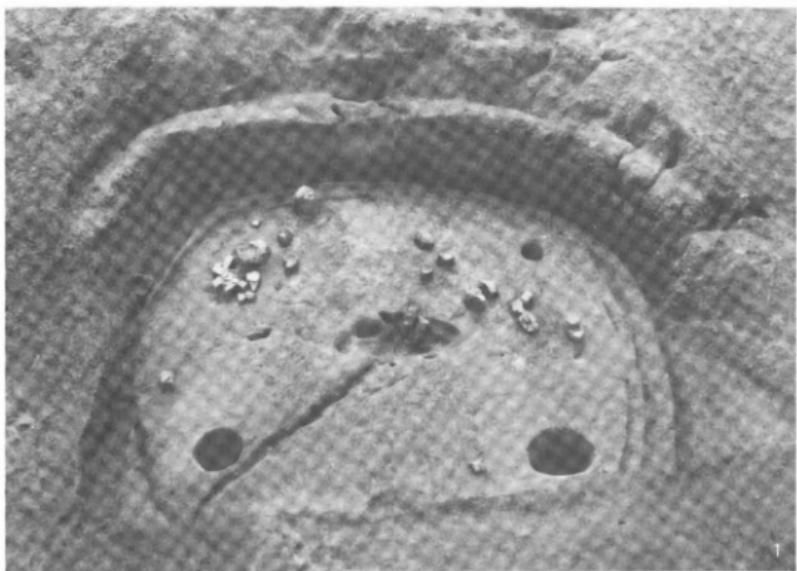
トレンチ設定状況（東から）



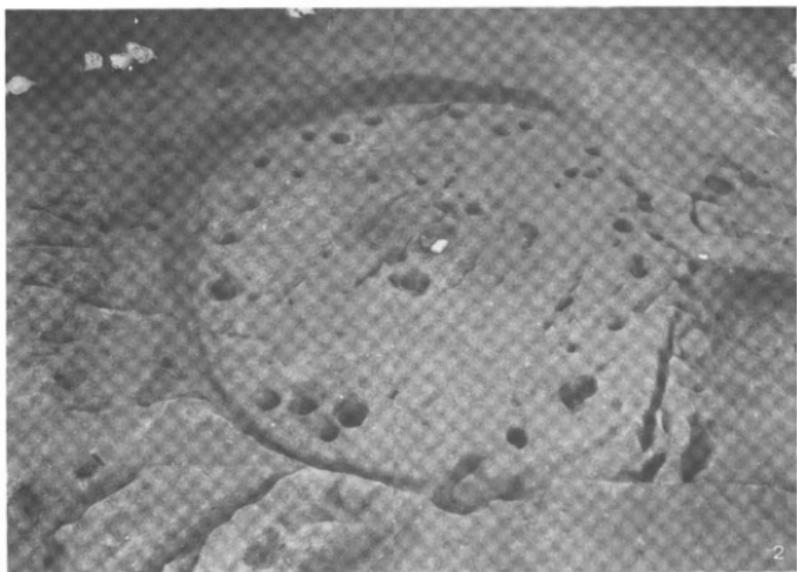
住居址 1



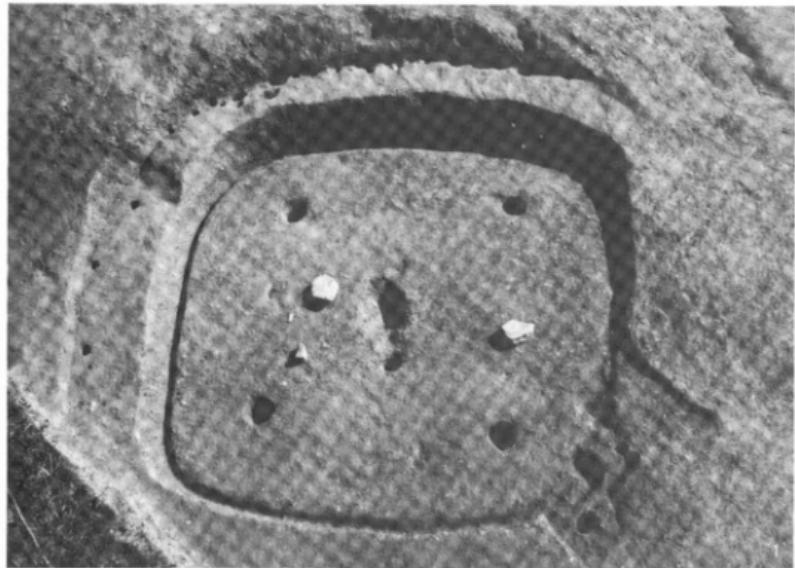
住居址 2



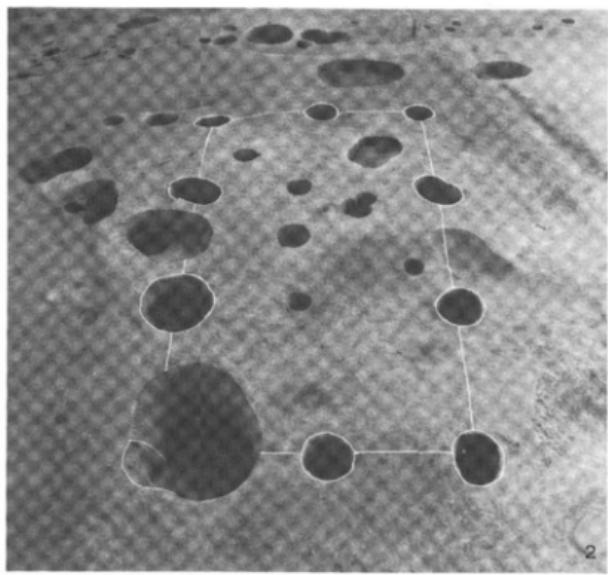
住居址 3



住居址 4

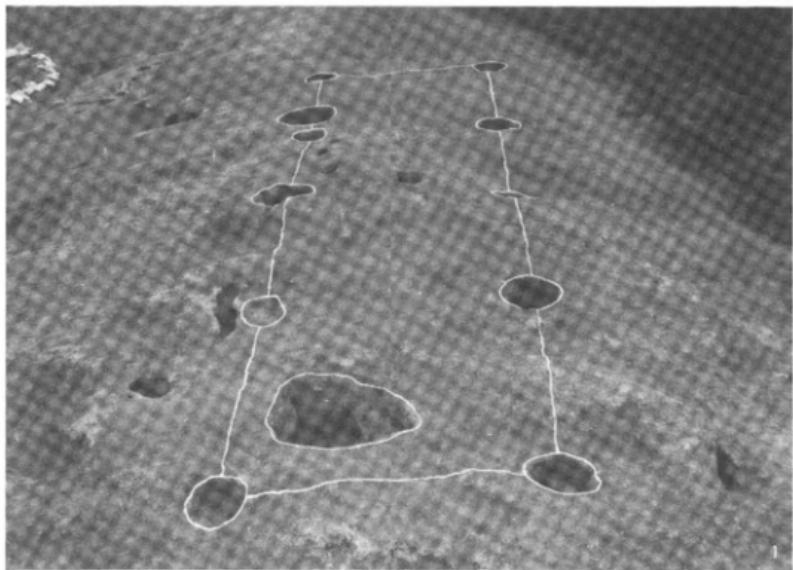


住居址 5



建物址 1

図版 5



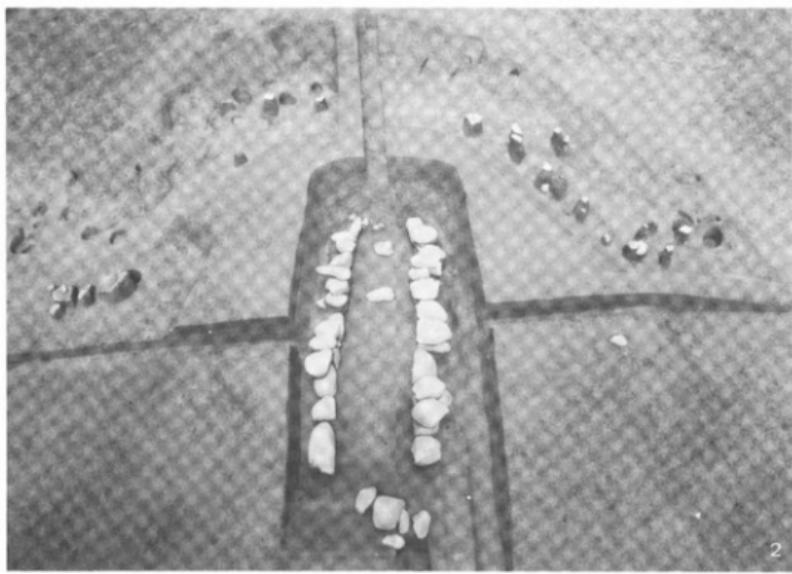
建 物 址 2



段 状 遺 構 15



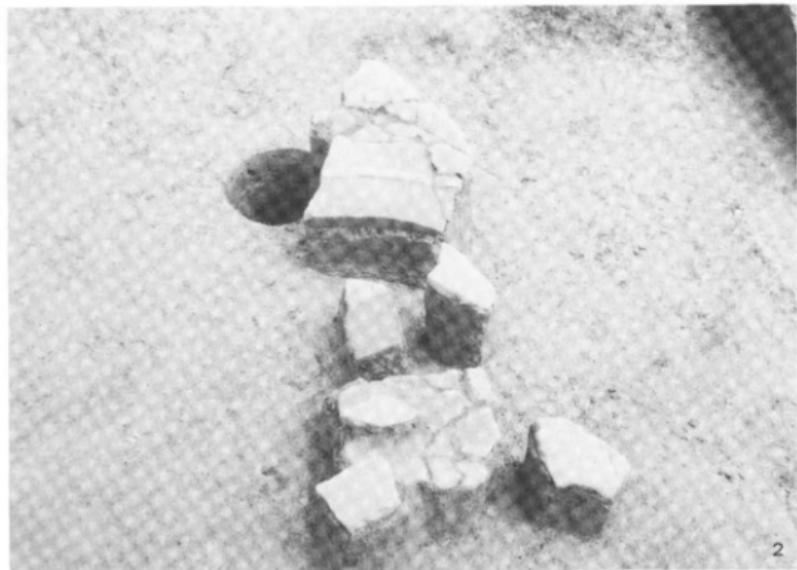
溝遺物出土状態



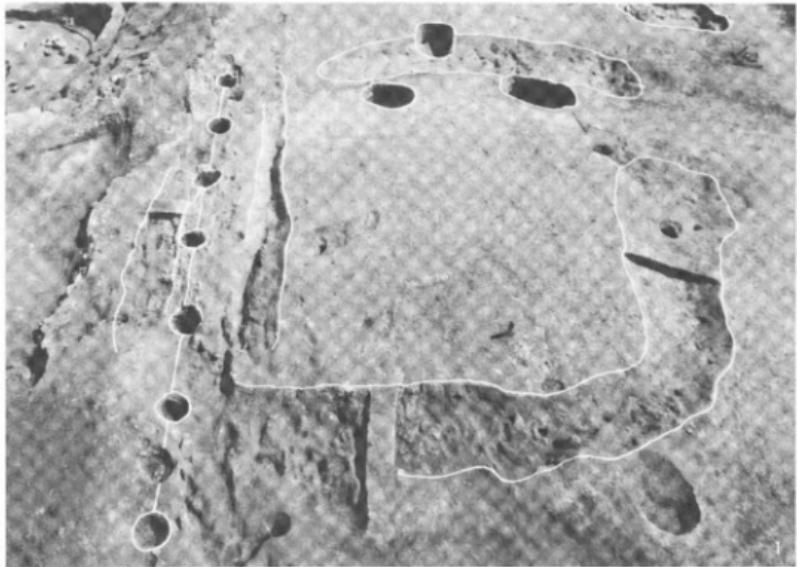
1号墳



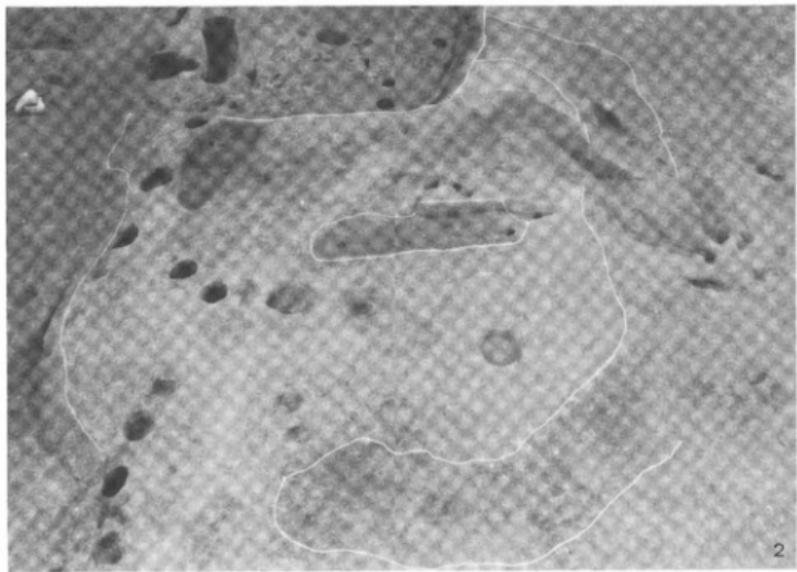
1号墳周溝遺物出土状態



1号墳周溝陶棺出土状態



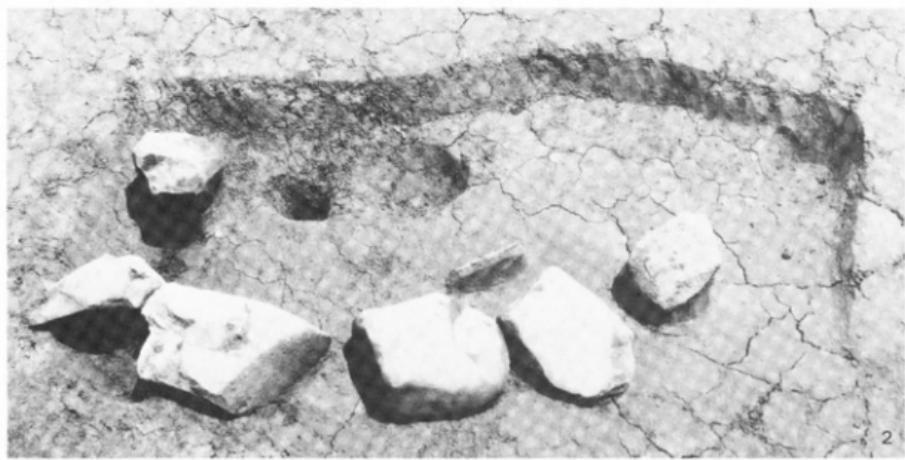
2号墳 段状遺構 11



3号墳



3号墳主体部

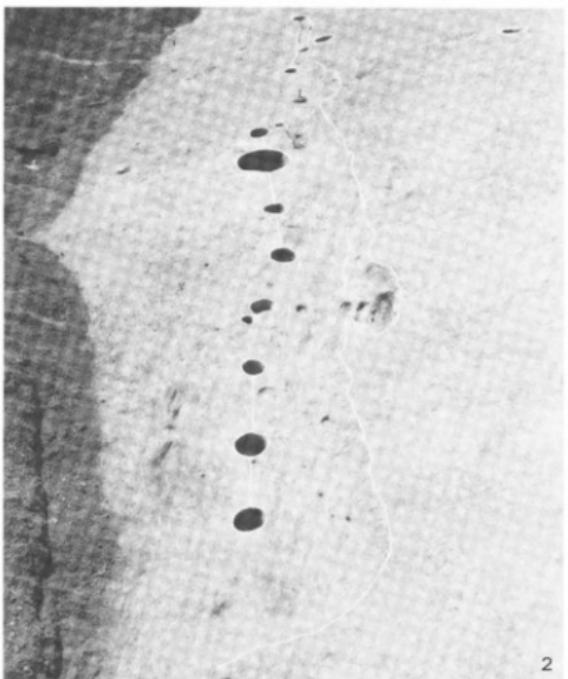


土 墓 2

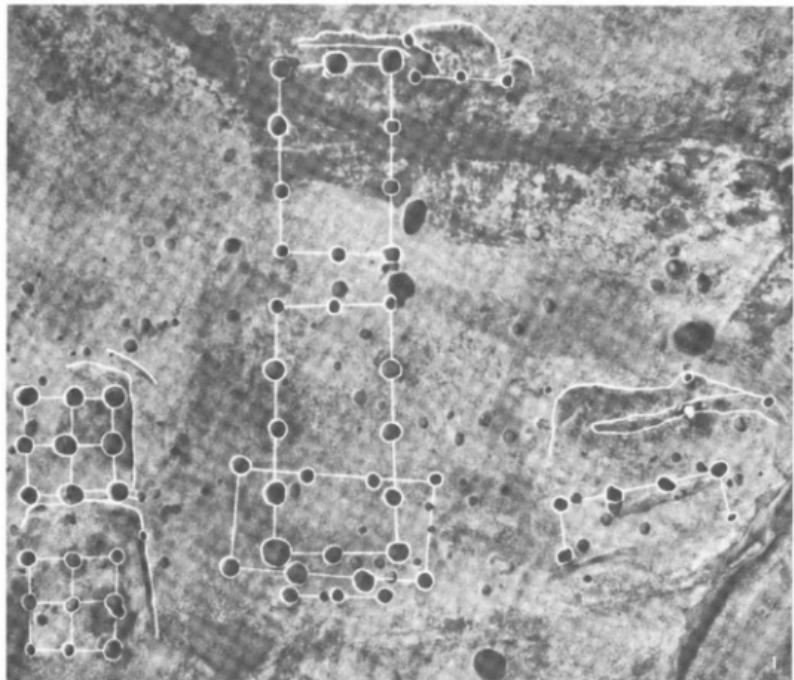
図版10



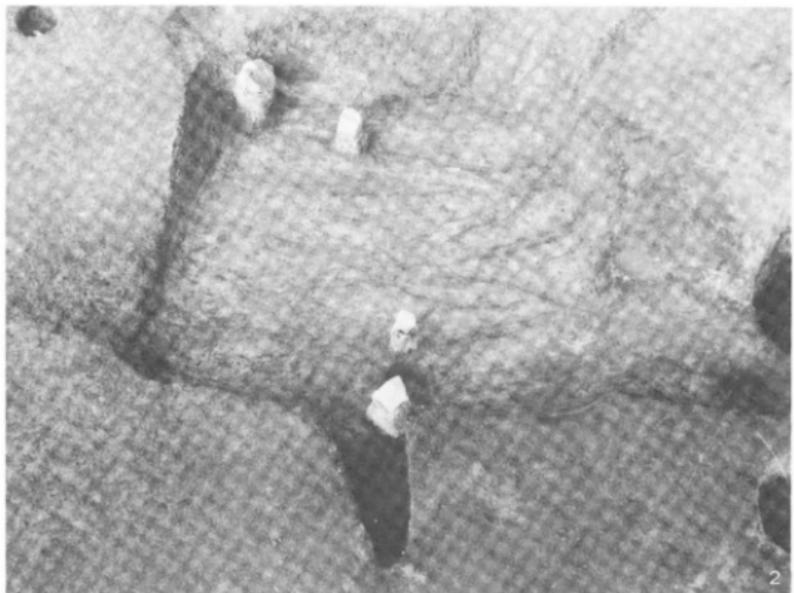
段状造構 17



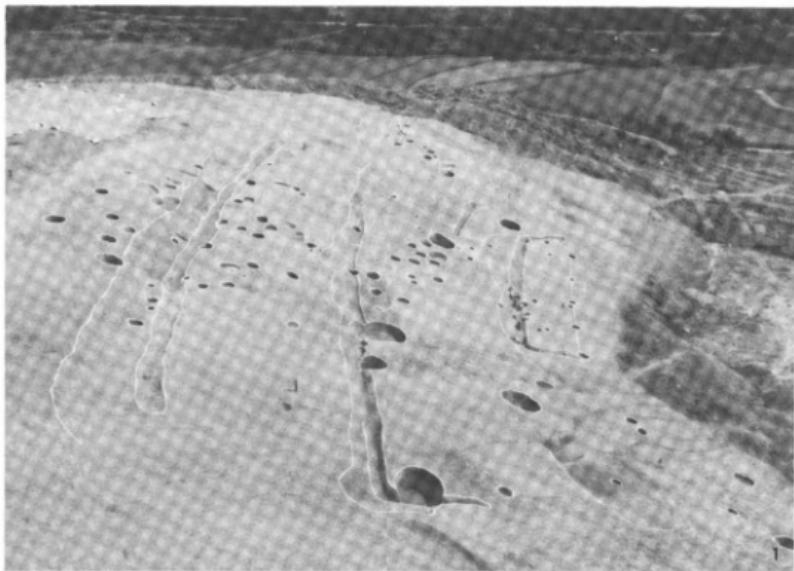
段状造構 18



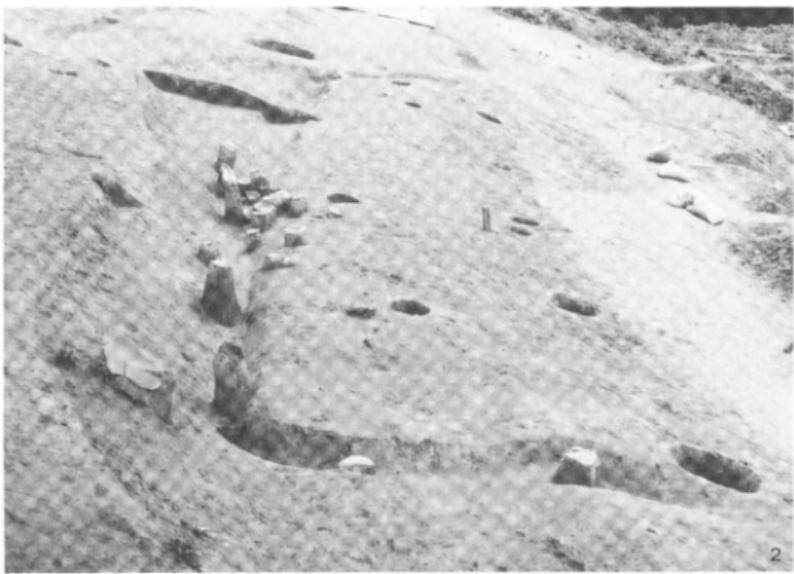
建物址 3~8



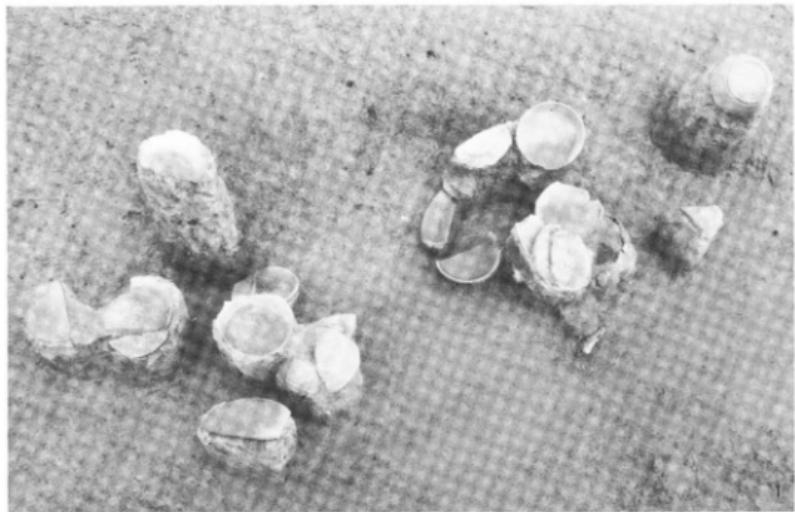
住居址 6



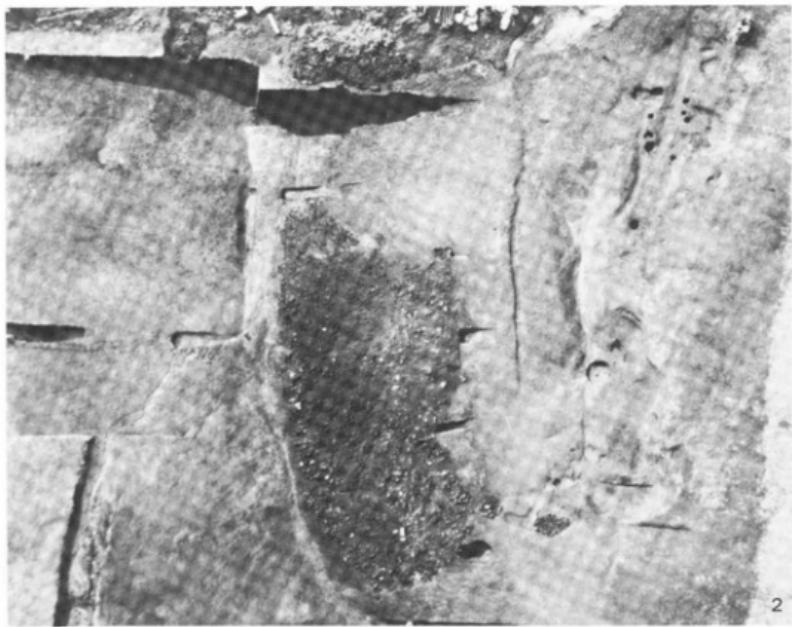
段状遺構 20~30



段状遺構 29



段状造構 29 遺物出土状態



2  
製鐵造構、段状造構 34、炉壁・鐵滓捨て場



段状造構 34



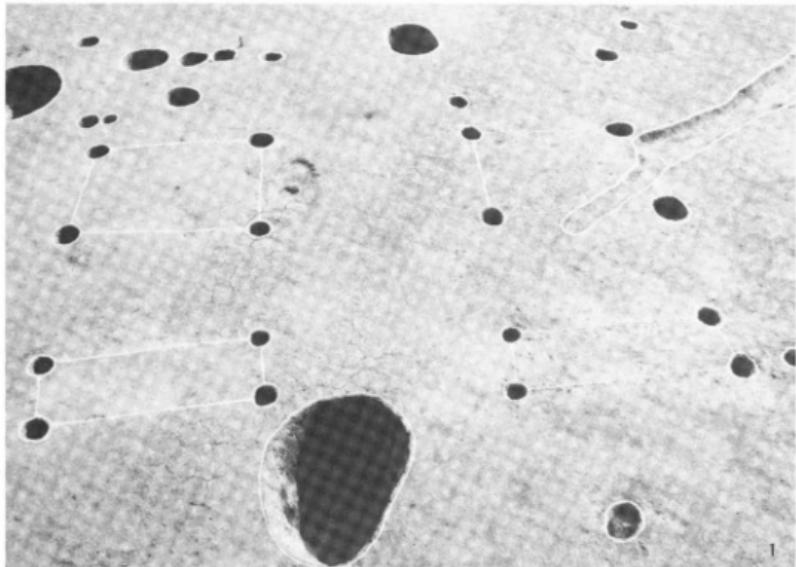
製鐵造構



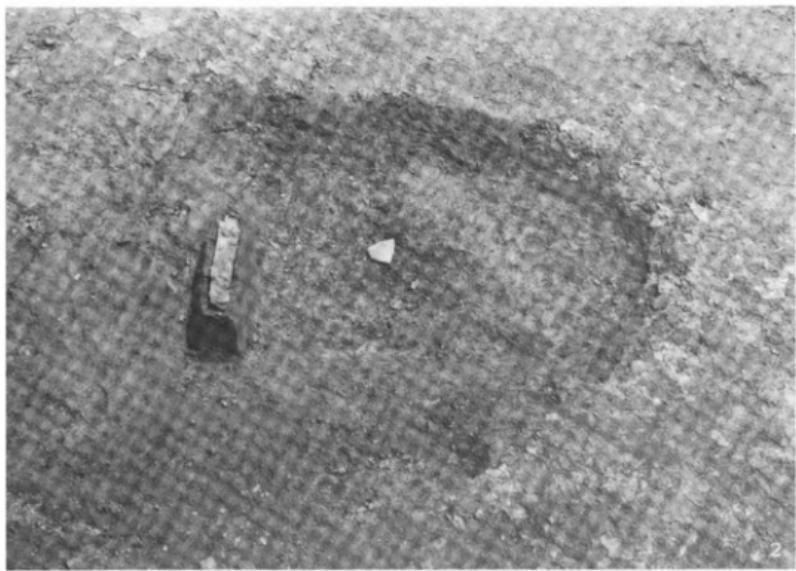
炉壁・鉄滓出土状態



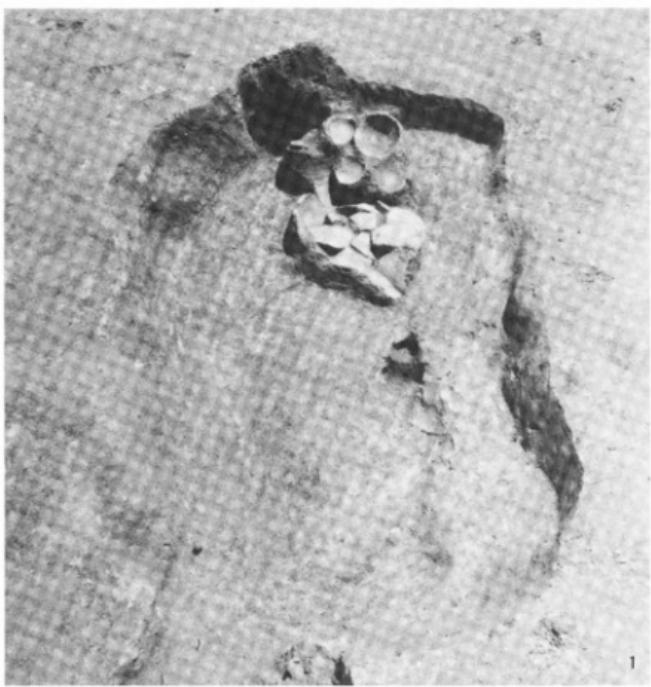
炉壁・鉄滓堆積状態



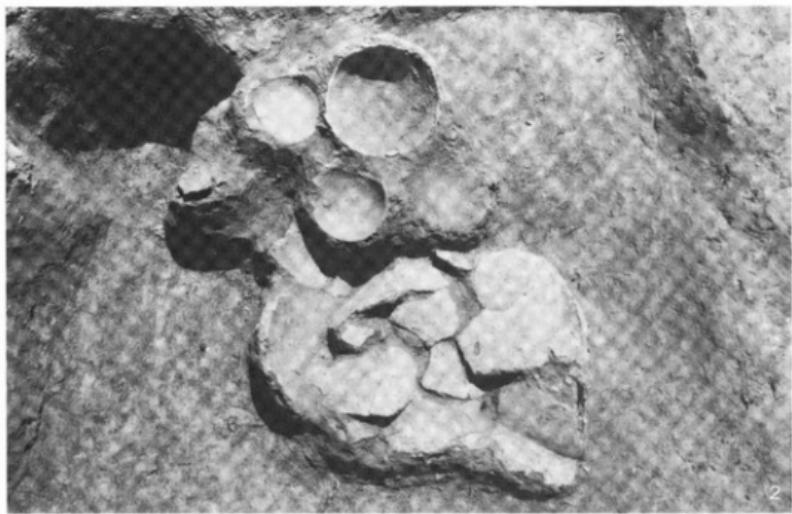
建物址 9~12



土壤 40



土 墓 1



土 墓 1 遺 物 出 土 状 態



石列造構全景（東から）



石列造構全景（南から）